
剣聖將軍記

やま次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣聖將軍記

【NZコード】

N43359Y

【作者名】

やま次郎

【あらすじ】

室町幕府第十三代將軍・足利義輝

彼ほど幕府の復活に力を尽くした人物はいなかつたと思う。八代義政以降、彼前後の將軍はどれも見ても傀儡將軍でしかなく、自身の力で將軍親政を目指していたのは彼だけだったのではないか。儘くも時の天下人の間で藻掻き続けるも命を散らすことになるが、彼の周りには後に天下に名を轟かす名将たちがいた。「天下を治むべき器用有」とも称された義輝がもし自らの力（領地＆兵）を手にした

いじめられたのか？

やれやれしてしまつた細川。

第一幕 天下争乱 - 将軍弑逆 -

剣聖將軍記

序章 ～異見・永禄の変～

永禄八年（1565）五月十九日、洛中にて変事が起こった。足利幕府十三代將軍・足利義輝の住まう居館が突如、軍勢に襲われたのである。

御所を囲む軍勢は、旗印から京畿一帯を領する三好家の手によるものだと判別できた。

また三好家中でもその名を轟かせている松永氏の軍勢もあつた。

御所を襲撃している兵は一千足らずだが、三好勢は將軍を逃がさぬよう洛中全体に兵を配備しており、その数千を数えた。対する義輝側は百から一百余り。それも女子供を含ませた数である。僅かながら洛中にいた幕臣らが駆けつけてはいたものの焼け石に水であり、御所の囲みを突破して義輝の下へ辿り着ける者などは誰一人もいなかつた。まさに多勢に無勢。義輝の死は絶対であつた。

ただ義輝も座して死を待つ気はなかつた。

足利義輝、御年三十。

幕府の、武家の長として衰退の一途を辿る將軍家に歯止めをかけ、復権を目指す最中で己を高めることを忘れなかつた。その甲斐もあり、故事、礼式に精通、武家の長として恥ずかしくないよう剣術を始めとした武術を悉く修めた。南蛮渡来の鉄砲もなかなかの腕前だ。

しかし、それまでだつた。結局は個人の域を出るものではなく、読み漁つた兵法書も用いる機会なく死を迎えるとしている。それほどまでに時代は義輝に残酷だつた。

前年に三好長慶が死に、將軍親政を目指して反撃に出ようとした矢先のことだつた。今少し時間があれば、逆転も可能だつたかも知れない。

「もはや考へても詮無きこと！最後は思う存分に暴れてくれようぞ！」

この状況においても逃げ出さず忠義を尽くしてくれている家臣たちが如何に時間を稼いでいようとも、この場で自害して果てるような真似はしない。せめて一矢を報いる。義輝としての最後の意地だつた。

もはや宝物としか見られなくなつた先祖伝来の名刀の数々を次々と畳へ突き刺し、本来の形で使用しようというのだ。天下に名高き名刀と塚原ト伝と上泉信綱に認められた己の業。それが何処まで三好相手に通じるか、試す最後の機会。

五月雨は 露か涙か 不如帰 我が名をあげよ 雲の上まで

足利義輝、最後の戦いが始まつた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

洛中、三好左京大夫義重（後の義継）の陣内。

「ええい、將軍はまだ討ち取れんのか！」

義重が辺りに喚き散らす。戦いが始まつてより半刻（一時間）余り、小勢の將軍を大軍かつ奇襲したのにましては時間がかかっていた。

「少しは落ち着かれよ、左京殿」

「されど日向守。義久（のちの松永久通）めの為体（ていたらく）は田に余る。こちらからも援兵を出すべきではないのか？」

日向守と呼ばれた三好日向守長逸はゆつくつと首を横に振つた。そして若い義重を諭すよつに話し始める

「よこですか。此度のことは理由はどうあれ將軍を殺すのです。天下に悪名を轟かことになります。なればこそ、義重殿がその悪名を背負うことがあつてはなりません」

つまり長逸は自らは兵を繰り出さず、將軍暗殺を松永一手に行わせようといつのだ。そうすることにより將軍殺しの汚名は松永が着ることになり、三好家は潔白とまではいかぬとも下手人ではなくなる。それなら後々に新將軍を擁立した後に政敵・久秀を追い落とすことも可能と踏んだのだ。だからこそ共謀したふりをして將軍暗殺に手を貸していたのだ。

長逸は冷静にこの戦いの意味を話していたが、内心は少し焦つていた。それは將軍方の予想外の反撃が理由だった。

（こまでは松永勢は全滅するやもしれぬ。そうなれば嫌でも我らの軍勢を繰り出さねばならん）

四方の門から雪崩れ込んだ松永勢であったが、小笠原民部少輔、一

色淡路守ら幕府奉公衆の反撃に為す術もなく討たれていた。何故なら、主たる義輝も武術に秀でていたが、その稽古に付き合つていて奉公衆らも揃つて武術に秀でた者たちだったからである。一人で二人や三人を相手にするなど奉公衆らにとつては造作もなく、一人で十人を斬つた者すらいた。だがその奉公衆も圧倒的な数の前に力尽き、次第に数を減らしていく。

この続報に長逸は胸を撫で下ろした。どうやら計画通りに事は運ぶと。だが、そんな思惑は次に飛び込んできた報せですぐに吹き飛んでしまつた。

「も、申し上げます！將軍方と思われる一団に御所への侵入を許しました！」

「何じゃとー？」

長逸は耳を疑つた。洛中には数千にも及ぶ自軍が展開している。御所を囲んでいるのは松永勢だけとはいえ、囲みを突破できるだけの人数が発見されず近づけるわけがない。

「敵の数は分かるか！？」

「そ……それが……僅か10人足らずでして……」

「うつけが！ その程度で狼狽えるな！」

長逸が床几から立ち上がり、使番の肩を思いつきり蹴り飛ばす。その後ろで義重は「義久めがここまで戦下手とは知らなんだ」と呴きながら「日向守も落ち着かれい」と先ほどの反対の立場で言葉をかけた。

「ふん！」

憤慨しながら自分の席に戻った長逸は、蹴り倒した使番に「將軍もろとも御所内に進入した一団を討て」と命じた。後にこの判断は間違いだと長逸は悔うことになる。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

変わつて御所内。義輝は一人瞑想に耽つていた。

周囲に味方の姿はなく、あるのは無数の人垣。十は軽く超える。義輝の手には曲がつた刀が赤い鮮血を垂らしていた。

「どうした？ 来ぬのか」

「ひつ！？」

義輝はギロツと雑兵を睨みつける。そこには先ほどまでの戦意はなかつた。

ほんの僅か前、將軍を発見した松永兵は『一番手柄』と、勇んで斬りかかってきた。それを一瞬の間に斬り伏せ、二人、三人、四人と倒していく。だが、誰一人として義輝に手傷を負わせることは出来ない。雑兵共は皆、一斉に恐怖した。

「来ぬならば」ちらから参るとして

動と静。先ほどまでその場から一切動かなかつた義輝が新たな刀を畠から引き抜くと、人垣を飛び越えて一目散に松永兵に近づく。

怯える足軽を上段から一閃。バツサリと真つ二つにした。

侍大将が用いる筋兜ならいざ知らず、足軽程度の陣笠では義輝の一

等から頭部を守ることなど出来ない。ましてや義輝の持つてているのは数ある刀の中でも名刀と呼ばれる逸品である。陣笠は綺麗に二つに割れ、頭部からは鮮血が飛び散った。

返り血を浴びた義輝の姿はまるで仁王の如く、周囲を凍り付かせた。義輝は隣の足軽を横一線に斬りつけて蹴り倒し、刀身を胸部に突き立てた。さらに睨まれた足軽は持っていた手槍を力なく繰り出しが、それは軽々と躲され、脇差しで脇腹を刺された。

「ふ……、たわいもない」

屋内であることから義輝を一度に襲える人数は限られている。多対一になつたところで一人で百人と戦うわけではない。かといって槍や刀で義輝相手に満足に戦えるものなど現れず、震えた手で弾く弓など躲すのは造作でもなかつた。

突然に虚無感が、義輝を襲う。

存分に暴れて斬り死にしてやろうと意気込んでいたものの、実際に戦つてみれば力の差は歴然としていた。戦つても戦つても一方的に相手を斬るだけ。しかもここから見える敵の半数近くは戦意を失いかけている。

(これを斬つたところで、余の心は晴れまい)

ここにが潮時、やはり自害して果てるか。そう思つた瞬間だつた。遠くから大きな足音が近づいてくる。明らかに集団だ。敵の増援かとも思つたが、どうやら違うらしい。松永兵の様子がおかしい。

途端、いくつもの呻き声が上がり、足軽たちが倒れる。逃げる者を

多数いた。

「ご無事か！公方様！！」

「な……勢州！？」

驚いたことに現れたのは義輝の師・上泉伊勢守信綱その人であった。

「おやおや、こりや隨分と暴れたようじゃな」

「ト伝殿もか！」

「息災かな、大樹公」

続いて現れたのは塙原ト伝（つかはらぼくでん）。これもまた義輝の剣の師である。流石といふべきか、この状況においても周囲を眺め、軽口を叩く余裕がある。

「どうしてここへ？」

「話は後じや。まずは……」

とト伝が言い終わる前に、背後から松永兵が一人に襲いかかった。

ト伝は刀で防ぐ。が、刀が折れてしまう。ここに来るまで何人も斬つたのだろう。無理もない。刀自体が保たなかつたのだ。しかし、折れた刀で素早く相手の首筋を斬つた。また信綱は初めから刀を持つておらず（途中で失われた）、掌底（じょうてい）で相手に胸元を一撃して怯んだ隙に脇差しを心の臓へ突き刺した。

さらに一人へ松永兵が襲いかかる。一人の危険を察した義輝が後方へ飛び、畳に突き刺してあつた刀を二振り引き抜くと、そのまま二人に投げ渡した。

「師！童子切、大典太にござるー。」

「ほう……これが……」

「…天下五剣か！」

刀を空中で受け取った二人はそのままの勢いで松永兵に斬撃を繰り出す。するとまるで豆腐を切ったかのように斬れるではないか。鎧もなにもあつたものではない。

「……見事な切れ味よ」

「塙原殿。悠長に感慨に浸つていてる時間はありませぬぞ」

「お…おお、そうであつたな。大樹公、我らが来た意味、分かるであります？」

「御所よりの脱出。つまりは余に生きよ、と申されるか？」

「さてな。されど大樹公が脱出されなければ、儂と勢州はここで死んでしまうな」

ト伝の目が笑つていた。これを見て義輝は「師には敵わぬな」と咳き、死に場所と決めていた御所を脱出することに決めた。過程はどうあれ、大恩ある師一人を自分の運命に巻き込む訳にはいかない。

「北へ落ちる。よいな」

「はつ！」

義輝ら三人が走り出す。すると先ほどまで凍り付いていた一部の松永兵も動き出した。流石に逃がすわけにはいかないと感じたのだろう。しかし、義輝らに松永兵が追いつくことは出来なかつた。松永兵は御所内は不案内であり、何処をどう曲がれば北口に出るか知つてゐる義輝に敵わないこと。また何故か義輝が進む先には敵兵の姿はなかつた。あるのは死骸だけである。これを不思議に思つた義輝だったが、庭先に出たところでその答えに出会うことになった。武

士の集団が松永兵と戦っているのである。しかも武士の集団は皆が皆、目を見張るほど強く相手を圧倒していた。

「豊五郎！退くぞ！」

「叔父上！」

信綱が集団に加勢するが、信綱の加勢を必要としないほど既に一方的な展開だった。彼らが御所内の松永兵を倒したのだと義輝は理解した。

「彼らは柳生。我らの味方じゃ」

「柳生！？松永家中の者ではないですか！」

義輝は柳生の名を知っていた。何せ目の前にいる信綱本人から「柳生の者を弟子にしている」と以前に指南して貰っていた時期に聞いたからだ。その柳生、今となつては当主である宗厳を始め主立つた者は信綱に弟子入りしており、驚くべき戦闘集団へと変貌していた。それが今、義輝の味方として眼前にいる。

「細かいことは後じや。北門の近くに堀の一部がまだ普請中の場所があるじゃろう。そこから逃げるぞ」

義輝の住む一条御所は増築中であり、特に掘や土塁など外周部分を堅固にするために普請の最中だった。それもあらぬ襲撃に備えるためだつたが、普請が終わる前に襲われるという結末に至つたのは皮肉としかいいようがない。

義輝一行が北へ走り出す。敵も追つては来るが、幸いにも四方に散らばつており、特に門周辺に集まつていたから向かう先に敵は殆どいなかつた。（僅かにいた兵は全て斬り伏せられた）堀の隙間から

出、土壘を飛び超えて路地に出る。流石に北門に陣取っている兵たちには見つかっているが、周囲にはそれほど敵の姿はない。とは言つても遠巻きにいるのだろうが。

「ひづりく」

柳生の手の者の一人が近くの民家に隠してあつた馬を連れてくる。これで脱出しようというのだろうが、馬は四頭しかいなかつた。

「公方様に付き従うは私と塙原殿。それに疋田豊五郎の三名にてござる」

「柳生の者は？」

「公方様もご存じのように柳生は松永の配下です。これ以上の手助けは宗厳殿の立場を思えば無理にござる。されど柳生の者が公方様をお助けしたこと、忘れぬようお願ひ仕ります」

「つむ、覚えておひづり」

四人は馬に跨がり、東に向けて走り出した。もちろんこれを松永兵は追いかけることになるのだが、互いの距離は広がるばかりだった。洛中は碁盤の目のように整備されており、基本的に直線で走ることができ。そこで差が出るのは馬の質であつた。義輝たちが乗る馬は実のところ柳生の者が御所近くにあつた将軍家の厩より拝借したものであり、地方の大名から献上された駿馬である。逆に追う松永兵は騎馬を許されたとはいえ身分の低い者が乗る駄馬であり、完全武装をしているために重い。その差が、距離となつて現れていく。

義輝たちは五条大橋を越えて山科へ向かう。不思議とその先には三好勢の姿はなかつた。何故なら、松永の使番に扮した柳生の者が、「将軍は伏見へ逃亡した」と偽りの報せを送り、義重と長逸は全軍を南へ向けていたからである。

【続く】

第一幕 天下争乱 - 将軍弑逆 - (後書き)

初投稿、やま次郎と申します。

元々こういう小説が好きでいろいろと妄想（笑）しているネタがいくつもあり、どこかで書いてみたいと思つておりました。こうやって物語を書くのは初めてなのでアドバイスなど頂ければ幸いです。

また架空戦記なので史実と違う状況（設定）も今回の塚原ト伝、上泉信綱、柳生のように今後も現れます。史実の雰囲気をぶち壊すような真似はしないと思いますが、何せただの歴史好きなので、そこら辺はある程度広いお心で読んで頂ければと思います。

さて、参考までに永禄の変頃の各地の情勢を下記に書いておきます。

永禄八年（1565）

上方では三好長慶（前年に死去）が死んだばかりで権力の空白が起こっている。

中国では毛利元就が尼子の月山富田城を猛攻中。

東海では織田信長が美濃攻めの真っ最中。途中、伊勢にも手を出している。

甲信越では武田が上杉と直接対決から外交戦へと路線変更。上杉は関東重視の方針。

関東では北条家が対上杉、対里見戦で一進一退。

奥羽では伊達と最上が融和。蘆名が武田と組んで上杉にちょっとかいを出している。

九州では大友が北九州を席巻中。島津は薩摩、龍造寺は肥前統一前。

また今回の永禄の変で記述していない義輝の妻子がどうなつたかで

すが、これは史実通りとしています。

生母・慶寿院 自害
正室・御台所 捕縛
側室・小侍従 殺害
子息・輝若丸ら三人（二人？）殺害

最後に個人的なことです、好きな武将として「時代（条件）が違えば、評価の変わつていただろう」という境遇の武将が好きだったりします。

例えば…

足利義輝（室町幕府が江戸幕府のよつに盤石なら名君？）

毛利隆元（毛利三矢が健在なら対織田戦線が変わつた？）

織田信忠（信長が横死せず、普通に天下を引き継いでいたら？）

松平信康（切腹せず、関ヶ原あたりを迎えていたら？）

武田義信（彼が武田を継げば信玄のように四面楚歌に陥ることもなかつた？）

長宗我部信親（彼が存命で関ヶ原を迎えていたら？）

三好秀次（彼が生きていれば家康の天下はなかつた？）

ま、このように一代目辺り武将が好きなのですが、この辺りは次回作（もうかよつ！？）で書くかも知れませんね。あつ、でもオーソドックスに信長とかも好きですよ。（でも信玄よりは謙信の方が好きです。それは物語の途中からも出てくると思いますが…）

以上、今後とも宜しくです。

逢坂の関。

一条御所より脱出した義輝ら一行は近江へ逃れるべく、是が非でも通らねばならない場所である。古来より都のある山城と近江を繋ぐ古い関所である逢坂の関は、近江国大津に在する三井寺の支配下にあり、親足利氏の立場にあるのだが、三好・松永らが義輝を襲うのであれば、この地に兵を配しているはずである。案の定、関所に三井寺の者は見えず、三好方と思われる兵士の姿が見える。三十人ほどだろうか、見えない位置にいる者も含まれば多くても倍の五、六十といふと考へた方がいい。

「むハ……如何するか」

義輝は物陰に隠れて様子を窺つているが、はつきりいつて相当量の返り血を浴びている義輝たちの格好は異質であり、とてもすんなりと通れるとは思えない。かといっていづれは虚報で伏見辺りを彷徨つてゐる三好・松永の追つ手も義輝の行方に気が付くはずであり、悠長に考へてゐる時間はなかつた。

「こひなれば強行突破しかないか……」

御所での壮絶な乱戦を思へば、この程度の戦いは容易に思えた。しかし、それを師ら一人に伝えようとしたところ、言葉が詰まつた。

塙原ト伝と上泉信綱。この二人が肩で息をしていたのだ。特にト伝の息切れが激しい。義輝は我に返つた。二人はかなり高齢である。

信綱は六十手前、ト伝に至つては七十半場である。その一人が危険を顧みず、御所へ討ち入り、挙げ句ここまで騎馬で疾走してきたのである。壯年である自分ですら多少息を荒げているのだ。ここで強行突破をしようものなら自分は抜けられても師一人は力尽きて死ぬだろ。本来なら將軍である義輝は、師を犠牲にしてでも生きるべきなのだろう。しかし、それが出来ないのが義輝といつ人間だった。

そこへ、偵察に出ていた疋田豊五郎が戻ってきた。この男、信綱を叔父と呼んでいることからも一族の者なのだろうが、歳は若く義輝と同年に思えた。剣の腕も申し分ない。頼りとするならこの男だろう。

「叔父上、意伯が戻つて参りました」

「ああ、間に合つたか！」

サツと豊五郎の後ろから意伯と呼ばれた男が現れる。

「公方様、紹介が遅れて申し訳ござらぬ。こちらは我が甥の疋田豊五郎。そして者は鈴木意伯と申し、一人とも我が門弟にござる」

「つむ、一人ともよき面構えじや。また豊五郎とやら、剣武の才は叔父譲りと見える」

「その御言葉、この豊五郎にとつて最高の褒め言葉にござります」

豊五郎が深く頭を垂れる。その下の表情は言葉通り嬉しそうである。若さ故か、正直に顔に出ることは悪いことではない。義輝もそのことで多少は緊張が解ってきた。

だが意伯が戻つてきたのはただ義輝に紹介するためではない。

「もうまもなく大和へ向かつていた明智殿がここへ参ります。合流

後、関所を突破いたしましたよう

そう言うと、近くで集団が近づいてくる足音が聞こえた。足音の聞こえた方へ視線をやると、身なりの悪い十人程度の集団がこちらへ近づいてくる。咄嗟に刀の柄に手をやる義輝だつたが、集団は五間（約10メートル）ほどの距離で止まる、先頭にいた一人だけが近づいてきた。

「このような格好で公方様に御前に参上いたすこと、お許しを。某は明智十兵衛光秀と申します。後ろの者らは皆、公方様の御味方にござります」

明智光秀と名乗る者の格好は粗末だが、物腰は穏やかで高位の武家の出であることが分かつた。これが將軍家再興に大きな役割を果たすことになる光秀と義輝の初めての出会いであった。

「急ぎます故に概略のみ説明させて頂きます。まず私が敵の注意を引き、疋田殿、鈴木殿を先頭に後ろの者らが関所へ乱入いたします。公方様は塚原様と伊勢守様らと共に関所を抜けて下さりませ。坂本まで行けば、兵部大輔（細川藤孝）様の兵があります

「兵部が？」

義輝はここまでの一連の出来事を思い返し、疑問に思つた。突如、御所を襲われた義輝。そこへ諸国を放浪しているはずの師一人が現れ、明智と名乗る者が関所突破の支援に来た。さらには腹心の細川藤孝が兵を率いて坂本にいるという。これが何を意味するのか、義輝には分かる。つまりは事前に三好・松永が暴挙に出ることが分かつていたのだ。ならば、なぜ自分に報せなかつたのか？

そんな義輝の疑問を察したのか、光秀が答える。

「実は此度の襲撃、公方様ではなく覚慶様と周蒿様を狙つたものでした」

「なんじゃとー？」

覚慶、周蒿とは義輝の弟たちのことだ。覚慶は興福寺、周蒿は相国寺で仏門に入つてゐる。

「兵部大輔様は初め、これは三好・松永の公方様へ対する恫喝と考えました」

「で、あらうな」

昨今、將軍職は義輝の祖父・義澄の血統が受け継いでいる。義輝の父・義晴には兄弟がないため、その血を受け継いでいるのは義輝の他は第二人と義輝の子たちとなる。しかし、將軍職を受け継げる血統はもう一つあった。

十代將軍・義植の血統である。

義植と義澄は將軍職を争いあつた間柄。一度は將軍職を追われた義植が西国最大の大名であつた大内義興と細川高国の支援を受けて義澄を打ち倒し、將軍職に再任された。それをまた追い落としたのが義晴である。それから義輝と將軍職は引き継がれているが、義植の血統は三好方の勢力圏で生き続けている。もし義輝兄弟、親子に何かあれば將軍職を継ぐは義植の血統となる。

「それを知つたのが一日前。公方様に仔細を御報せする間もなかつた故、兵部大輔様は独断で我らを救出に差し向けてました。その途上で襲撃の対象者に公方様が含まれてることを知り、周蒿様救出に向かっていた塚原様、上泉様、そして覚慶様救出に向かつた我らが

急遽公方様の救出に向かつた次第」

光秀の説明で概ね理解した義輝だが、同時に弟たちの安否が気になつた。

「（）安心あれ。覚慶様救出は和田伊賀守（惟政）様が、周蒿様救出には一色式部少輔（藤長）様が向かつております」

またしても光秀が義輝の心を察して答える。

「大樹公、時間が惜しい。積もる話は坂本に着いてからにしようが少しばかりの休憩で息を整えたト伝が促すように義輝へ話しかける。

「左様ですね。で、明智とやら。如何にして奴らの注意を引き付ける？」

「はつ！これに（）ぞいります……」

光秀が後ろを向き、手招きで配下の者を呼び寄せる。配下の者は、細長い木箱を担いでおり、光秀の隣にその木箱を置くと、蓋を開けて中身を取り出した。

「これは……鉄砲ではないか！？」

木箱の中に入っていたのは鉄砲だつた。それも三挺。

火薬、弾を込め、火薬を置き、火縄を付ける。射撃までの一連の動作を光秀は流れるように行つ。それを三挺とも行つ。

「公方様、参ります。御仕度を……」

「うむ」

光秀は鉄砲を抱えると関所から半町（約55メートル）ほどの距離まで近づく。まだ気づかれない。

配下が一挺を持ってついていく。まだ気づかれていない。

片膝をつき、狙いを定める。兵の一人が「あらの様子に気づいた。火蓋を切り、発射態勢に入る。気づいた兵が指揮官らしき男へ報せる。

まだ撃たない。指揮官らしき男は周辺に指示を出している。

バンッ！

銃声がし、指揮官らしき男が倒れた。

「次ッ！」

光秀が配下から鉄砲を受け取ると、素早く射撃体勢に移る。

バンッ！

先ほどとは違い、即座に撃つた。一人倒れる。

再び鉄砲を受け取り、構える、撃つ。もう一人倒れる。

「今じゃ！」

鉄砲を放り投げると、抜刀、配下に合図を出す。後方に控えていた

残る八人が一斉に弓を構え、放った。八本の矢が飛ぶ。しかし、どれも三好兵を仕留めるには至らない。だが兵たちは動搖している。

「つおおおお……」

大きな喚声を上げ、豊五郎と意伯を先頭に武者たちが閑所へ乗り込む。動搖している雑兵など豊五郎の敵ではない。即座に一人斬り伏せる、二人、三人と斬りつけた。それに負けずと意伯も二人を斬りつける。中には反撃してきた兵もいたが、力の入っていない斬撃は簡単に防がれ、返す刀で冥土へ送られた。

光秀配下の男たちも大いに暴れる。が、こちらはそれなりの腕は持つとはいえ屈強の者というわけではない。反撃を受けて負傷する者もいる。うち一人が手槍で肩を貫かれる。

そこへ義輝が騎馬で乗り込んできた。

横から割り込んで馬腹をそのまま三好兵にぶつけ、吹っ飛ばした。そして男の肩に刺さっている槍を刀で斬り落とした。

「あ……ありがとうございます……」

「よい。それよりも先へ行け。その怪我ではまともに戦えぬ」「し……しかし……」

「構わぬ」

その言葉に男は躊躇する。男の使命は義輝を守ることであつて、義輝を置いて先へ行くことなど出来ないので。

「大樹公の護衛は我らに任せよ」

同じく騎馬で関所に乗り込んできたト伝が義輝と同じように男へ脱出を促す。だがそれでも男はこの場を離れようとしない。残った片腕で刀を構え、義輝を守ろうとする。

(「この男も命を賭して余を守りつとしておる……）

御所で多くの者が死んだ。苦難を共にしてきた忠臣たちが多く。そして名も知らぬ目の前の男の命も消えかけている。これ以上、自分のために他人を死なせたくない、という想いが込み上げてくる。

「ならば余から離れるな。余と共にあれば、死なせはせぬ」

と言つて義輝は騎馬から降りた。

「大樹公！？」

この行動にト伝と男は驚く。しかし、義輝は自ら敵兵に近づき、斬撃を振るつ。やむ得ずト伝と信綱も馬から降りて義輝を追いかける。

将軍の存在に気づいた三好兵が一斉に義輝へ近づく。相手は四人。

「義輝公！？」

義輝の下へ向かう敵兵に気づいた光秀も慌ててその場を離れる。

三好兵の一人が手槍を義輝に突き出す。身体を捻つてこれを避け、右手で槍を掴む。そのまま力任せに槍を引っ張ると、左手の刀で三好兵の喉元を斬り裂いた。血飛沫が飛び、義輝の身体を覆う。それに一瞬戸惑いを見せた兵たちを義輝はギロリと睨み付けた。

赤く染まつた義輝の姿を見て、兵たちは怯えた。為す術もなく一人が斬られ、二人は駆けつけた信綱と光秀に斬られた。

「公方様ッ！御自身の立場を理解なされませー！」

まるで親が子を怒るかのように、信綱が義輝を叱責する。將軍に対し、このような物言いが許されるのは天下広しと言えど剣の師である信綱とト伝くらいだろう。

「皆の者、円陣を組めー！」

光秀が指示を出し、全員が義輝のいる場所へ一斉に集まる。

「こまま一斉に東へ抜けます」

「……それでよい」

光秀は敵に聞こえないよう周囲に小声で指示を出す。その様子を隣で見つめる義輝。

（この男……、鉄砲が得手だけでなく剣術も達者ときた。しかもこの状況で適格に指揮を執るなど、一廉の将と見たが……何者だ？兵部の家臣ではあるまい）

義輝は光秀に対し、強い興味を持つた。光秀が藤孝の家臣ならば、何かしらの折に見かけたことがあるはずだったが、それはない。何処かの家中の者が藤孝に協力しているのだろうと思ったが、何処の家中か想像つかなかつた。

義輝がそんなことを考えているなど露とも知らない光秀は、指示を出し終ると配下に合図を出した。

「行けッ！」

全員が一斉に東へ駆け出す。そつはさせまいと三好兵も立ち塞がるが、数こそ三好方が多かつたが、その強さは義輝方が圧倒的だつた。そもそもこの襲撃の指揮を執つてゐる三好長逸は最初の襲撃で片が付くと考えており、この地に配してゐた兵は言わば形だけの存在であり、数を集めただけだつた。名実ともに『剣豪』である義輝らとまともに戦える者はいない。まさに圧倒的だつた。このまま戦い続ければ三好兵を全滅させてしまうのではないかというほどに。しかし、義輝たちの目的は関所の突破であつて敵の殲滅ではない。最初の一撃で包囲網が破られると、堰を切つたように義輝方が囮みを抜け出た。それを追う余裕は、三好方にはなかつた。

負傷四名。義輝たちは一人の死者も出すことなく逢坂の関を突破した。この先是江南に勢力を持つ六角氏の勢力圏であるために容易に追つ手を差し向けることは出来ないと思われる。義輝は突然の襲撃から生還したのだ。

歴史が変わつた瞬間だつた。

【 続く】

第一幕 脱出 - 明智十兵衛登場 - (後書き)

第一回、投稿です。

いや、文章を書くって難しいですね。戦闘シーンとかもう大変です。さて、早くも明智光秀登場です。本文中では何処かの家中と書いていますが、ますぐに明らかになりますし、想像通りです。特に特別な設定はありません。（ただ早く登場させたかっただけ）

また更新頻度ですが、ある程度の構想は出来上がっているので上手く行けば1週間に1回（目標は2回）出来ればと思っています。良ければ続けて見て頂ければ嬉しいです。

第三幕 逃避行・三好・松永の追撃・

五月十九日、夕刻。

大津の宿場で馬を手に入れた義輝一行は、近江坂本で細川兵部大輔藤孝の軍勢と合流した。

「上様…ご無事で！」

「おお、兵部…」

義輝の姿を確認した藤孝が駆け足で近寄る。また義輝も腹心の出迎えによつやく安堵感を覚えた。

「兵部の機転の御陰ぞ！大義じや！」

「いえ、上様の身を危険に晒してしまいました。この不始末…御詫びのしようがございませぬ」

藤孝が地面に額を擦りつけ、平蜘蛛の様に平伏して謝罪の言葉を口にする。

「よい…よいのじや。余はこの通り生きてある」

「はつ…。塙原様、伊勢守様、上様の御助け頂いた御恩、一生忘れませぬ」

藤孝は僅かに上体を上向け、義輝の両隣に控えるト伝と信綱に礼を述べる。

「それは違つぞ、兵部。恩を受けたのは余であり、そちではない」

と、言つと向き直り、義輝は自分の救出に効力した者たちへ話しかける。

「塚原殿、信綱殿。これまで方々より頂いたものは数知れず、尚も窮地を救つて頂きました。その礼として、その童子切と大典太を差し上げます」

これには流石の一人も驚いた。童子切と大典太は義輝の持つ鬼丸国綱、二条御所で失われた三日月宗近、甲斐国久遠寺に納められる数珠丸と合わせて『天下五剣』と称されるほどの逸品である。それを下賜されることは、剣術家としては最高の誉れ。

「その一振りは天下の名刀。名刀は使い手を選びます。御一人であれば、申し分はござらぬ」

「左様か、ならば頂いておひづ」

素直に礼を受け取る信綱に対し、ト伝は刀を手に取つて黙り込む。そして……

「儂は遠慮しておひづ。近く、まともに剣を振るひづと適わなくなる身じや。此度の事で、それがよう分かつた」

「何を仰います！塚原殿の剣捌き、まこと見事なもの。まだまだ若い者には……」

「儂のことは儂が一番よう知つておる。だからといって信綱殿が貰うことにケチを付けているわけではない。儂が持つよりは、豊五郎、そちが貰つておけ」

「わ……私がッ！？」

突然の指名を受けた豊五郎は思わず仰け反つた。驚きで次の言葉が出来ないほどに。

「無論、師の信綱殿と大樹公の許しがあればだがな」
「私なら構いませぬ。豊五郎の腕前、けしてその刀に劣らぬものと
思つております」

「余も異存はない。豊五郎にも恩賞を与えなければならぬしな」
「は……有り難く頂戴いたしまする」

大きな体躯を小さくして刀を受け取る豊五郎。また鈴木意伯には義
輝が持つていた正宗の脇差しが与えられた。

「さて明智にも何か褒美を与えねばならぬが、すまぬ。今の余には
そちに『えられるものがない』

「私など気にかける」ともいわこませぬ。その御気持ちだけで嬉し
ゆづりござこます」

「そうか」

「それよりも公方様。まずはこの場を急ぎ離れましょ」
「ん？」

今いる坂本は六角氏の勢力圏内とはいえ、三好の勢力圏とも近く、
奴らが將軍を襲うという暴挙に出た以上は何があつても不思議では
なかつた。

「離れるといふことは、朽木谷か？」

朽木谷は湖西・近江高島郡に位置する將軍家の避難所である。先代
の義晴も京を追われる度に坂本より朽木谷へ避難した。幼少期の義
輝も同行している。

「は……ますは」

「ますは……とは、如何なることじや？」

「実はこの光秀、朝倉家に仕えております」

「左衛門督にか？」

藤孝が補完するよつに話す。

「……ふむ」

義輝が考え込む。

越前一国を領する朝倉を頼ることは理解できなくもない。しかし義晴方として京に軍勢を送り込んでいた先代の孝景とは違い、現当主の左衛門督義景は上方の政情には一切の興味を示さず、義輝の協力要請を何度も理由を付けて断つていた。そのため、義輝は朝倉が今さらになつて自分を受け入れる意味が理解できないでいた。

「我が主は公方様を受け入れることを了承しております」「まことか」

光秀はまるで以前から決まつていたかのように淡々と話すが、実はこの時、光秀は嘘を言つていた。確かに光秀は朝倉家に仕えているが、義景は義輝がどのような状況下にあるかまったく知らないでいた。そもそも興味がないのだ。しかし、光秀には考えがあつた。一方的に義輝が越前へ赴けば、義景は受け入れるしかないと。

「うむ。ならばともかく朽木谷へ参るとよつ。兵部、案内を頼む」「はつ、承知いたしました」

義輝一行は藤孝の軍勢に守られながら朽木谷を日指すことになつた。

京・三好政康邸。

將軍・義輝の暗殺に失敗した三好三人衆、松永親子が集まっていた。

「あれだけの軍勢を擁しておきながら將軍を取り逃がすとは何たるざまか！」

開口一番、松永弾正少弼久秀が実行犯である三好長逸らを罵った。久秀には分かっているのだ。長逸が実子・久通に將軍暗殺の汚名を着せるべく、積極的に兵を動かさなかつたことを。それが將軍を逃がしてしまつた最大の要因となつたことを。仮に三好勢が洛中に配していた兵を全て將軍暗殺に向ければ、流石に義輝も命はなかつただろう」とは明白だつた。

「ふん、貴様とて覚慶に逃げられておるではないか」

事実、久秀は担当していた興福寺の覚慶の捕縛に失敗しており、まんまと逃げられていた。が、この事自体は將軍に逃亡「された」と訳が違う。

「將軍に逃げられる」と、仏門に入つてゐる弟に逃げられることを同列に扱つて貰つては困る」

二人は責任の擦り付け合いに終始してゐる。何の意味もない会話だ。それよりも今後、どうするかが問題であり、政康がその事を指摘した。

「まずは將軍の行方を捜さねばならぬ」

「將軍は逢坂関を通つたのであらう? ならば六角領に逃げ込んだのではないか?」

逢坂関で將軍一行らしき人物は通つたことは報せを受けていた。ならば先に義輝が京を追われた際、江南に勢力を持つ六角承禎（義賢）の援助を受けてるので、今回もその伝手を頼つたものだと思われた。

「いや、それはない」

と、久秀が即座に否定する。

「なぜ言い切れる」

「六角領に將軍が逃れた、といつ報せを受けておらぬからだ」

「だからなぜそう言い切れるかと聞いておるのだッ!」

長逸が声を荒げる。しかし、久秀は惚けたまま答えようとしない。長逸は確かに三好一門ではあるが、久秀も前当主・長慶の娘の正室に迎えておりほぼ同格にある。現在の当主である義重から問われない限り、仔細を明かさなくとも良いのだ。（ちなみに義重はこの場にいない）長逸は目的こそ同じ為に行動を共にしているが、久秀のこういう独断性の強さとこりを嫌っていた。

「それよりも將軍の御台を捕らえたと聞いた。まことか?」

「ん? ああ、確かに捕らえてはいるが……」

「ならば儂に渡して貰おう。使い道がある」

「それは構わんが、それよりも將軍の行方だ。このままでは拙い」

長逸にとって、將軍の御台などどうでもいい存在だった。それより

も將軍の息の根を止めなければ、今ある立場が危うい。それが大事だった。

「將軍は恐らく朽木谷だ。仕留める氣があるのなら軍勢を遣わせ「朽木谷か…確かにその可能性もある。が、兵を出せば六角が黙つてはいまい」

「ああ、その心配はない」

なぜか六角のことになると久秀は確定的なことを言った。しかし、当の久秀自身がその問い合わせに答える様なことはなかつたために理由は定かではなかつた。ただ久秀の言つことを事実として受け止めるしかなかつた。將軍を京から追つたにも関わらず、長逸らは追い詰められていた。

「下野（政康）。阿波より義親（後の足利義栄）を呼び寄せておけ「なに？しかし將軍は健在だぞ？」

「構わぬ。もはや將軍を討てるかどうかは問題ではない。時間との勝負だ」

三好三人衆と松永久秀の口論見は、將軍・義輝を暗殺し、阿波にいる足利公方・義親を新たな將軍へ据えることだつた。言いなりにならない義輝に代わり、義親を將軍に天下を采配する。なに、酒と女を与えていれば何とでもなる。そう考えていた。

「わかつた。ともかく我らは朽木谷へ兵を出す。それでいいのだな？」

長逸が久秀に確認する。語氣から納得のしてないことは分かるが、久秀の言つとおりにするしか方法がないことを理解しているため、やむを得ず従つ。

「ああ、それでよい。ともかく御台を我が屋敷に移して貰ひ。まずはそれを急げ」

そう一方的に命令した後、久秀は屋敷を退去した。最後まで久秀は將軍暗殺に失敗した我が子へ言葉をかけることはなかつた。

＝＝＝

五月十一日。

近江高島郡・朽木谷城

この地で義輝はよつやく一時の安息を得ることが出来た。この時までに、義輝には吉報と凶報の二つが届けられている。

吉報とは和田伊賀守が興福寺の覚慶救出に成功したということ。凶報とは一色藤長が相国寺の周蒿救出に失敗したこと、である。

またこの地に着くまでに剣術の師である塙原ト伝が単独で陣列を外れ、姿を消していた。これについてはそれほど気にはしなかつた。元々気まぐれな人物であり、単に役目を果たしたから去つて行つただけだろう。

しかし、この地での安息は義輝の気を一時でも休ませてはくれなかつた。

(余はまんまと生き延びてしまつた。家臣を見捨て、妻子を守れず……何が將軍ぞ！何が武家の棟梁か！)

義輝はこれまでのことについて自問自答を繰り返していた。だが前向きな答えは一向に出ない。不甲斐ない今の自分を許すことが出来ないのだ。

そこへ義輝を突き動かす一つの報せが入つてくる。

三好勢凡そ五〇〇〇、朽木谷を日指して行軍中。

瞬く間に城内は戦慄した。朽木家が擁する兵は最大で五〇〇ほどであり、まともに三好勢と戦える力はなかつた。報せを受けただけで城内は混乱に陥り、誰もが義輝へ退去を進言してきた。しかし、義輝はそれらを一蹴する。

「狼狽えるでないわ！うぬら我が奉公衆である。三好輩など恐れるに足らず。堂々と迎え撃てばよい」

とは言つたものの、義輝もまともに戦つて勝てるとは思つていない。しかし、もう逃げるのは嫌だつた。それよりは堂々と戦い、死にたいと思つていた。そんな義輝の胸中を知らず、藤孝は朽木谷からの退去を諫言する。

「（）で戦つては無駄死にするだけです。そうなれば塙原様らの働きが無に帰してしまいます！」

「それは……分かつておる！しかし余は、御所で家臣らに冥土で会おうと言つた。このままおめおめと生き延びれば、あの世にいる妻子にも寂しい想いをさせる」

義輝は軽い自暴自棄に陥つていた。安息の刻が義輝に考える間を与えたが、いくら考へても將軍暗殺に及んだ三好・松永らに勝てる方策は思い浮かばなかつた。だから、ならば、とここで死ぬ決意を決

めたのだ。

「なりませぬ！なりませぬ！」

藤孝が必死に翻意を促す。しかし、義輝は一向に取り合わない。その間にも三好勢は朽木谷へ僅か一刻（一時間）のところまで迫っていた。

「良かつた！間に合いました！」

そこへ明智光秀が飛び込んで来る。

「公方様！今すぐ越前へ御移り下さりませ。国境まで行けば朝倉左衛門尉（景紀）様が出迎えに参ります」

「光秀殿。それはまことか？」

その報せに藤孝が喜色を浮かべる。

「はつ！道中に浅井備前守（長政）様の御領地がありますが、通行の許可は得ております」

「なんと！」

光秀は義輝と共に朽木谷へ着いてすぐ、越前へ戻っていた。それより僅かに一日、朽木谷に戻ってきたばかりが出迎えの仕度を万端整えて来ていた。並の才能ではない。（実際は一乗谷まで行かずに敦賀の景紀を訪ね、浅井の小谷城へ赴いて船で琵琶湖を越えて朽木谷へ戻った）

「よい、明智。余はここに残る」

が、尚も義輝は動こうとしない。

「何故ござりますか」

無礼と承知ながら、光秀は義輝へ理由を聞いた。

「越前へ逃れたところで、余はまた三好から逃げ続ける日々を送るだけじゃ。奴らには勝てぬ。ならばそのような生き恥は晒しどうない。ここで戦い、せめて一矢だけでも報いてくれる」

と、己の決意を告げる。が、光秀はそれをまったく意に介さずに自らの想いを述べた。

「勝てまする！」

「なに？」

「勝てる、と申しました！」

義輝は光秀の“勝てる”という言葉に心を動かされた。三好家との戦いは今回だけではない。天文一八年（1549）に三好長慶が管領・細川晴元を追つた時よりずっと続いていることである。それから一六年、義輝はずつと三好家打倒に費やしてきた。その三好家に、この男はいとも簡単に“勝てる”という。心を惹かれない訳がなかった。

「朝倉は二万の兵を抱えております。また盟友・浅井も一万余の兵力を有しております、若狭には公方様の義弟・義統様があり、江南の六角殿も公方様の御味方にござります」

光秀は都合の良いことを言い続ける。確かに表向きは光秀の言うとおりだ。しかし、現実はそうはいかない。朝倉は加賀一向宗との交

戦中であり、一万の兵を上洛させることは不可能。また若狭も現当主の義統と前当主の信豊との間で内乱が起こっている。さらには浅井と六角の関係は最悪であり、將軍の命と言えど協力するとは思えなかつた。しかし、光秀にとつてはそんなことはどうでも良かつた。都合の良いこと並べ立てても義輝へ翻意を促し、越前への動座に同意してくれればいいのだ。現に義輝の心は揺れ動いている。義輝としてはここで華々しく死ぬのも良いが、本音としては苦しめられてきた三好家を滅ぼし、妻子や家臣たちの仇を討ちたいという気持ちがある。それを光秀は知つていた。

「さうには越後の上杉様も、公方様の為に兵を動かされましょう」

これがとどめの一撃となつた。もちろん光秀は越後国主・上杉輝虎のことなんて全く知らない。知つてているのは義輝の要請に応え、五千もの兵と共に上洛したことだけだ。しかし、そんな大名は全国の何処にもおらず、義輝が越後上杉を頼りとしていることは簡単に想像できた。

そのことを指摘された義輝も、胸中では“輝虎ならばあるいは……”とこう想いがないわけではない。

「……分かつた。余は越前へ移る」

ようやく義輝が越前への動座に同意する。しかし、義輝には一つ心配の種があつた。

「元綱。そなたも余と参れ」

朽木弥五郎元綱。この朽木谷一帯を治める領主であり、幕府奉公衆の一員である。既に奉公衆は瓦解しており、生きている者は僅かで

ある。元綱はまだ十六であり、死なせたくなかつた。

「いえ、公方様の御供をしたいところですが、朽木谷は我らの本貫にござります。当主たる私が離れる訳には参りませぬ」

「ならぬ！ならぬぞ！そなたが動かねば、余も動かぬ！」

これ以上、家臣を失いたくない義輝は、是が非でも元綱を連れて行くつもりだった。そこへまたしても光秀が助言する。

「元綱殿。我らはこれより公方様に伴つて越前へ落ちます。まもなくこの地には三好勢が押し寄せて参りますが、いきなり攻撃を仕掛けるような真似はしないでしよう。降伏の素振りを見せ、半日だけ持ち堪えて頂きたい」

「半日？それで良いのか？」

「はい。半日たつたところで、本当に降伏して下さつて構いませぬ」「しかし、奴らは公方様の居場所を聞き出そうとするのでは？」

「その時は正直に御答えになつて下さい。越前にあると

「答えて良いのか？」

「ええ。そうすればこの地を追われることも命を取られることもありますまい。どうせ三好が公方様の居場所知つたところで、何も出来ませぬ」

光秀の言うとおりだつた。越前朝倉は二万の兵を抱える。京まで派兵するとなれば全軍を出すことは適わないが、越前国内で戦となれば嫌でも全軍を出す。しかも三好家が越前を攻めれば、後方を浅井家に衝かることになり敗北は必至。その上で勝つには朝倉・浅井両方に備えるだけの兵力を差し向けるしかない。しかしだでさえ周辺国に敵を抱え、本国・阿波と海を隔ててている三好家にそれだけの軍勢を越前へ送ることは不可能だつた。

「見事じゃー明智ー」

光秀の見事な策に義輝は素直に感動を覚えた。自らの胸中を図り、それらを解決する策だつたからだ。

「兵部。各地に散らばつておる者どもらに余が越前へおることを伝えい。越前にて再起を図るべー。」

「はつ！承知！」

光秀の策で立ち直つた義輝の言葉で全員が外に出る。己の役目を忠実に果たすために。

こうして義輝ら一行はようやく辿り着いた朽木谷の地から越前に移ることになった。

【 続く】

第三幕 逃避行・三好・松永の追撃・（後書き）

第一幕ですが、第二回です。（ややこしいですね）

義輝が越前へ移るのは史実の義昭に沿つてのことです。（若狭経由ではありませんが…）將軍でなかつた義昭を受け入れたのですから、將軍たる義輝を受け入れないわけがない。そう思いました。まあ本文中では光秀の独断ということになつてますが、史実でも動きを見せなかつた義景のことです。こういう展開もありかと。

またいきなり義輝の許を去つた塙原ト伝ですが、ネタバレしますが本編中ではもう登場しません。（年齢が年齢ですし）ただ時間と連載が進めば補完的にト伝が主人公の外伝を書くかも知れませんが、あまり期待しないで下さい。（信綱の方はもう少し活躍します）

追記

初投稿作品で使い方に慣れず、タイトルが分かりづらく（第二回なのに一幕とか）なつていたのを修正しました。

第四幕 越前朝倉 - 一乗谷評定 -

五月二十四日。

越前・一乗谷城。

日も落ちた頃に義輝は敦賀郡司・朝倉景紀の軍勢に守られながら朝倉氏の本拠・一乗谷へ入った。とりあえず義輝は城下の安養寺へ案内された。

翌朝、義輝は寺の庭先から一乗谷を眺めた。

朝倉家は初代越前守護・朝倉敏景が一乗谷へ本拠を移してより凡そ百年、この地から越前を治めている。本拠たる一乗谷城は一乗山の尾根に長く築かれており、南北半里強もの大きさを誇る。足羽川を天然の堀とし、東・西・南は山に囲まれている。まさに鉄壁。

昨夜は暗くて分からなかつたが、翌朝になつて一乗谷の大きさが一望できた。また城下の賑わいも流石に京ほどではないが、相当なのだ。かなりの人間が住んでいるだろつ。

(朝倉左衛門督……侮つておつたが、一乗谷がこれほど繁栄しておるとは……。案外、期待できるやもしれぬ)

朝倉一萬を自在に操るほどの男ならば、対三好戦の中核を担える。そう思つた義輝であつたが、そつそつに期待を裏切られることになる。

正午を迎える手前、左衛門督義景が家臣団を引き連れてやつて來た。形式的な挨拶を受けた後に評定を開くことになつてゐる。もちろん

三好討伐についてだ。

現れた義景の姿を見て、義輝は啞然とした。

（まるで公家ではないか……）

華奢な体躯におつとりとした顔つき。顔色も青白く何より目が死んでいる。義景の姿に、戦国武将たる威儀はまったく感じられなかつた。

反面、朝倉家臣から見た義輝の印象は違つた。

体躯は平均よりやや大きい程度だが、筋肉質な身体は戦国武将に足るものであり、顔には真新しい刀創、眼光は鋭い。また生まれからくる高貴さも漂わせている。何より数日前まで死闘を演じていた義輝からは霸気が溢れていた。

「左衛門督義景にござります。まずは上様が御無事であつたこと、祝着に存じます」

義景が挨拶する。それに對し、

（征夷大將軍ともあるう者が、命からがら恥も外聞もなく京を追われて何が祝着なものか！）

と胸中で叫ぶ義輝だつた。

「つむ。余は此度、不覚にも京を追われたが、再び京に戻り、逆賊を討ち滅ぼす覚悟である。その為にも左衛門督の力、頼りにしておるぞ」

しかし、こう言わなければならぬ今の己の無力さを呪うしかなかつた。

「勿体無きお言葉にござります。当家に全て御任せあれ。必ずや京への道、この義景が切り開いて御覽に入れましょ」

そう義景が立派に決意表明するが、その語気にはまったく力が入っていない。義輝は落胆した。これでは朝倉の兵も頼りにならない。そう思つたが、義景の後ろに控える家臣団の中にはそれなりに骨のありそうな者も垣間見えた。朝倉家とて無為に百年もの間、越前を治めていたわけではない。当主が戦に出ずとも、名将として武名を轟かせた朝倉照葉宗滴が鍛え上げし軍団は未だに健在だった。

「上様は帰洛を求めてござる。よつて上様が京へ戻られるための策を講じて頂きたい」

「よいよ評定が始まつた。藤孝が進行を行つ。その手始めに義景に對し、意見を求めた。

「当家が声をかければ、近江の浅井が合力することは必定にござります」

が、中身は正しいものだった。

浅井長政。江北三郡を治める若き太守である。永禄三年（1560）に起つた野良田合戦では六角軍一万五〇〇〇を一万一〇〇〇で破つたことは記憶に新しい。しかもこの戦、長政にとつては初陣であり、このように華々しく初陣を飾つた例は珍しい。そんなことだから、義輝自身も長政には期待を持っている。しかし、朝倉と浅井が

仲が良いことは誰もが知っていることだつた。

(他に案はないのか)

義輝と藤孝も朝倉・浅井の両家連合を基礎に物事を考えている。だが義景はそこしか考えていなかつた。そこから先の案なんて、義景にはない。何故なら義景自身、一日前まで義輝が自分のところに来るなんて思つていなく、一日前に景紀から報せを受け、もうこちらへ向かつていいというから受け入れるしかなかつた。義輝の手前、『迷惑だから出て行け』とは言えないだけなのだ。それでも一日間は考える時間があつたのだから、少なからず何か案が出てきてもよいはずなのだが、元よりそんな智恵は義景になかつた。

(それでよつも『近家に全て御任せあれ』などと言えたものだ)

そもそも朝倉は長年に亘つて浅井家としか同盟しておらず、朝倉・浅井で何事も何となると考へる風潮がある。今回のことも朝倉首脳陣はそれ以上のこととは考へていなかつた。

「皆々方、三好・松永を侮つてはなりません。先年、教興寺の合戦で三好修理（長慶）が動員し軍勢は、六万にも及びます。それを念頭に、策を講じられたい」

藤孝の話に場がざわめく。

無理もない。朝倉と浅井が上洛に動員できる兵は凡そ一万余である。それですら大軍なのだが、相手はその三倍の兵となると怖じ氣づきもする。しかし、義輝も藤孝も今の三好に六万もの兵が動員できるとは思つていない。

三好の版図は全盛期から大きく変化していないが、三好長慶を失っている。この事で上方の反三好勢力が勢いづいており、その中核が義輝なのだ。機先を制されて京を追われはしたが、反三好勢力はどれも健在。もし義輝が朝倉・浅井と上洛軍を発しても、全軍をこちらへ向けることは出来ないだろう。せいぜい三万数千、これが義輝の見立てだ。

「恐れながら……」

末席で一人の武者が声を上げる。

「何者か？」

「左衛門尉景紀の子、景恒にござります」

朝倉景恒。昨年の加賀攻めで兄を亡くし、敦賀郡司職を継いでいる若き一門である。

「景恒。上様の御前ぞ。若輩者が出しゃばるでないわ」

上席から声が飛ぶ。一門衆の筆頭として紹介された朝倉式部大輔景鏡（かげあきら）である。この発言に景恒の父・景紀も眉をしかめている。この両者、仲が悪いのだ。それも景恒の兄が加賀攻めの陣内で景鏡との口論の末に自害したからだ。

「よい。考えがあるのなら申すが良い」

義輝が制す。

見苦しい。そう義輝は感じたのだ。意見があるのなら言えば良い。それがどんな者でもだ。でなければ評定に参加している意味がない

とこうもの。それに若い者なら尚さら聞いてやらねば不満は溜まる一方となる。本来ならばこれを制するのは当主たる義景の役目だが、当の義景は景鏡寄りの考え方のようで、義輝の裁定に不満があるようだ。表情は僅かにしか変わっていないが、分かる。生まれてよりずっと人の顔色を窺つて生きて来なければならなかつた義輝だ。このくらいは読める。

発言を許された景恒は揚々と話し始める。

「まずは若狭に兵を入れるべきかと」

「若狭へ？」

「はつ。若狭は今、守護の義統殿と先代の信豊殿が争つてあります」

「つむ。知つておる」

「義統方には当家が、信豊方には三好が支援しております」

「それも知つておる」

要は若狭において朝倉と三好が代理戦争を行つてゐるのだ。現時点では義統方が優勢。しかし、予断を許さない状況にある。

「もし当家が公方様を戴いて上洛した場合、信豊方に背後を脅かされる可能性がござります。その前に、若狭を完全に義統殿でまとめる必要がございます」

「そうすれば、上洛の折に若狭の兵をも使えるか」

「御意」

流石に若狭と接する敦賀郡を治める景恒だ。若狭の事情に明るい。多くは父の景紀が手にしたものだらうが、着眼点は評価できる。

「されど余としても出来るだけ早く上洛したい。早々に若狭の争乱を鎮められるか？」

「公方様の御出馬があれば……あるいは

自らの出馬。それは義輝も上洛まで考へていなかつた。

「控えい！公方様に出馬を求めるとは図に乗るでないわ！」

「そうじやーそうじやー！」

席上から景恒に向けて野次が飛び、どれも景鏡派の者たちだらう。やはり見苦しい。これで上洛が叶うのか。そう思つたが、景恒の案は捨て難い。義統は義弟であり、若狭に自らの影響力を強めるために出て行つた方がよいかも知れない。

「よい。余が出行り。仕度を頼む

「はつーはつーーー！」

景恒が頭をぶつけるのではないかと思つほど、勢いよく頭を垂れた。よほど嬉しかつたのだろう。それほどまでに景恒は家中で孤立していたのだ。義輝の同意が得られたことで、今回の若狭出兵は景恒が采配できる。加賀攻めではないが、兄の無念も少しは晴れる。そう思つた。

「公方様。上洛を目指すには、加賀一向宗との和睦が不可欠にござります」

今度は景鏡が意見を述べてくる。元々持つていだ意見なのか、景恒に遅れまいとしたのかは分からぬが。

「我らが越前を留守にすれば、一向宗が国内に雪崩れ込んでくることは必定にござります

「で、如何にすればよい

「当家を加賀守護に任じて頂けないでしょうか。その上で加賀へ攻め入り……」

「それでは火に油を注ぐだけである」

「そ……それは……」

言葉が詰まる。結局は景恒の意見が取り入れられたのに触発され、発言しただけだったか。自尊心が強い。それだけの人物。それが義輝の景鏡評になつた。その景鏡が大きな顔をしていられる家中など、やはり底が知れている。

「事を荒立てる必要はない。要は余が上洛する間、じつとしてくれればよいのだ。奴らの大半は農民がほとんど。こちらから攻め入り、田畠が荒らされる心配がないと分かれば和睦にも応じよ」

この件については、余計な事情を挟まないためにも藤孝にやらせることにした。幕臣が直接出向き、やりとりをした方が相手の感情を刺激しないだけ和睦はまとまり易いだろうと思われた。

（されど、若狭を手に入れたとしても兵が足りぬ。左衛門督も思つたほど頼りにならぬし、やはり頼りにすべきは……）

義輝は静かに目を瞑つた。脳裏に思い浮かべたのは一人の人物だつた。

【続く】

第四幕 越前朝倉 - 一乗谷評定 - (後書き)

第四回です。

ここまで順調に書き上がりました。このペースを続けたいといひです。

また今まで義輝の呼称が様々で分かり辛いと思います。（そうでもない？）

上様：直臣（藤孝）や守護大名クラス（義景）
公方様（義輝公）：陪臣（光秀や朝倉家臣）
大樹公：身分に關係のない者（ト伝など）

という分け方にしています。（ただ信綱の場合、武家に仕えていた名残で公方と呼称しています）また、雰囲気で変える場面もありますが…

追記

初投稿作品で使い方に慣れず、タイトルが分かりづらく（第三回なのに「幕とか」なつっていたのを修正しました。

第五幕 希望 -上洛への道-

越前一乗谷。

評定は未だ続いていた。

「上洛するとなれば、やはり六角殿へ支援を頼むべきであろう」

「されど六角と浅井は敵対してあるぞ」

「そこは公方様に取りなして頂くしかあるまい」

話題は六角家についてだった。

湖西を通るにしろ、湖東を通るにしろ上洛を図指すならば必ず六角領を通過することになる。そのためには江南に勢力をもつ六角家の支援は不可欠である。しかし、朝倉の家臣たちが考えるほど義輝は六角承偵を頼りとはしていなかつた。

六角家はそもそもずっと義輝方として三好家と戦い続けており、江南では今でも大きな勢力を誇っている。義輝方の最有力と言つても過言ではない。それは間違いない。それなのに、なぜ義輝は六角に期待していないのか。その原因はこれまでの経緯にあつた。

六角承偵は何度か三好家に勝つてゐる。永禄元年（1558）に義輝が帰洛を果たしたのは承偵の御陰であると言えるし、教興寺合戦の前哨戦である將軍地蔵山の合戦では三好方に勝利し、久米田合戦では長慶がもつとも信頼する実弟・三好義賢を討ち取つてゐる。しかし、何故か承偵はその後に軍勢の動きを鈍らせ、最終的に教興寺合戦で義輝方（六角・畠山連合軍）は敗北し、三好の天下を決定づけた。

(一) 一番であやつは頼りにならぬ

もし教興寺合戦で承偵が畠山軍支援に動いていたら、そう思わなかつたことはなかつた。

「その話はもうよい。承偵には遣いを出す。兵を出すとなれば申し分ないが、領地の通行を認めるだけでも構わぬ」

堂々巡りの議論をここで続けていても埒はないと思つた義輝は、決定を下した。

「されど上様。六角殿の支援なれば三好の兵を上回る」と呟いて、「ぬ」

藤孝の指摘通りだつた。

皆の脳裏には、朝倉・浅井で二万。若狭勢が三千。これに六角勢を加えることによって三好に対抗できると考えている。

「分かつてある。されど、当てがないわけではあるまい」

「と、仰りますと?」

「ほれ。朽木谷で明智が申しておつただらうが」

「まさか……上杉ー?」

上杉の名が出ると、場がどよめいた。上杉の名は、朝倉家中でもよく知られている。朝倉にとつて正式な同盟国は浅井家だけだが、上杉家とは加賀を中心にして勢力を有する一向一揆との戦で何度も連携している。また永禄二年(1559)に上杉輝虎が上洛した際には北陸道を通り、領地の通行許可をとれた朝倉家へ礼を言つたため一乗谷も訪れていた。

「されど上杉様は越後。上方まで来られるかどうか……」

「無理は承知じや。輝虎も余が任じた関東管領職を全うするため、信濃や関東へと忙しく働いておろう。そんな輝虎に頼むが心苦しくはあるが、余の苦境を訴えるしかあるまい。あの折と同じく、五千でも構わぬ。強兵たる越後兵ならば、万騎に值しよう」

この発言には義景を含め、朝倉家臣は驚いた。義輝は輝虎へ対し『上洛して来い』と命じるのではなく、『来て欲しい』と頼むのだといつ。これほどまでに將軍が臣下の者に謙ることは珍しい。正直、義景としてもこの自家との扱いの差はいい気はしなかつた。

本来ならば義輝にとつてここで義景の機嫌を損ねることは良いことではないのだが、無視した。どうせ今のままで上洛は叶わない。それよりは他を特別扱いしているところを見せ、奮起してくれた方がいい、と。

だが問題は誰を遣わすかだつた。上杉家との連絡役は大館晴光が務めていたが、先月に亡くなつていていた。また他の幕臣たちは多くが二条御所で討ち死にしたか、離散しているために今は藤孝しかいない。この地で待つていれば誰かしら帰参してくるだろうが、誰がいつ来るか分からぬのを待つていても仕方がない。

そんな義輝の心中を察したのか、今まで沈黙を守っていた信綱が志願を申し出た。

「儂が越後へ参りましょつ
「勢州殿が？」

信綱は本来、最後まで何も発言しないつもりだつた。そもそも幕臣

でもない自分がこの場にいることが相応しいとは思っていないのだ。しかし、あまりにも義輝側の人間が少ないので藤孝から評定への参加を要請され、末席から評定の行方を見守っていた。

「管領様とは関東出陣の折、面識がござります。それに関東へ出馬されているやもしれませぬからな。関東であれば、儂は地理にも明るい」

信綱は元々関東管領・山内上杉家の重臣長野家に仕えていた。長野家は上杉家を継いだ輝虎にも従つており、永禄三年（1560）の関東出陣では長野家も輝虎に従つており、剣豪としても長野十六槍としても武名を轟かせていた信綱は輝虎の目に止まっていた。翌年に小田原城を攻めて鶴岡八幡宮で関東管領に就任し、越後へ戻るまで何度も信綱は輝虎と酒を酌み交わし、太刀合戦も行つた。

「勢州殿であれば申し分ない。是非にも」

「合い分かった。されど儂も何度も越後との間を往来するわけには参りませぬぞ。後任は、定めておいて頂きたい」

「承知した」

こうして上杉輝虎の許へは信綱が派遣されることになった。後は輝虎の動向次第で上洛時期を定め、上方にいる反三好の勢力に声をかけるだけ。そう誰もが思った。義輝以外は……

「もう一人、声をかけておきたい者がある。輝虎が上洛できぬとも、こやつが味方となれば三好を討ち破れるやも知れぬ」

「はて？ 何処の大名ですか？」

「誰もわからぬか？」

皆が考え込む。関東管領たる上杉の代わりになるような大名。義輝

の口振りからすると、こちらと軍勢を合流できる大名に思えるが、甲斐の武田に駿河の今川、西国の毛利と名が上がるがいずれも上洛軍を起こせるような者たちではない。結局、誰も答えを見つける事が出来ず、義輝が口を開いた。

「織田、信長よ

「の…信長！？」

意外な名前に皆が驚き、様々な反応を見せるが、中でも義景が一瞬だけ露骨に嫌そうな顔をしたのを義輝は見逃さなかつた。

「左衛門督。何ぞあるか？」

「いえ、織田など頼りにならぬかと思いまして…」

「余は一度、上総介（信長）に会つたが、なかなかの大将であつたぞ」

永禄二年（1559）。この年の初めに義輝は全国の諸大名に上洛を命じた。表向きは義輝の帰洛を祝うものであつたが、その実が打倒三好であつたことは改めて言つまでもない。そして真つ先に上洛してきたのが尾張の織田信長だつた。この事を義輝は評価しているのだ。ちなみにその次に上洛してきたのが当時長尾景虎と称していた上杉輝虎である。

一方で義景は信長が嫌いだつた。かといって、二人は会つたことがあるわけではない。不満の原因は、朝倉家と織田家の出自にあつた。

両家の共通点は共に斯波家の家臣だつたこと。朝倉家は斯波家が守護を務める越前の守護代であり、織田家は尾張の守護代である。しかし、義景は守護代の家系だが信長は守護代家の家系だつた。よつて信長の方が一段格下となる。ただ信長側にも言い分はある。朝

倉家は応仁の乱の時、主家である斯波家を裏切つて越前守護へ昇格したが、織田家は尾張で斯波家を支え続けた。なので勝手に格下にされる云われはないが、自分が上と思っている義景にはその理屈は通じない。

だが義景が信長をどう思おうが、今の信長は尾張一国に伊勢と美濃の一部を領している。上洛してきたときは未知の武将だったが、翌年に桶狭間で東海三力国を治める今川治部大輔義元率いる軍勢を寡兵にて討ち破つたことによりその将器が本物であることが証明されている。無視できない勢力だ。

「織田家であれば、某を御遣わし下さい。必ずや御味方に引き入れて御覧に入れまする」

「明智か」

義輝との連絡役を務めていた光秀も、この場に参加している。しかし信綱とは違う理由、客分という身分の低さから今まで一切発言をしていなかつた。義輝はその光秀が突然に織田家との使者へ志願してきた理由を掴みかねた。

「織田様の御正室・帰蝶様と某は従兄妹同士でありますれば……」

「なんと……？」

これには義輝はもつろんのこと、朝倉の者たちも驚いた。義景などは『『そのようなこと聞いておらぬぞ』』と心中で叫んでいることだる。

（いやつ……左様な奇縁を持つておつたか）

光秀のことを義輝は元々それなりの武家の出だらうと思つていたが、

大名の正室と血縁関係にあるほどだとは思わなかつた。そもそもそんな者が、光秀ほどの才を持つ者が何故いつまでも密分のままなのか。

（余ならばすぐにでも直臣として召し抱えるが、左衛門督はどんな

阿呆じや）

この時、義輝は初めて光秀が欲しいと思つた。

「ならば明智、許す。そちが使者を務め」

「されば公方様に御許し頂きたいことがござります」

「なんじや」

「場合によつては美濃守護職、織田様に任せることと御許し下さい」

「ふむ……」

悪い手ではない、と義輝は思つた。既に尾張の支配権は信長に認めており、織田家は將軍公認の守護大名である。一方で美濃を領す斎藤龍興も父・義龍の頃に認められて相伴衆に列している。

（最良なのは余の調停の許で両者が和解し、共に上洛軍を発してく
れることだが……）

そう都合良く「こく」となど考へない方がいいと義輝は思つた。あまりにも虫が良すぎる。ならば一方に濃尾を任せんしかない。上洛後、濃尾にまとまつた義輝方の勢力があれば強力な後ろ盾になることも考えられた。

（斎藤龍興は酒色に耽り、家臣の竹中某に居城を追われたと聞く。
そんな男に美濃を任せるのは……）

義輝も認めた先代の義龍が生きていれば違つたかも知れないが、信長と龍興では圧倒的に器が違つた。

「よー、許す。一切を明智に任せた故、必ずや織田を余の味方に引き込みー」

「ははつー」

平伏する光秀。そこには反応したように義景が飛び出していく。

「お…お待ち下されー！」

「なんじや、左衛門督」

「軽々しく守護職を任せたものではありませぬ。織田風情に守護は荷が重いわ」

「嫉妬、妬み、そういうものが義景の中を支配していた。が、義輝はそんなものに田もくれず…」

「不服か。そなた家臣とて、先ほど軽々しく加賀守護に任じて欲しいと願い出て参つたではないか」

「そ…それは……」

義景がキッと景鏡を睨み付ける。一方で景鏡もぱつを悪そつに田を逸らしている。

「それに必ずしも上総介に美濃守護を任せるという話ではない。明智も場合によつては、と申しておる。そうであるな、明智よ」

「はつ。美濃守護職はあくまで織田様を御味方に取り込むため、交渉の材料にしたく申したまことにござります」

「だ、そうだ」

「そ…それならば構いませぬが……」

納得したようでしていない義景が渋々引き下がる。その姿を見て、義輝は改めて義景を頼りなく思った。

（もつともそんな手に乗つてくるほど上総介は阿呆ではあるまこと）

そんな浅はかな男ならば、初めから頼りになるわけがない。恐らく織田上総介という男は、そんなに甘くはないはずだ。それに頼りになる男なら、方便でなく本当に美濃守護を任せてもいいと義輝は思つていた。

（輝虎と信長……余の命運はあやつりに懸かつておるものやもしかぬな）

義輝はかつて一度だけ会つた男たちの顔を思い出していた。

そして評定が終わつた。

【 続く】

第五幕 希望 -上洛への道- (後書き)

少し間が空きました第五幕です。

次回は序章最終幕。今回の話にあつた信長と謙信が登場します。

第六幕 将星一ツ - 軍神と大うつけ -

六月一日。

尾張国・小牧山城

尾張の国府である清洲より東北にある小牧山に築かれた城はその山全体を城郭と化しており、多数の曲輪が点在、配下の将の屋敷が建ち並び、南西一帯には城下町も形成されている。主力の兵も置いており、凡そ二年前に築かれたとは思えないほどの賑わいがあった。信長の美濃攻略における最前線基地とした意気込みが感じられる。実際、美濃斎藤家の本拠たる稲葉山城とは僅か四里（16km）ほどしか離れておらず、敵対勢力同士の本拠地がこれほど近いのは異例だった。

その地に、大うつけと呼ばれた織田上総介信長はいる。

「御屋形様。明智十兵衛と名乗る者が田通りを求めております」

「明智…とな？」

「はっ。何でも帰蝶様に縁がある者とか。追い返しましょうか？」

「いや、よい。すぐにこちらへ通せ。それと於濃（帰蝶）も呼べ。身内とならば、会いたかろ？」

信長は簡単に田通りを許した。自身の室のことを思つてではない。帰蝶の縁者となれば美濃の出身、美濃攻略に有益な情報が得られるかもしれないと考えたからだ。

小姓は信長の前から下がると、先に入ってきたのは帰蝶だった。

「殿。十兵衛殿が参られたとか？」

「つむ。間もなく参るであります。そちの縁者と聞いた」

「はい。我が母の甥に当たる方です。私が殿の許へ嫁ぐ前までは稻葉山のお城で何度か会つたことがござります」

「で、あるか」

帰蝶の母、つまりは斎藤道三の正室は小見の方と言い、光秀の父である明智光綱は兄に当たる。ちなみに両者とも死没している。

「御屋形様。明智殿を御連れしました」

「入れ」

襖がサツと開けられる。その先に平伏する一人の男へ信長の視線は送られる。

「明智十兵衛光秀にござります」

「で、あるか」

たつたそれだけで両者の挨拶は終わる。信長は何も話さない。それだけだつたにも関わらず、光秀の額には冷や汗が滲み出でいた。鋭い眼光を叩きつけられている。部屋中の空気が張り付き、凝縮するような感覚だけがヒシヒシと伝わってくる。

（な……なんだ、この威圧感は……）

それが、光秀の抱く信長の第一印象だった。言葉が詰まつていて光秀を案じ、帰蝶が助け船を出した。

「十兵衛殿。長良川の合戦の折、一家が離散したと聞き案じておりました。こうして再びお会いできただこと、嬉しうござりますよ」「は……はつ。帰蝶様も御健勝のようで何よりござります」

その時、光秀は初めて帰蝶がいることを知った。正直、声をかけてくれたことを感謝した。見知った人間の声を聞いたことで少し緊張が解れた光秀はようやく話に入ることが出来た。

「此度は将軍家の使者としてまかり越した次第にござります」

「将軍家とな？…… 義輝公は御健在といふことか」

信長がこいつをうのむ、巷では義輝は三好・松永に暗殺されたといつ噂が蔓延していたからだつた。光秀も道中でそれを聞き、知つてゐる。ただ余りにも噂の広がり方が異常なので信長自身は眞偽を掴みかねていた。

「義輝公は兵を求めておられるのか

「はつ」

いきなり本題を突かれた光秀は驚いたが、話が早くて助かるとも思つた。信長としては義輝が生きていて自分に使者を送つたという事実から導き出した発言に過ぎず、無駄な問答を省いただけだつた。

「公方様は越前におられます。近く上洛し、逆賊を討ち平らげる所存なれば、織田様にも逆賊征討の軍へ加わわらることを望んでおられます」

「当家は今、美濃攻めの真つ最中である」

信長は兵を出せる出せないとは言わず、織田家の現状を語つた。これが断り文句であることくらい光秀も分かる。しかし使者を務めるとして口で言い出した以上は、簡単に引き下がる訳にはいかない。

「斎藤家との和睦、公方様が取りなしても構わないと申しております

す

和睦のことは義輝と話してはいない光秀だが、一切を任せると言われている以上は許容の範囲と捉えている。しかし、信長は和睦の提案を即座に拒否した。

「何故にござりますか？」

「そなたも蝮殿（斎藤道三）に仕えていたのなら知つておろう。美濃は蝮殿より儂に譲られておる。龍興は不当にも美濃を占拠した義龍が子、また仇だ」

道三が長良川合戦で実子・義龍に敗れて自害する寸前、女婿の信長へ“美濃を譲る”という遺言を書き残した。それが信長の美濃攻略の大義名分でもあるし、そのために信長は広くそれを流布させた。そのために光秀もこのことは知つてている。

「そこを曲げては頂けませぬでしようか。公方様のことは、天下の大事にござります」

信長が美濃攻めに拘る気持ちは光秀にも分かる。光秀としても道三を慕つていたのだから、龍興は美濃國主に相応しくないと思つてゐる。ただ、だからと言つて光秀も引き下がるわけにはいかない。信長に何とか考え方直して貰おうと必死に説得を続けるが。

「明智とやら。貴様は岳父の仇討ちを小事と申すか
「い、いえ…そのようなつもりは……！？」

即座に平伏し、謝罪する。だが怒つたかに見えた信長の傍らで帰蝶が一人のやり取りを見て『くすくす』と楽しそうに笑つて見ていた。

「殿。十兵衛殿をからかうのはその辺にしたら如何ですか？」

信長に嫁いで十六年。織田三郎信長の人となりを帰蝶は承知している。世間で言われている以上に気むずかしい人物であるが、岳父・道三を尊敬している。ただけして仇討ちなどに囚われる人物ではない。何事も合理的に動く人物だ。美濃を獲るために信長が道三の仇討ちを利用していることを帰蝶は知っているし、美濃を獲るのは上洛をするためとも知っている。

「わかつた、わかつた。明智とやら、儂は三好・松永などに」「する気はない。義輝公に御味方仕ると伝えてくれ」

「有り難き御言葉、しかと公方様へ御伝え致します」

初めは難航すると思われた交渉が、帰蝶の御陰で意外にも簡単に進んだ。もはや頼れるものはないと考えていた自身の縁にこれほど感謝したことはない。しかし、光秀は戦国武将のしたたかなる一面を承知している。未だ信長から“兵を出す”との言葉が告げられていないことを忘れてはいない。

「つまり兵を出して頂けると考えて宜しゅ「う」やれこますか」「構わぬ」

だがこれも簡単に目的の言葉を引き出せた。どうやら織田信長という男、根は単純なようだ。しかし、まだ引き下がるわけにはいかない。ただ兵を出すだけでは、数百でも一千でも兵を出したことになるからだ。実際にそうやって約束を守ったことにする大名もいた。それでは何の意味も無い。

「されば兵一万を御願い申し上げます」

兵数を指定するといふことは臣下の者へ対する扱い方であるが、あくまで自身は將軍の使者であるので失礼には当たらないと光秀は考へている。それに織田家なら一万ほどは軽く出せる力をしており、一万は出して貰わなければ三好の兵力を上回ることは出来ない。

しかし、これに信長は難色を示した。

「当家の事情は知つておらう。兵数の約束まで出来ると思つてか」「承知しております。されど御約束を頂ければ、公方様も御安心召されるとかと」

「義輝公へ嘘は申せぬ」

「ならば御家の御事情が変われば、如何でしょ」
「なに?」

信長が意味深な光秀の発言に身を僅かに前のめりにさせている。それを光秀は見逃さなかつた。興味を持つていてる証拠だ。

「美濃守護職。公方様は織田様に任せてもよい、と申しております」「それはまことか」「越前を発つ前、しかと承つております」「書付はあるか?」「今はござこませぬ。されど織田様が御望みであれば、すぐにでも公方様より頂いて参りましょ」

光秀は完全に信長が餌に食らいついたと思つた。書付とは、いわゆる証文である。それを要求するといふことは、完全にじきりの掌に乗つたと考えていい。だが……

「よい。義輝公の御心は伝わつた。それに儂は美濃守護になぞなるつもりはない」

「……は？」

光秀は理解できなかつた。守護職は美濃攻めにおいて道三の遺言状以上に確實な大義名分になるはずだつた。何せ道三がいくら信長に『美濃を譲る』と言い残したとはいえ、道三自身は美濃守護ではない。守護職は子の義龍が本来の守護・土岐氏を称することで継承している。つまり表向き正当な美濃国主は義龍の子である龍興の方なのだ。

それを覆すのが、今回の裁定であつた。元々守護職を交渉の材料にする気だつた光秀だが、こつも拒否されるとは思つていなかつた。

「いま義輝公より守護職を賜つたとしても、名のみであり実が伴わぬ。それでは当家の力を義輝公に認めては貰えまい。美濃平定は当家の力のみで行つ。義輝公の力は借りぬ」

「や…されど、それでは美濃平定に時間がかかりましよう。公方様の上洛に間に合いませぬ」

「兵は出すと申した。それでよからう。下がつて義輝公へ伝えるがよい」

それを最後に光秀は有無を言わざずに閉め出された。あつと/or>いう間の出来事だつた。

渋々光秀は越前へ戻るしかなかつた。幸い、信長との面談は四半時（30分）もかかっていないため、その日の内に小牧山を発つことが出来た。

だが一方の信長はこれを機に忙しく動き始める。先ほどまで光秀が座つていた場所に、柴田権六勝家、林佐渡守秀貞、丹羽五郎左衛門尉長秀、木下藤吉郎秀吉が座つていた。

「先ほど將軍家より使者が参り、儂に上洛を求めてきた」

四人から『おお』と感嘆の声が漏れる。それほどまで彼らにとって上洛は特別なことを意味していた。

「そりには儂を美濃守護に、と申してきたが、それは断つた」

「こで信長の家臣たちは『何故か』と訊ねるような真似はしない。ただ黙つて信長の意を受ける。それが織田家の常識だつた。

「が、その話は使える。…五郎左」

「はつ」

「この話を聞けば、加治田衆は落ちるか?」

「確実に落ちます」

中濃一帯に勢力を有する加治田衆は佐藤忠能を盟主とする土豪たちである。信長の命を受けて長秀が調略を仕掛けていた。

「権六、兵を整えよ」

「美濃攻めですな。腕がなるわい!」

勝家が握り拳を左掌に叩きつけ、闘志を湧き上がらせる。

「猿(秀吉)。その話を美濃中にばらまけ」

「はつ。同時に西美濃衆を斎藤家より切り離します」

「ふつ…よつわかつてある」

信長は額髪を擦りながら、満足そうに頷いた。秀吉のこつこつ切れるところを信長は買つていいのだ。

「中濃が落ち、西美濃衆が儂に従えば、東濃は必ずと靡く」
「美濃平定は成ったも同然ですな。わつはつはつはー。」

秀吉が馬鹿笑いを始める。他の三人は苦々しくそれを見ているが、この話自体は織田家にとつて悪い話ではないのでそれを咎めるような真似はしない。

「佐渡、熱田、津島の商人共に命じ、上洛の仕度に取りかかれ」「い…今すぐに」「やれこますかー?」

秀貞が驚くのも無理はない。あくまで上洛は美濃攻めが終わつた後のことだと考えていたからだ。それは間違つていない。

「当たり前であらうが。でなければこの場にそりを呼んだりはせぬ!」

そう言い放つと、信長は部屋から出て行つてしまつた。残された四人は、後は信長からの命令を従順に実行するしかない。

そして十日後。加治田衆が織田家へ通じた。これに怒つた斎藤方が兵を出してきたが、織田軍の前に敗走し、中濃一帯は織田方となつた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

六月七日。

越後国・春日山城

日本海に面するこの山城は関東管領の御城である。主たる上杉弾正少弼輝虎は去る三月に北条相模守氏康に攻められて窮地に陥つてゐる関宿城主・梁田晴助を救援するために関東入りしていたが、輝虎が下総国へ入ると東関東の諸侯がこれに合流、梁田勢の士気も上がり奇襲を仕掛けてきた。流石の氏康も果敢徹せず、上杉本隊とは戦わずに戦を引いた。

救援に成功した輝虎は今月の初めに春日山に戻つてきた。そして、將軍・義輝の死を報されたのである。それから義輝の御靈を弔うため、毘沙門堂へ籠もつていた。とは言つても義輝は死んではない。京での変事が関東へ届く頃には尾ひれが付いて死んだことになつていたのだ。

（逆賊共に上様が……やはりあの時、奴らを成敗しておくべきだった）

輝虎は振り返る。永禄二年（1559）に上洛した時のことを。

あの上洛の目的は、表向き上杉の家督相続と関東管領就任の認可を得ることだったが、実際は三好長慶を討つて義輝を扶（たす）けることになつた。その為の、兵五千だったのだ。

義輝の周辺を取り巻く情勢は厳しいものだったが、六角や畠山など反三好勢力の力も衰えておらず、輝虎は勝機を感じていた。しかし、義輝からすれば上杉勢五千が加わったところで勝ちを得るのは難しいと判断しており、三好討伐の許可を与えたかった。

（上様の命令を無視しても実力行使に及ぶべきだった……）

と、義輝の死を報された輝虎は悔やむしかなかつた。そこへ小姓か

ら来客の報せが入る。

「御実城様」

「何用か。ここへは入るなと申し付けておつたはずだが」

怒氣を滲ませ、小姓を咎める。輝虎にとつて毘沙門堂での祈りは神聖なものであり、何人たりとも邪魔は赦さなかつた。家臣たちにもそう言いつけてある。故に咎めている。

「そ……それは重々承知にござりますが……、上泉伊勢守様が目通りを願つておりますば……」

「勢州が……か？」

珍しい、と輝虎は思った。

信綱は先代の長野家当主・業正が死去して後、主家を致仕していた。“郎党のみを連れ、諸国放浪の旅に出る”と春日山に挨拶に来た信綱本人から聞いている。それ以来、輝虎は信綱と会つていらない。

しかし、すぐに会つかどうか迷つた。実際、今は義輝の御靈を弔う祈りを捧げてこらへるところである。何よりも神聖で、大事な儀式だ。

しかし小姓は主君の傍近くに寄り、耳打ちした。

「伊勢守様はどうやら、上方から参られたようじます」

「なに！？」

思わず声を上げてしまつた輝虎が、小姓は構わず続ける。

「公方様のことについて、急ぎ御実城様に御伝えしたいことがある

とのこと

「…すぐ元氣

と言つて毘沙門堂を出た。

半刻（1時間）後、四年振りの輝虎と信綱の対面となつた。現れた信綱は以前と変わらぬ姿であつた。

「久方振りじや。勢州よ」

「管領様も御健勝で何より……」

「上方より参つたと聞いたが？」

「はい。つい先日までおりました」

「上様が亡くなられたと聞いた。嘆かわしいことじや。何でも勢州は上様がことで儂に伝えたいことがあるとか」

「左様にございますが、その前に一つ訂正がござります」

「訂正？」

「公方様は御健在であらせられます」

「ま…まことか！？」

義輝の生存。それは衝撃だつたが、まずは無事を喜んだ。何よりも輝虎にとつて足利義輝という人物は、聰明かつ勇猛さを兼ね揃え、霸気に溢れた希有な存在。己の思い描く征夷大将軍そのものであり、乱れた秩序を取り戻す唯一の希望だつたからだ。

「今は窮地を脱し、越前へ身を寄せられます」

「越前……左衛門督殿のところか。ならば安心じや」

越前朝倉は上杉家にとつて好意的な相手であるため、輝虎は心から安堵した。

「此度、その公方様に頼まれて管領様の許へ参つた次第」

「将軍家よりの使者……と申されるか」

「… そうなりますな」

ならば、として輝虎は立ち上がり、座を信綱に明け渡そうとする。信綱が将軍家の使者であるのなら立場上で上司といつことになるため、上座を明け渡し、下座より上様の御言葉を賜らなければならぬ。

しかし、信綱は首を横に振つてそれを拒否した。

「此度は公方様より命令を受けて参つたのではござりませぬ。あくまでも依頼で参つたのです」

「はて？」

輝虎は臣下なのだから、命令すればいいだけのことである。そちら辺が輝虎には理解できずについた。しかし、信綱は構わず続けた。

「公方様は逆賊の討伐を御望みです」

「で、あらう。三好・松永らの所行、赦されるものではない」

「そのため、管領様に上洛を求めておられます」

「……」

輝虎は目を瞑つた。

長慶を失つたとはいえど三好・松永らの力は侮れない。朝倉という新たな味方を手に入られたとはい、教興寺合戦の結果、上方に残る反三好勢力の力が弱まつており、義輝が自分の力を必要とするのは己でも理解できる。

「されど勢州よ。関東での争乱、日々激しくなつておる。先日も甲斐の武田信玄が西上野へ迫つておるとの報知を受けた。近々また関東へ出陣するつもりじや。とても儂が離れられる状況ではない」

現在の関東は予断を許さない状況が続いていた。

関東制覇を狙う北条氏康はもちろんのこと、その盟友・武田信玄も輝虎が越後へ帰る度に兵を入れておる。そして輝虎が関東へ赴くと撤退し、また兵を出すというイタチごが続いていた。

「分かつております。故に公方様は、これは命令ではなく『頼み』だと仰いました」

「上様が儂に頼む……と？」

「はい」

痛かった。主君に“頼み”と言わせている自分の胸がただただ痛かっただ。そして主君の窮地に駆けつけることの出来ない己の不甲斐なさを罵つた。

「管領様。公方様は以前と同じく五千の兵でも構わない、と仰せです。それであつても上洛することは叶いませぬのか？」

信綱は率直な疑問をぶつけてみる。数年前までの関東の情勢は知つておるが、ここ一、二年のこととは諸国を放浪しており断片的にしか知らない。だが上杉家の最大動員数は二万を越えるはず。多くの守備兵を残していれば上洛は可能ではないかと考える。

「その程度であれば出来なくはないが……」

輝虎は迷つていた。

武蔵国の大半は北条家に奪われたままだが、上野、下野、下総、常陸、上総、安房と反北条の勢力が中心に活気づいている。急先鋒たる佐竹右京大夫義昭も常陸を統一する勢いだし、前年に国府台で北条に破れた里見刑部少輔義堯も未だ勢力を保っている。

自分が離れるといつ不安があるが、信綱の言つとおり五千程度なら上洛させる余裕がないわけではなかつた。しかし、同時に五千を上洛させたところで、と思うところもある。充分に役に立つ自信はあるが、関東管領たるものとして、万余の兵を率いていきたい気持ちが強い。

「管領様。先の変事で生き長らえた後、公方様は死のうとなされたことがある」

「は？」

唐突に話を始める信綱に戸惑う輝虎。だが話の内容が内容だけに黙つて聞く。

「妻子を、母御を殺されたのじや。無理むじやうりん」

「……」

「管領様には妻子はおらずとも、母御はおりましょう。その無念、如何ばかりのものか御分かりになります」

「……」

「妻子とはあの世で会おうと約束までしたらしい。母御ともな。だが公方様は生きた。生きてしまつた。儂らが御助けした所為だが、公方様はそれを恥じた」

「……」

「恥じたからこそ、朽木谷の城で三好の軍勢が迫つて来たとき、逃げる術があつたにも関わらずに公方様は城を枕に討ち死にする覚悟

であった。されど、また生きた

「それは何故?」

「側近の細川兵部が説得した、明智十兵衛なる者もな。されど本音の部分は知りませぬ。公方様に直に会い、聞かれたらよい

悲しい話だつた。もし自分が同じ立場だつたらどうしただろう。妻子を失う気持ちは分からぬが、もし母が自分の家臣の手に掛かって死んだとしたら…、恐らく自分は怒り狂い、何人の制止も振り切りその者を八つ裂きにするだろう。それが叶わぬなら、助けられなかつた己を恥じて死を選ぶ。そうするかもしれない。

(上様はそのような苦惱を抱えておられるのか……)

輝虎は胸に熱いものが広がつていくのを感じた。そして己を恥た。関東管領として万余を率いて駆けつけたいと考えた己の見栄を。甘さを。

自分に言い聞かせる。『もう結論は出でているのではないか』と。

「上洛しよう」

輝虎の決心は固まつた。

「まことで?」

「うむ。されど時期は当家の都合に合わせて貰いたい」

「それで、時節はいつ?」

「雪が降り始めれば、甲斐の武田も動けぬ。それまでに関東へ兵を送つておれば、北条輩も好き勝手は出来まい」

「となれば、十月の末辺りで?」

「一乗谷で御会い致しましょう、と上様に伝えてくれ

「しかと、伝えましょ」

「…ああ、それと」

思い出したように輝虎が付け加える。

「一向一揆との和睦、上様に調停を依頼したい。どうやら裏から信玄めが手を引いているようなのだ。あれらに邪魔されたら堪らぬ」

「それならば、既に細川兵部が動いております。御安心を」

「それは重畠。もつとも、邪魔されたところで薙ぎ払うだけだがな」

「管領様なら造作もありますまい」

「当たり前じや」

二人が微笑み合わすことにより、この会見は終わった。

こつして上杉輝虎の上洛が決まった。

織田信長と上杉輝虎……戦国の世に生まれ出し一人の将星が、将軍・義輝の馬前で轡くつわを並べる時が、刻一刻と近づいていた。

上洛の時は近い……

【 続く】

第六幕 将星一つ・軍神と大うつけ・（後書き）

序章最終幕です。のでいつもよつちよつと長くなりました。

序章を書き終えるまで、かなりかかったようになります。これではこのお話を書き終えるのがいつになるのやら……

とは言つても次章の上洛編やその次、最初の方に書いたと思いますが、シナリオはほぼ出来上がつてあり問題は私の根気のみ。有り難いことに購読者も増えておりますし、感謝の一言です。頑張るしかありませんね。頑張ります。

また本編ですが、この辺りから歴史の針が史実より早く進み始めます。そして変化し始めます。引き続き寛大な御心を持つて見て頂けると幸いでござります。

第一幕 傀儡將軍誕生 - 墓雄・松永久秀 -

六月五日。

越前国・一乗谷

義輝が京を追わされて半月ばかりが過ぎ、初めて喜びを感じていた。尾張へ行つていた明智光秀が“織田信長参陣”的吉報と共に戻ってきたからだ。

「そりが、上総介（信長）が来てくれるか」

と喜色を浮かべる。光秀からの報告では信長は即座に自分の味方をすると表明したという。信長の勇氣ある決断と忠節に感謝したいところだったが、何よりも信長が己の期待通りの人物であつたことが嬉しかった。

「流石は上様でござる。後は上杉殿にござりますな」

義輝と同じよしひに喜びの表情を浮かべてゐるのは、一色式部少輔藤長である。

義輝が越前へ移つてよりこれまで、僅かながら幕臣たちが駆けつけてきた。細川輝経、柳沢元政、上野清信、石谷頼辰、大館藤安、御牧景重らである。また覚慶のいる和田惟政の許にも何名か駆けつけているという報せが入つていた。

かといって彼らが今もここにいるわけではない。藤長以外は義輝の命を受けて各地へ飛んでいた。ただでさえ人材が枯渇している以上、彼らを遊ばせておく余裕はないのだ。

「しかし、左衛門督（朝倉義景）は悠長なものよの」

義輝が愚痴をこぼすのは隣から聞こえてくる慌ただしい音が原因だつた。

「すぐに上洛する故に御所は無用と申したものを……」

安養寺の隣では義輝の新御所の建築が行われていた。しかし、義輝は事前にこれを断つてゐる。だが義輝を保護する義景としては、立派な御所を建てなければ己の威信を世に示すことが出来きないので、どうしても御所は必要だつた。故に理由を付けて建築を始めている。

「式部、若狭出兵の仕度は何処まで進んでおる?」

「はつ。今朝方に敦賀の景恒殿より報せが参り、まもなく仕度が整うので出迎えに参ります、とのことござります」

「おひ、まもなくか」

言葉に思わず力が入る。鬱憤が溜まつてゐる義輝としては、暴れてくて仕方がないのだ。幸いにも朝倉家臣の中に中条流の富田勢源なる者があり、新当流である義輝の評判を聞きつけて訪ねてきた。これがまた盲田の剣客ということもあって大いに義輝の興味を湧かせた。今では毎日のよひに打ち合ひ、精氣を養つてゐる。

（若狭などあつといつ間に平らげてくれ。そしてその後は……京よー）

若狭出兵に熱い鬪志を燃えたぎらせる義輝であつたが、一方で全く気が付いていなかつた。油断と言つていいだろ。どうやつて三好・松永を討ち滅ぼすかに思慮が集中しており、自分を逃がした奴らが

どのように動いてくるかをまったく予想していなかったのだ。

義輝の去つた京の都では、驚くべき策謀が既に動いていた。

遡る」と五甲一十日。

上京・關白近衛前夕邸

(何故この男がここにある!)

それがこの邸宅の主・近衛前久が帰宅して最初の思ったことだつた。

昨日、洛中では將軍・足利義輝が襲われるという事件が発生した。將軍の生死は不明、京の都は騒然としており、禁裏では緊急の朝議が招集された。前久もそれに参加して帰つて来たばかりのところである。

「御待ち申しておつましだぞ、殿下」

居座る白髪の老体。まだ五十半ばらしいが、十は老けて見えるこの男を前久は知っていた。過去に義輝や三好長慶と会った際に何度も待っていたのよく覚えている。それだけ印象深い男だった。しかし、実際にこうやって相対するのは初めてである。

「何故にこの者を通した!」

男を無視し、怒声を上げて家人を叱り上げる。家人は主の声の大きさに驚き、身を縮こまらせながら謝罪の言葉を口にするが、それで

も前久の怒りは収まらない。今にも腰刀を抜かんとする勢いである。

この男、公家の頂点に立ちながらその振る舞いは武家そのものであり、言うなれば公家らしくないのだ。

「そう怒らぬで貰えませぬか。儂が勝手に上がり込んだだけのこと。その者は悪くありませぬ」

その勝手に上がり込んだ男は悪びれもなく家人を弁護するが、前久はそんな男をキッと睨み付けた。

「義輝殿を襲つた者が、何用じゃ！」

「これは異なる事を仰る。公方様を襲つたは手前では『ぞらぬぞ』

「しらばつくれるな！義輝殿を襲つた軍勢は薦紋を掲げておつたらしいではないか」

「おおつ！流石は殿下、よつて存じで」

まるで他人事のように感心する男の態度に前久はさらに腹を立たせた。薦紋は松永家の家紋であり、それを掲げる軍勢は松永家のものということになる。それが義輝の屋敷を襲つたのだから、犯人は目の前の男に他ならない。

「松永弾正！そちの仕業であるつ！」

松永弾正少弼久秀。三好長慶の右筆から長慶の娘を娶つて一門衆と同等の地位まで上り、今は若輩の主君を影で操る男の名である。その久秀が、変事の後に真つ先に訪ねたのが関白・近衛前久だった。

「これは大きな誤解があるようじや、殿下。公方様を襲つたのは手前ではござりませぬぞ」

「偽りを申すな！」

「偽りではございませぬ。襲つたのは手前ではなく義久、我が子にござります」

「貴様の指図であるうがッ！」

人を小馬鹿にしたような態度で堂々と屁理屈をこねる久秀に前久は怒鳴り散らす。憤慨し、顔色を真っ赤に染め上げる。今にも頭の血管から血が吹き出そうなほどだ。

「公方様を殺めるなど、何と畏れ多い。天地神明に誓い、手前の指図ではございませぬぞ。その証に、我が手によつて義久は捕縛いたしております」

「捕縛…じゃと…？」

「はい。今は三好下野守（政康）殿の屋敷にて蟄居させております

この事自体は本当であった。主君の命（久秀の指示）により義久は蟄居処分を受けていた。しかし、理由が異なる。將軍弑逆を行つた所為ではなく、実際はそれに失敗した為だ。だからといってそんな理屈が前久に通る訳もなく、前久は義久を打ち首にすべきと主張した。

「無論、そのつもりであります」

飄々と久秀も前久の意見に同調する。これが前久の怒りに拍車をかける。久秀は先ほどからこの態度を崩す、のらりくらりと前久の言をかわしている。

「ならば、帰つて即刻打ち首にせい！」

「そうしたいのは山々なれど、それを決めるのは手前ではございませぬ」

「ならば、そちの主である左京大夫（三好義重）に打ち首にさせよ
「公方様を殺めたのですぞ。我が主とて裁定を下すのは憚られまし
ょう」

「では誰が処分を下すというのじゃ…」
「誰が…とは、殿下の御言葉とは思えませぬな。次の將軍に決まつ
ておりますよ」
「つ…次の將軍…じゃと…？」

「こ」でよつやく前久は久秀が自分を訪ねた理由を知ることになった。

（磨に新たな將軍を奏上せよというのか！？）

前久とて阿呆ではない。「こ」まで聞けば、久秀が何を考えているか
分かる。久秀の許、つまりは三好方に十代將軍・義植の子孫がいる
ことは百も承知だ。関白…人民の最高位に座し、帝に奏上できる
唯一の人間を久秀が訪ねた理由は明々白々。

そんな前久を無視するかの如く、久秀は一方的に話しを続ける。

「手前も義親公の命で公方様を御助けせんとしたのですが、不覚に
も間に合わず。しかも公方様を襲つたのが我が子と聞き、胸が張り
裂ける想いにございました。なれど御台様だけは何とか救出する事
が叶い、これで何とか泉下の公方様へ顔向けが出来るというものに
ござります」

義輝の御台所。それは近衛植家の娘であり、前久の妹である。久秀
がこのようなことを口にする意味はもはや語るまでもない。

（こやつ…磨を脅すつもりか）

前久の表情がみるみる変わっていく。怒りで赤かつた顔が急に青醒める。

「いや、それにしても義親公。長年恨み積もつた相手なれど、天下の秩序を保たんと將軍様を御守りせよとは、何と御心の深い御方か。この乱世、ああいう御方であればこそ鎮まろうつというもの」

「義親を次の將軍とせよ、ということか」

「今日の殿下は勘違いが多いようじゃ。手前が次の將軍を定めるなど御門違いと申すもの。単に手前の印象を語っているだけございますぞ」

と言つて久秀は笑い飛ばすが、これが恫喝であることは分かりきつている。

「義親公が次の將軍となれば、洛中の治安も即座に回復いたしますよ。それでこそ御台様も安心して実家へ御戻り頂けるというもの」

義親を次の將軍に据える、でなければ妹は返せない。それが久秀の要求だった。だが前久としても簡単に呑む訳にはいかない。目の前の男が將軍暗殺を指揮したことは明らか、そんな男の好き放題にやらせては今後、天下はどうなるか分かつたものではない。

「殿下、天下の為にまずは次の將軍を定めることが大事でござりますぞ」

と言い残し、久秀は去つて行つた。

久秀の姿が見えなくなると、前久は情けなくもガクッと肩を落とし、膝から崩れ落ちた。いくら抵抗しようとも、自らが取れる道が一つしかないことを理解しているからだ。しかも久秀は他の公家衆へも

近づいており、翌日になつて宮中に戻つた前夕を待つていたのは、『次の將軍は義親公しかあるまい』と何食わぬ顔で物言つ同僚たちの姿だった。

（どいつもこいつも松永の走狗に成り果てよつて！－）

しかし、その数日後に光明を差す報せが前久の許へ飛び込んできた。何と死んだと思われた義輝が越前へ逃れたというものだ。現將軍が健在なら後任を定める必要はなくなる。これを理由に前久は義親の征夷大將軍就任を断つた。

「関白殿下とあらうものが取るに足らぬ噂を真に受けるものではございませんぞ。それに噂が真であつても將軍職は京にあつてこそその將軍職。義輝公が戻られぬのなら次の將軍を定めるのみ。先例もござりますぞ」

しかし、久秀は返答がすぐに届いた。しかも“明応の政変”を持ち出してだ。

明応二年（1493）、畠山基家討伐の為に河内へ出陣した時の將軍・足利義材（義稙）の留守を狙い、管領・細川政元が足利義澄を次代將軍に擁立して挙兵したことがあつた。結果、義澄方が義材を追放して將軍職に就任した。

つまり、現在において洛中を支配している三好・松永は如何様にも將軍を擁立することが出来るという訳である。しかも困窮の極みにある公家どもを金品で籠絡することを容易いことだつた。

前久は抵抗する術を失つた。

そして六月九日のことである。三好・松永の軍勢に伴われて上洛してきた足利義親は従五位下に叙し、左馬頭に任官。名を義栄と改めた。翌十日に宿舎とした慈照寺にて勅使を受け、征夷大將軍職が宣下された。

足利幕府十四代將軍・足利義栄の誕生である。

栄えるとした自らの名が表しているのが松永久秀の栄華であるうことは、皮肉としか言いようがなかつた。それを物語る出来事が、義栄が最初に出した命令であろう。將軍弑逆^{いわだくだく}で蟄居している義久を赦免したのである。これに伴い、その主君であった三好義重は義継、義久は久通と改名し、これを義輝との離別の証とした。

一方で朝廷とて唯々諾々^{いいたくだく}と従つた訳ではなかつた。義輝を討ち漏らしたことで三好・松永らが政治的に窮地に陥つてていることを見抜いていた朝廷は、義栄に莫大な献金を要求したのだ。義栄側はこれを受け、五千貫を納めた。

この事を、義輝はまだ知らない。

【
続く】

第一幕 傀儡將軍誕生 - 増雄・松永久秀 - (後書き)

新章スタートです。

再び一幕となります。一応は十、二十となるよりは、章ごとに一から付けていきたいと思つています。

第一幕 若狭出兵 - 義輝、猛る -

六月九日。

義輝は若狭の争乱を鎮めるべく、一乗谷を出陣した。

若狭は守護の武田義統が前守護の信豊と対立しており、守護方に朝倉、信豊方に三好・松永が介入し、度々戦闘が行われていた。現在は若狭の中央部を守護方、東部と西部を信豊方が抑えている状況となっている。特に東部を信豊方に抑えられているため、朝倉勢は上洛中に背後を脅かされるという恐れがあつた。今回はその憂いを断つための出兵である。故に完全に若狭を抑える必要はなく、最悪でも東部一帯を平定してしまえば良かつたのだが、可能なら若狭の兵を上洛軍へ加えたいと考えている義輝は、あくまでも若狭一国の平定を目指すつもりでいる。

「これが国吉城か」

「はつ。城主は栗屋越中にござります」

「栗屋越中か…」

栗屋越中守勝久。若狭西部を支配する逸見昌経と双璧を成す若狭武田氏の重臣である。この国吉城に拠つて朝倉勢を何度も撃退した猛者であり、信豊方随一の戦巧者と言つても過言ではないだろう。小国若狭の地侍如きと侮つていた朝倉方も勝久に敗れて方針の転換を余儀なくされている。昨年、芳春寺に付城を築いて攻城の拠点とし、時間をかけて弱らせていく戦法を採つてゐる。義輝たちはこの地に本陣を敷いた。

「国吉城は堅城。ここはじつくりと構え、まずは青田刈りを行うが

宣しいかと」

以前より何度も国吉城を攻めている朝倉軍の総帥・義景が義輝へ進言する。

（何がじつくりじや。いち早く上洛せねばらなんといひのこ）

義景の鈍重さに義輝は呆れかえつていた。

そもそも義景は一度も国吉城を攻めたことはない。若狭攻めは前敦賀郡司である景恒の兄・景^{かげ}_{みつ}が行つてきたことだ。故に景恒配下の者は国吉城に詳しいが、義景は国吉城を見ることすら初めてなのである。その義景の意見などまったく当てにはならない、と義輝は思つてゐる。

しかし、一方で義景がいる利点もあつた。

今回、義景が出陣したのは將軍である義輝が出陣するからであるが、当主自らの出陣ともあつて本腰を入れたものとなつてゐる。軍勢の数も一万五千を数えた。

（攻めても落ちぬ城など、攻めぬ方がよい）

上洛を前に中核となる朝倉勢に大きな損害を出すべきではない、と義輝は考へてゐる。しかし、義景の出陣により軍勢の数が増えたことを活かせるのは何も城攻めにだけに限つたものではなく、特に將軍・義輝がいるという最大の利点もある。よつて以前と同じ方法で攻めるのが愚策でしかない。

「畏れながら……」

「」で明智光秀が発言の許可を求めてくる。もちろん義輝はこれを許す。

「国吉城を攻める必要はないかと存じます」

光秀の進言は義輝の意に沿つたものであり、大いに関心を寄せるものだった。

「何故じゃ？」

「栗屋越中が信豊様方に付いたのは、守護の治部少輔（武田義統）様が当家を頼つたからだと聞いております」

「つまりは他家に頼る主に反発したと？」

「御意」

「さりとて前守護の信豊も三好・松永を頼つておるつ」

「信豊様の方は逸見昌経の入れ知恵によるものにござります」

義輝の隣で聞いてる義景は光秀の言いたいことが掴みかねていた様だったが、義輝には何となく理解できた。光秀が言いたいのは、同じように見えて両者の立ち位置が異なる、ということだ。逸見昌経の場合は野心があつてのことだろうから攻める必要があるが、栗屋勝久の場合は条件次第で降伏開城も有り得る。故に勝久を攻める必要ないと光秀は言つてはいる。

「ではどうすれば良い」

義輝が訊ねる。そこまで言つ以上、光秀には国吉城を開城させるだけの策がなれば意味はない。

「まずは後瀬山にて治部少輔様と合流し、先に逸見を攻めるべきか

と存じます。また丹波衆へ決起を促す御内書を発して頂ければ存じます」

「丹波衆へ決起？」

「信豊様方を支援しているのは丹波の内藤宗勝（松永久秀の実弟）にござりますれば、介入を許せば若狭平定は長引くかと」

光秀の考えはこうだ。まずは若狭争乱の根源である逸見氏を討伐、それに際して三好方より援兵を送らせないために丹波衆を決起させて足止めさせる。逸見を討ち、義輝の命にて守護の義統の正当性を認めた上で朝倉勢が若狭から完全に撤退することを条件とすれば、勝久は城を開けるはずと読んでいる。しかし、この策の欠点は長年に亘つて守護方を支援してきた朝倉家にまったく旨味がないことだ。現時点で義景が光秀の策を理解していれば、激怒しただろう。それが分かつていてるから、光秀は遠回しな言い方で義輝に進言しているのだ。聰明な義輝なら、理解するだろうと。

（されど、そなたはそれで良いのか？）

（大事は公方様の上洛にござります。今さら若狭などに構つてはおられませぬ）

且て会話する二人。物事の本質を見失なわず、將軍家第一に動く光秀に義輝は大いに満足した。

「治部少輔と会うならば余が出向かねばなるまい。左衛門督、余の供をせい」
「は…ははつ」

未だよく状況を掴めていない義景が反射的に返事をする。

「景恒。ここはそちに任せる」

「はつ」「

「されど田畠を刈り、城方を刺激するような真似は致すな。城を囲み、動きを封じるだけでよい」

いすれ開城させる城、青田刈りなどを行つて刺激すれば勝久は武辺の者だけに意地になつて降伏を拒否する可能性があつた。故にここは軽率そうな義景でなく、景恒に任せることにした。景恒であれば、家中を見返すために義輝に信頼を得たいと考えているため、命令に背くような真似はしないだろう。

「しかと承りました」

思つた通り景恒は特に異を唱えることなく、命令を受けた。また義輝は光秀を残していくことにした。万が一にでも景恒が城方を刺激しそうなことをやろうとした場合、身体を張つて止めるだろう。

「明智、そちも残り景恒を扶けよ

「承知仕りました」

光秀も義輝の意を汲み取り、命令に従つ。

さつそく義輝は義景と共に丹後街道を東へ進んだ。途中、信豊方の城がいくつかあつたがの一万を越える朝倉勢を阻めるような軍勢はなく、義輝は難なく後瀬山城に入ることが出来た。そこで守護・武田義統の出迎えを受ける。

「上様、よく来てくれました」

この小国の守護は今年で初老（四十才）を迎えるが、立て続けの謀叛からの心労か、顔はやつれて頬は瘦けており一回りは老けて見え

た。自分と似た境遇に同情を禁じ得ないのは相手も同じようで、己の苦境に駆けつけてくれた見知らぬ義兄に義統はただただ感謝し、涙した。

「朝倉殿もわざわざの御出馬、感謝致す」

「治部殿も儂が来たからにはもつ安心じや。大船に乗つた氣でいるがよい」

この後、若狭から朝倉の影響が完全に取り払われるとは露とも知らない義景は、目の前で這いつぶばる義統の態度に己の自尊心を刺激され、尊大に振る舞つた。

「治部、さつそくだが逸見昌経は何処にある?」

「「」」より東、一里半（約10?）ほど行つた高浜という地にあります。新たに水軍を組織し、今年になつて新城を築いております」

逸見昌経は四年前の戦いで守護の居館・後瀬山城を凌ぐとも言われた碎導山城を朝倉軍に落とされており、新たな本拠とするべく高浜に築城を開始した。

ここで義輝は義統の“今年になつて”といつ言葉が引つかかつた。

「治部。今年になつて城を築き始めたのならば、まだ完成しておらぬのではないか?」

今年はまだ六月に入つたばかりである。半年も過ぎていない。

「はつ。未だ普請中かと」

「ならば一氣呵成に攻める!」

義輝は即断し、武田軍を加えた全軍に出陣を命じた。すぐさま軍令は全軍へ届けられ、若狭では類を見ないほどの大軍が西へ進む。

しかし、ここで大事件が起こった。

「義統殿は若狭守護にあらず！若狭守護はこの信方ぞ！」

突如、義統の弟である彦五郎信方が新保山城で挙兵、街道を封鎖して国吉城の景恒との連絡を断つたのである。しかも信方は己が若狭守護であると主張した。

「莫迦なことを……余が守護と認めたは治部少輔ぞ」

信方の抱える兵は少ないので一手を差し向ければ済む話として初めは軽く考えていた義輝だったが、続報が入ると軽視できない事態へと発展した。

なんと京にて足利義栄が征夷大将軍に就任、武田信方を若狭守護に任じたというのである。しかもそれを義統の父・信豊も認め、後見として新保山城へ入つたという。

「！」のツ！痴れ者共があああ！――！」

いきなり前将軍にさせられた義輝の怒りは凄まじかった。愛刀・鬼丸国綱を引き抜くと手当たり次第に周りの物を斬りつけた。憤怒の表情で怒りを撒き散らす義輝の姿は阿修羅か仁王かと思われるほどの異形ぶりで、朝倉や武田の将たちは揃つて義輝を畏怖した。

しばらく暴れた後、息を切らせた義輝が命令を下す。

「即刻、逸見を討てい！返す刀で信方も討つ！」

「はっ！」

恐怖心に駆られ、朝倉・武田軍は一直線になって逸見昌経の高浜城を田指した。その行軍速度は速く、僅か一刻（2時間）で後瀬山から高浜までの距離を走破した。

「将軍が来た！？先に攻めるのは信方ではないのか！」

これに慌てたのが昌経である。

昌経は義輝を擁す朝倉勢を追い払うには三好・松永の援軍が必要と考えていた。これに自身の水軍と連携し、陸と海の二方面から反撃する。守護に仕立て上げた信方は謂わば援軍が到着するまでの時間稼ぎにするつもりだつた。朝倉勢が若狭へ介入する大義名分は將軍・義輝と守護の義統がいればこそである。義栄が新たな將軍に就任し、信方を若狭守護としたならば大義名分は失われる。逆に守護職を得た信豊方に大義が生まれる。故に義輝が攻めるなら、その名分である信方をまず攻めると思っていた。

常の場合ならそうである。しかし、怒り猛つた義輝は常ではない。いつでも始末できる信方は捨て置き、三好・松永と通じる昌経を攻めた。

先ほどまではどうやつて朝倉勢を攻めようか考えていた昌経は高浜城を焼いて遁走した。未完成の城では防ぎきれないと考えたのだ。

しかし、怒る義輝は逸見勢の逃走を許さなかつた。追撃に追撃を重ね、逃げる兵を追うに追つた。奴らが逃げ込む先は分かっている。丹波の内藤宗勝のところだ。逃げる先が分かれば、追いかける方も

樂である。

結局、昌経だけは何とか丹波へ逃れることに成功したが、その手勢は壊滅した。残つた諸城も開城し、西若狭が完全に義統に降つた。

昌経がたつた一日で敗北したことは信方の新保山城へも波及した。これに信方の家臣たちが三好方へ肩入れしたことを後悔し始めたのだ。

「今からでも遅くはありますぬ。兄君に降られませ

と諫言する家臣たちだが、今さら引けない信方はあくまでも抵抗の意思を示した。それは朝倉・武田の大軍が眼前に迫つても変わらなかつた。それはそれで戦国の武将として信方の勇氣を評せるところだが、家臣団は違つた。

主を追つてでも、降伏するべきと考えたのだ。

翌日、信方と信豊の若狭追放を条件に新保山城は降伏。残るは栗屋勝久の国吉城だけとなつた。

義輝が国吉城へ戻つた頃には怒りも收まり、冷静に状況を把握できるまでになつていた。

（余が將軍でなくなつた今、治部の正当性が失われた。栗屋越中が城を開くことは難しかろう）

と考えていたが、芳春寺に戻つた義輝を待つていたのは予想もしない人物だつた。なんと景恒の手引きで栗屋勝久本人が現れたのだ。

「御恥ずかしながら公方様へ」を引いてしまいました。どうか御許し下さいませ」

目を丸くして驚く義輝。隣の義景も何が起きたのか分からぬでいる。しかし、田の前にいるのは紛れもなく栗屋勝久である。

「実は……」

景恒が語る。

これより三日前、義輝が新久保城を囲んだという報せが景恒の許へ届けられた。これを聞いた光秀が単身国吉城へ入り、勝久を説得したのだという。勝久の挙兵はあくまでも若狭を想つてのことであり、昌経と違つて野心から端を発したものではない。義輝が若狭は武田氏のまま統治を任せることもありであること、逆賊三好・松永らに擁立された義栄に何ら正当性のないことを光秀は諱々と説いた。これに武辺者である勝久は大いに納得し、義輝が戻つてくる前に開城した方がよいという光秀の勧めに応じて城を開けたのである。

（「やつは……、余の期待以上の働きをしてくれるわ）

改めて光秀の才能に惚れ込んだ義輝は、上洛の曉には光秀を直臣にすることを決断した。

こうして若狭は武田義統の下で纏まることとなり、栗屋勝久も今の地位のまま留め置かれることになった。義統は義輝の支援に感謝を述べ、上洛の時には手勢を率いて参陣することを誓つた。

義輝は一乗谷へ戻ることになった。六月二十一日のことである。

また今回の若狭出兵は思わぬ戦果を上げることになった。義輝の呼びかけで決起した丹波衆が内藤宗勝と激しく交戦し、若狭の争乱が鎮まつた後も互いに退かぬ状況が続いた。

そして八月一日。

丹波・黒井城を攻撃していた内藤宗勝が城方の反撃を受けて討ち死（宗勝と共にあつた逸見昌経も討ち死）にしたのである。宗勝は丹波一国を任せられていた程の人物であつただけに、三好方の損害は計り知れないものとなつた。

これを機に丹波での攻防が逆転することになる。

【
続く】

第一幕 若狭出兵 - 義輝、猛る - (後書き)

上洛編第一幕です。

正直、栗屋勝久の立ち位置には悩みました。野心で謀叛に奔つた一面もあるので。しかし、後の義統の子・元明も救出していますし…、若狭武田家への忠節があり、ただ取り巻く状況が彼を謀叛へ奔らせた、としました。

逸見畠経は問答無用です。

六月二十五日。

若狭の失陥を重く見た三好・松永らは前將軍・義輝へ対し、將軍・義栄の名で討伐令を出した。しかし、傀儡將軍である義栄の力は有名無実化しており、世間の反応は薄かつた。

三好・松永が義輝の暗殺を目論見、將軍職を篡奪したことは既に天下に広く知れ渡っていた。故に表立つて義栄に味方する大名は殆ど皆無であり、危機感を募らせた三好日向守長逸は幕府の役職を乱発し、手当たり次第に周辺勢力を味方へ引き込もうと画策した。

具体的には…

関東管領を北条家に、上野守護を武田家に任じることによつて義輝の味方になるであろうと予測された上杉輝虎を牽制する策に出た。しかし、この軽率な行動は上野守護を武田に任じることへ北条家が不快感を示し、武田からは義輝を襲つた理由を詰問されるという事態になり、使者は“義栄など何処の馬の骨か分からん御仁の命令など聞く理由がござらん”との返事と共に這々の体で帰つて來た。ならばと西国の毛利に期待をかけて西国探題へ任じたが、ここでも使者は歓迎されず役職への就任も辞退された。

これを地方の有力大名には三好の影響力が弱い所為と考へた長逸は、三好家の強大さを知る近隣の諸大名へ守護職を与えることにした。しかし、義輝の生存と若狭の失陥を知る彼らは三好・松永の卑劣なやり方に揃つて反発、唯一守護職を受けたのは美濃の斎藤龍興だけに終わった。

龍興は国中に“將軍・義輝が信長を美濃守護に任じる”という噂が広まつており、事の真偽を確かめるために越前へ使者を遣わしていだ。これをまだ若狭へ出陣する前の義輝が否定しなかつたので、龍興は藁を掻む気持ちで守護職就任を受けたのだ。

しかし、この龍興の軽挙な行動は斎藤家の崩壊を早める一因となつた。

結局、味方らしい味方を得ることの出来なかつた三好方は、配下の將へ守護職を与えることによつて政権の盤石化を図るしかなくなつた。

管領	細川信良（晴元の嫡男）
管領代	三好義継
御相伴衆	三好長逸（山城守護も兼任）
御相伴衆	松永久秀（大和守護も兼任）
摂津守護	三好政康
丹波守護	内藤宗勝（同年八月に死去）
河内守護	三好康長
和泉守護	岩成友通
淡路守護	安宅信康
阿波守護	細川真之
讃岐守護	十河存保

長慶存命時までは主家であり守護家の細川一族を傀儡とし、名田上の守護としていた三好・松永であつたが、ここにきてようやく完全に操れる將軍を手にしたことにより一族の守護化を図つた。しかし、地場固めを怠つた急場の策であつたことは誰の目にも明らかであり、反三好勢力を勢いづかせる結果に終わる。

そこに、かつて三好長慶が誇つた栄華は微塵も感じられなかつた。

七月一
十日。

起居一乗谷・壽光の新衙門

数日前より安養寺から仮普請の終わった新御所へ居を移していた義輝の許へ、久しぶりに細川兵部大輔藤孝が戻ってきた。

「此端…やつた！」

義輝は開口一番、藤孝の働きを労つた。二日前、文によつて加賀一向宗との和睦が成つたことを報されていたからだ。

「はつ。加賀一向宗は本山（石山本願寺）の意向もあり、上様が上洛中は矢止めに応じるとのことござります」

「大義じや、これで上洛の道も開けたと申すものよ」「若狭の争乱も鎮まつたとか。おめでとう存じます」

「なに、大したことはないがつたわ」

実際に若狭出兵は半月ほどで終わるという、考えた以上に早期決着となつた。最初にしては上出来であろう。しかし、その割には義輝の瞳には僅かな悲壮感が漂つてゐる。その理由が將軍職の剥奪にあることは藤孝も察するところだ。

「越中門徒にも加賀衆の方から停戦を呼びかけて頂ける運びとなりました。直に上杉殿の上洛も叶いましょう」

「つむ」

相次ぐ吉報に義輝は満足そうに頷いた。

先月末、義輝が若狭から戻つてくると上杉輝虎が上洛に応じたという報せが届いた。義輝がこれに歓喜したのは言つまでもないが、何よりも喜ばせたのは輝虎の上洛が十月末辺りになるという報せだ。これは義輝が京を目指して出陣をする時期となり、それに合わせて朝倉や浅井など味方勢力が上洛準備に取りかかれるということを意味している。早ければ、今年中に帰洛が叶うかも知れない。帰洛さえ叶えば、將軍職への復帰も認められるだらうと思われた。

「兵部。輝虎が参るまで我らで軍略を練りに練らねばなるまいぞ」「承知いたしております」「そこでじや。朝倉とも図る必要があるが、一つ頼みがある」「はい。何で」「ござこましょうか?」「明智光秀じや。軍略を練るに当たつてあれの智恵を借りたい」「…なるほど、さうござこましめたか」

藤孝としても光秀の有能さは理解している。自分で、光秀を頼りにするところがあるからこそ將軍救出の一手を任せたのだ。そこに義輝が目を付けたということは、将来的に家臣化させるつもりがあることも同時に見抜いた。

「光秀殿だけを呼べば左衛門督殿に憚られましょう。故に朝倉殿の名代として景紀殿も招きましょつ。さすれば景恒殿が代理で参るかと」

「おつ、それがよい」

義輝が朝倉家中へそれほど信を置いていないことは藤孝も理解して

いた。その中でも唯一頼りとするのは敦賀郡司たる景恒・景紀親子のみである。この親子は義景が支持する景鏡派と対立しているために義輝寄りの方策を立てることが多い。

「それにしても本願寺がようも朝倉との和睦を認めたものじや」

朝倉家と一向宗の戦はもう数十年も続けられていることで、遺恨は深い。義輝の見立てでは上洛寸前まで縛れると考えていた。

「どうやら上方の情勢が慌ただしく、石山の門主が手を焼いているとか」

この頃、上方では義栄による新政権が周辺の寺社衆へ御教書を乱発していた。しかも手当たり次第と書いて良く、その多くが寺社衆の権益を認めるものだった。寺社衆の中では新興の部類に入る本願寺としては敵対勢力も多く、義栄方の行動は好ましいものではなかつた。元より管領・細川、三好長慶と対立してきた石山本願寺である。その三好と敵対する義輝を影ながら支援したとしてもおかしくはない。朝倉と敵対する北陸の一向宗へは、上意として言うことを聞かせればいい。

「エリヤ、思つたよりも早く京へ戻れそうじゃ」

義輝の言葉通り、上洛は目前に迫っていた。

八月一日。

総勢一萬もの軍勢が美濃へ侵攻した。その行軍は神速の如し、稻葉山城を取り囲むのに一日もかからなかつた。

尾張大名・織田上総介信長の軍勢である。

既に中濃は織田家の支配下に入つており、西美濃衆への調略も進んでいた。ここで信長は一氣に斎藤家の本拠・稻葉山城を落とす作戦に出た。先代・義龍の死後、衰退著しい斎藤家は本拠を家臣の竹中半兵衛が僅か十七名で乗つ取るという事件を起こした。これが昨年一月のことである。

その後、半兵衛は城を龍興に返したが、自らの求心力が落ちていることを周辺国へ露呈する結果となり、人心は離れていく一方だつた。中濃一帯も織田家に寝返り、守護職を信長に取られまいと逆賊の手先と成り果てる主君を家臣たちは嘆き、見限り始めた。

「猿（木下秀吉）よ。西美濃三人衆は如何にしてある？」「はつ。人質を出す、とのことにござります」

猿と呼ばれた小汚い男は、身の丈に合わない大きな甲冑をガツシャガツシャと揺らしながら答える。

「ならば貞勝に受け取りに行かせる。者どもには儂の許へ参るよう伝えよ」「ははつ」

そそくさと退散する秀吉と入れ替わるように入ってきたのは柴田権六勝家だつた。その勝家に信長は命じる。

「城下を焼け」

「良いので？」
「構わぬ」

勝家は手勢に命じ、城下を焼き払わせた。斎藤道三が稻葉山の主になつた天文二年（1533）より三十一年、美濃守護の土岐頼芸を追放し、この地が事実上の国府となつた天文十年（1541）より二十四年後の今日まで繁栄を極めていた町並みは灰燼に帰した。

そして八月十四日。

西美濃三人衆（稻葉良通・安藤守就・氏家直元）らが信長の許を訪れ、臣下の礼をとつた。中濃に続き、西美濃までもが織田家に寝返つたのだ。この事実は稻葉山城内に大きな衝撃を与えた。

翌日、未だ動きの見せない東濃の者たちに幻滅した龍興は密かに城を脱し、長良川を小舟で進んで伊勢長島へ逃れた。これにより稻葉山城は落城、東濃の地侍が信長への恭順を誓つた。

ここに尾張織田弾正忠家の悲願であつた美濃平定は成つたのである。ことになる。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

翌月、信長は居城を小牧山から稻葉山へ移し、名を岐阜へと改める

ことになる。

九月四日。

越後国・春日山城

万余の兵が主君の合戻を待つてゐる。再び西上野へ進出してきた武

田信玄を食い止めるために出陣することになつてゐるのだ。

「ござり出陣ー！」

号令と共に、軍勢が隊伍を組んで進んでいく。幾重にも掲げられた真つ白な軍旗が戦列を乱さずに行軍を続ける光景は、まさに上杉勢の精強ぶりを感じさせた。そのまま軍列は三国峠を越えて関東へ入る。

上杉勢は沼田を経て厩橋城へ入った。

厩橋城は輝虎の関東出兵の拠点となつてゐる城で、一時は武田・北条の手に渡つたこともあつたが、今は奪還し、城代に北条高広を据えて守らせている。ここより南の地は敵の勢力圏、その中に上杉方の諸将が点在しており、輝虎の救援を常に待ちわびてゐる。

「高広、状況を報せよ」

「はつ。六月に倉賀野城が落ち、周りの諸城もことごとく武田の手に落ちてござる。信玄め石倉城を修復し、我らの箕輪城救援を阻む算段かと」

「つうむ……」

状況が悪い。石倉城は利根川を挟んで対岸、目と鼻の先にあり、ここに武田の大軍が入つてゐる。それは輝虎が厩橋入りする際にも確認できた。兵法の常道を行く信玄は、先に川を越えることが不利になると知つてゐるために上杉勢を攻撃してくることはなかつたが、悠長にしていてよい状況ではない。何よりも石倉城の役目は上杉勢を阻んでいる間に箕輪城を落とすことになり、厩橋城攻略の為の拠点ではないのだ。

（だがこれでは……）

はつきり言つて劣勢である。早期決着を着けなくては義輝との約束には間に合わない。輝虎が上野にいられるのは遅くとも今月いつぱいまでだ。箕輪城を救うには眼前の石倉城を攻略し、途上の和田城を抜かなくてはならない。それを成す時間は輝虎にはないが、せめて石倉城くらいは落として行かねば上野の形勢は逆転不可能なまでに陥る。

「利根川を氾濫させればよいのです」

「なに？」

唐突に上泉伊勢守信綱が発言する。信綱は義輝の使者として輝虎の許を訪れた以降、一族へ預けた上泉城へ戻り、かつての主家・長野家や北条高広を扶けていた。

「天文の初め頃か、利根川が氾濫して石倉城が崩落したことがございました」

天文三年（1534）、信綱がまだ二十代半ばの頃である。大雨によつて水かさの増した利根川が氾濫を起こし、鉄砲水が石倉城を飲み込んだのだ。その時、僅かに残つた三ノ丸の跡地に廐橋城が築かれることになった。

「石倉城は未だ俄造りでござれば、大水に耐えられますまい」

「されどそれでは、この廐橋とて一巻の終わりぞ」

高広が反論する。石倉城が対岸にある以上、この廐橋も被害を被ることになる。強度の違いから、ただこちらの方が被害が少ないというだけに過ぎない。また関東攻めの拠点を失うことにもなる。

「承知の上でござる。管領様がその必要はないと仰るのであれば、それで構いませぬ」

自分の意見はただの提案に過ぎないと言い切る信綱。信綱とてこのような戦法で敵を討つことは本意ではない。やはり戦で堂々と決着をつけるのが筋道と考える性格だ。これには輝虎も同じであることを信綱は知っている。しかし、同時に輝虎が上洛のために急いでいることも知っている。故に敢えてこのような方法を進言したのだ。

（厩橋を犠牲にすれば、武田に打撃を与えることが出来る。さすれば上野は元より信玄が儂の上洛を阻むことも留守を狙うことも叶わなくなる）

輝虎は迫られる。「己の矜持か、主君への忠義か。

（上様は妻子、母御を殺されてもなお生き恥を晒し、逆賊を討つ御覚悟をなされた……）

かつて春日山にて信綱に聞かされた話を思い起こす輝虎。義輝の無念に比べれば、今の自分の悩みなど大したことではないと気づく。

輝虎の眼がカツと見開いた。

半月後、石倉城は厩橋城と共に地上から姿を消した。氾濫した利根川の大水に飲まれたのだ。しかし、城ごと流された武田勢に対し、上杉勢は事前に厩橋を離れたことでほぼ被害は皆無だった。

数日後、輝虎は軍勢の大半を上野に残し、越後へ帰つて行つた。十月の初めのことである。

【
続
く】

第三幕 永禄八年 夏 - 決戦の時、迫る - (後書き)

まさかの一話連続投稿です。正直、疲れました。

また作中で信綱が軍師っぽいことになつていますが、そういう設定にしたのではなく、あくまで石倉城に限つて“経験から物を言つた”だけです。その後も軍師として活躍するわけじゃありません。

さて、次回から上洛編も盛り上がりしていく予定です。若狭出兵では戦らしい戦を書けなかつた（なかなか難しいのです、合戦を書くのは…）ですが、義輝と三好・松永の大合戦ではしっかりと書いていきたいと思います。

第四幕 いざ出陣 - 諸大名集づ -

十月一十五日。

越前国・一乗谷

ようやく待ちに待つた瞬間が訪れた。

城下に長蛇の列で入つてくる軍勢。掲げられる“毘”そして“龍”的軍旗。関東管領・上杉弾正少弼輝虎の軍勢である。事前に領主より報せを受けている住民たちはこれを歓迎した。

一方で不可解なこともあつた。七千と聞いていた上杉軍の数が明らかに多いのだ。どう数えても一万を越えている。

これには訳があつた。

輝虎は義輝に報せた通り、七千で春日山を出陣した。ただ輝虎の上洛を悩ませるのは関東や甲斐の武田ばかりではなく、越中の争乱も長年に亘つて輝虎を悩ませてきた種だった。ここ二、三年越中は比較的落ち着いてはいるものの留守を衝かれでもすれば堪つたものではない。そこで一計を案じることにした。

「上様の窮地である。臣下たる者、これを御扶けするべし。越中の者どもは我らが義挙へ加わられよ」

輝虎は越中の者たちを自軍に加えることにより、留守中に叛乱を起させないようにしたのだ。元より上杉方である越中の国人・椎名康胤はもちろんのこと、先年に輝虎へ降伏した越中守護代・神保長

職も輝虎の命令を拒否できず、矢継ぎ早に軍列に加わった。さらに輝虎は上杉家と友好関係を結んでいる能登守護・畠山修理大夫義綱へも合力を呼びかけ、畠山家は輝虎の申し出を快諾、義綱の父であり前守護の左衛門佐義続が上杉勢に加わることになった。但し、どの軍勢も上洛の仕度を整える時間が余りにもなかつたために数は能登・越中勢を合わせても五千程度でしかなかつた。

これにより上杉輝虎の上洛軍は一万一千にまで膨れ上がつたのだが、予定より多いというのは義輝にとつて喜ばしい報せだつた。

「輝虎！よつ参つた！」

「上様！？かよつなどころまで……」

報せを受けた義輝は門前で輝虎を出迎えた。それほどまでに上洛を決意した輝虎の来訪が嬉しかつたのだ。

突然の出来事に輝虎は下馬し、義輝の許へ駆け寄る。手を叩いて喜ぶ義輝の顔には刀創と思われる傷があつた。かつて京で義輝に謁見した時にはなかつた傷だ。洛中より脱出する際に付いたものだと推察され、これを見た輝虎は涙し、思わず視線を逸らして頭を下げた。

そこへ義輝が近寄り、そつと肩を抱き起こした。

「そなたが来てくれたならも安心じや」

「勿体なき御言葉にござります。必ずやこの輝虎が、上様を京へ御戻し致します」

「うむ。頼りにしておるだ」

義輝と輝虎、六年振りの再会であつた。

「左衛門佐もよう來てくれた」

「上杉殿に御誘いで今回の義挙を知つた次第にて。前もつて御報せ頂ければ、畠山家総出で參りましたものを…悔しゅ「ハジカリコマツ」

「よい。來てくれただけで余は嬉しいぞ」

恭^{ヤハシ}しく礼をする義続であつたが、実のところ輝虎の言つ義挙にはあまり関心がない。ただ参加してそれなりの功を立てれば、將軍と関東管領を後ろ盾に領内の大名権力を強化できると考えていたから、参陣したに過ぎない。その点、上方で幕政を牛耳るなどという野心は持ち合わせていないため、信用は出来た。

さていよいよ上洛、と思いきや問題が一つあつた。朝倉勢の仕度がまだ整つていないのである。義景は最後の最後まで上杉の上洛を疑つており、家臣らに上洛の仕度を命じていなかつた。ようやく命令を出したのは上杉勢が加賀に入つたという報せを受けた後である。故に一乗谷に集まっているのは敦賀郡司・景恒と一乗谷に近い所領を持つ者たちだけで、筆頭家老たる景鏡ですら未だ姿を見せていないという有様である。

「左衛門督殿が申すには、まだ五日はかかるとのこと」

「悠長な。輝虎が来ることは前もつて分かつていたことではないか」

「ここに至つてもなお鈍重な義景に腹を立てる義輝。上杉勢が来たことで、すぐにも出陣したいという逸りを抑えきれずにはいる。

「どうか落ち着いて下さこませ。この輝虎、上様を京に御戻しするまで帰らぬ覚悟で参りました。故に時間はたんとござります」

「おおつ、まことか！」

「はつ。故にまずは軍略を御聞かせ下さつませ」

「つむ。十兵衛、委細を説明せよ」

「畏まりました」

光秀が諸将の前に歩み出る。

「おおつ。そなたが明智十兵衛か
「手前をござ存じで?」

いざ軍略を説明しようとした矢先、光秀は急に輝虎から話しかけられたことで戸惑つた。

「うむ。勢州（上泉信綱）から聞いておる。何でも上様救出に一役買つたとか」

「とんでもござこませぬ。公方様救出は塙原様、伊勢守様のご活躍あればござこります。手前はわざやかなお手伝いをしたまでのこと」

「されどそなたの手助けで上様の御命が救われた。この輝虎から礼を言わせてくれ」

「手前などに……勿体のう存じます」

輝虎は光秀の謙虚で驕^{おこ}らない様に好意を持つた。一方の光秀も輝虎をかなり堅い人物かと想像していたのだが、初対面の者の前でも飾らない人柄に“噂とは当てにならないものだ”として印象を変えた。

「では軍略を御説明申し上げます。まず我らの動きに呼応し、反三好の者どもが挙兵する手筈になつております」

義輝が各地へ送つた御内書により反三好包囲網とも呼べるものが既に出来上がつていて。具体的には河内の畠山、大和の筒井、播磨の三木、丹波で内藤宗勝を討ち取つた萩野直正らが一斉に挙兵する手筈であり、中には既に活動を始めている者もいる。また三好よりの

独立を画策していた丹波の波多野秀治からも同心する約束を取り付けた。

「我らは来月の朔日ついたちに一乗谷を出陣、北国街道を南下し、敦賀で武田治部少輔様と合流、刀根坂を経て余呂で浅井備前守様の軍勢と合流いたします」

朝倉勢が揃うのに五日かかる。つまり本来であれば三十日に出陣できるのだが、せっかくなので縁起が良いとされる朔日に出陣することになった。また武田勢は一千、浅井勢は五千を出す予定になつてゐる。これに朝倉勢が一万三千、上杉と北陸の軍勢が一万二千、合わせて三万一千を数える。

「いじで、軍を二つに分けます」

「二つに？ 三好勢は三万余と聞く。兵を分ける理由は？」

兵法では数が同数の場合、兵を分けるのは下策とされている。それを敢えて行うにはそれなりの理由があつて然るべきである。

「はつ。恐らく三好・松永らの軍勢は、公方様の上洛を勢多で阻むと思われます」

古来より東から京へ攻め込む軍勢は、勢多川で防衛するのが常であった。源平合戦では平家が木曾義仲軍を阻み、義仲は源義経を同様に阻んだ。さらに承久の乱では後鳥羽上皇軍が鎌倉幕府軍を、南北朝の戦では足利直義が南朝軍とこの地で激戦を繰り広げた。しかし、いずれも防衛側が敗北している。それほどまでに京の防衛は難しいのだ。それを知っている輝虎にしては、回りくどく兵を分けずとも堂々と勢多を押し渡ればいいと考えている。また輝虎は兵を割いたところで自分がいる軍勢が負けるとは微塵も思っていないが、兵法

に反する策を探る理由は知つておきたかった。

「一手を西近江路より進ませる」と、敵の背後を齎かせます
「その考えは分からぬでもない。されどそれでは、勢多で合戦に挑
む際に敵勢に數で劣るのではないか？」

「（）安心を。既に我らは敵勢を上回つております」

光秀の説明では尾張の織田家、六角家より宿老の蒲生定秀、勢多城
主・山岡景？が参陣することが付け加えられた。

「つまり一手を割いたところで、（）ちらが敵に劣る」とはないと？
「はつ。左様にござります」
「ならば申す」とはない…と言いたいが、一つだけ
「何で（）ぞこましょう？」
「六角殿は出陣されないのか？」

輝虎の疑問はもつともだつた。こちらは三好・松永の謀略にあつた
とはいへ前將軍・義輝が出馬するのだ。朝倉と浅井、武田は揃つて
当主が出陣する。上杉に当たつても輝虎が出てきていし、畠山家
は当主ではないが前当主が出陣している。織田家からも信長が出陣
するといつ報せが届いている。なのに敵地にもつとも近い六角から
は当主はおりか一門の出陣もないのでは話にならない。

「親子揃つて病とか」

「何を莫迦な。上様に対する叛意を疑われても言い訳できぬぞ」

病が嘘ることは明らかである。それを咎めようとする輝虎を義
輝が制した。六角承偵が出てこない原因が浅井との対立にあると知
つてゐるからである。遠国の領主である輝虎はその辺りの事情が疎
く、気分を害するだけだった。

（あれはそういう男だ）

ただ義輝としては最初から承認には期待しておらず、家臣らの参陣があつただけでも儲けものと割り切つてゐる。

一方で光秀には拭いきれない不安があつた。織田家のことである。何度も問い合わせても“参陣する”との返答が来るだけで未だにどの程度の兵を送つてくれるか、合流地点が何処なのか、明確な回答がないのだ。業を煮やした光秀は自ら三度使者に出向いたが、一度は同じ返事ではぐらかされ、一度は鷹狩りに出てゐるとして会えず終いだつた。

それ故に西近江路に派遣できる兵は武田義統を大将に、朝倉景恒の敦賀勢、朽木元綱の計五千しか避けなかつた。

「次に陣立てですが先陣が六角勢、一陣に浅井勢、三陣が織田勢、四陣が畠山、越中勢、五陣に上杉勢、そして上様の本陣は朝倉勢が担当致します」

「お待ちあれ！」

「上杉様、何か？」

「我ら上様を扶けんと遠国から遙々参つた次第。それなのに五陣とは納得がいかぬ。替えて下され」

これに光秀は困つた。主な軍略は光秀と藤孝が練つたが、陣立てについては義輝の考えだつたので変更は憚られた。義輝はもつとも信頼する上杉勢こそ本陣と考えていたのだが、自分を保護している手前、朝倉勢を本陣に据えなければならず、ならばもつとも自分に近い本陣前にと上杉勢を置いたのだ。

しかし、輝虎は義輝を守るためではなく、三好・松永らと戦つために来ている。

「我らは地理に不案内である故に先陣とは申さぬが、一陣を任せて頂きたい」

輝虎の本音としては先陣である。しかし兵法では、もつとも戦地に近い者が先陣を切る”ということになつており、六角勢の先陣は戦の常道は踏まえたものだ。よつて一陣を希望した。

「よい、許す。余に越後勢の戦ぶり、見せてくれ」「ははっ！」

これに義輝が応じた。

確かに輝虎を傍近くに置きたいといつのはあるが、一方で精強と知られる越後勢の強さを見てみたいといつ気持ちもあつた。

そして十一月朔日。

「ござ出陣！」

前將軍・足利義輝は朝倉・上杉連合軍と共に一乗谷を出陣、一路京の都に向かつて北国街道を南下した。途中、敦賀で武田義統勢と合流し、刀根坂を越えて近江へ入る。義輝は半年前に僅かな供と落ち延びてきた道を三万近い軍勢と共に通ることは非常に感慨深いものがあつた。

（もはやこの道を反すことはあるまい）

京の都が近づくにつれて、義輝は胸の内に熱く湧き立つものを感じていた。だがそれを抑える。高ぶる気持ちを爆発させるのは、ここではない。

軍勢は近江へ入り、余呉に到達。この地で義輝は浅井備前守長政の出迎えを受けた。

「浅井備前守にござります。これより先は、我々が御案内仕る
「おおっ！そなたが備前守か」

長政の風貌は義輝の想像以上だった。

凡そ六尺（182?）にも及ぶ身長に見合った大きな体躯、若干二十歳の若者は幼さは残るもの精悍な顔立ちは戦国武将として十分なものだった。初陣で六角の大軍を破り、若年にて家督を継いだといつのも頷ける。

（いやつは……左衛門督と違つて頼りになる）

それが義輝の長政に対する印象だった。

京を追われ、將軍職を失つたものの若狭を平定、念願の上洛軍を発し、予期せぬ援軍、頼もしい勇将との出会いもあった。事は順調に運んでいる。しかし、全て義輝を喜ばせるものばかりではなかつた。

浅井家からの報せが入る。

それは“近江の何処にも織田軍の姿がない”といつものだった。

【
続
く

第四幕 いざ出陣 - 諸大名集つ - (後書き)

少し間が空きましたが、次話投稿です。

今後は投稿がまちまちなるかもしませんが、今年中に上洛編終了までいければと思っています。

第五幕 邂逅・光秀、忠臣と出逢つ・

十一月二日。

洛中・慈照寺

越前へ逃れている義輝が上洛へ向け、一乗谷を発つたという報せが早くも京に届いた。

「ははは……話が違うではないか！？」

一段高いところで脇息に抱きついて怯えている男の名は、足利義栄。第十四代足利幕府の將軍であり、全ての武家の頂点に立つ男である。

「それだけ、前將軍（さきのじゅうぐん）が本氣（ほんき）だということです」

「敵は三万を越えると聞いた」

「我らも三万、畿内（さいない）にいる味方を含めれば我らが上にござれる」

一方で冷静に状況を説明するのは今や京の主とも言える松永彈正少弼久秀である。

「將軍の味方は朝倉と浅井だけと申したではないか！上杉が来るなぞ聞いておらぬ！！」

「だからどうしたと言つのです。田舎大名（いなかだいめい）が一人増えたところで、何も変わりませぬ」

「関東管領ぞ！あの武田信玄すら勝てなかつた相手ぞ！」

「上杉はもはや関東管領にあらず。信玄めも所詮は田舎大名（いなかだいめい）である」

上杉輝虎や武田信玄が田舎大名かはともかく、義栄政権下では上杉

家に対しても関東管領の再任は行つていなかつた。つまり朝廷が認めた正式なる武家政権の足利幕府では、関東管領は不在状態となる。

「上杉は先の関東攻めで十万を超える大軍を動員したと聞いたぞ」「噂に過ぎませぬ。その証に、今回は一万にも満たぬと聞いてござる」

久秀がどのよつて言い繕われよつが、義栄は恐怖心を拭い去ること出来ずにしてゐる。この戦に出たことのない男は、ただただ“義輝迫る”の報に怯える事しか出来なかつた。

「どうやら上様は我らの力を侮つておる様じや。上方にて二十五年、向かうといふ敵なしの三好家に敵う者などおりませぬ」

「敵なじじやと！？何度か負けておるではないか！知つておるぞ！」「小競り合い程度の戦にござりやつ。最終的に勝ちを収めたのは我ら三好なり」

久秀が義栄を説得しているのも近江へ出陣させるためだ。迫る軍勢の総大将は前将軍・足利義輝。ならばこちらも将軍を総大将に担がなければ、三好方の将はともかく兵の士氣は上がらない。

（これだから阿呆は困る。これが義輝ならば即出陣に応じたものを……）

久秀は自ら追放した相手ながら、将軍としての器量を持つ義輝を羨んでいる自分を馬鹿馬鹿しく思つた。

「もう宜しい！前将軍めは我らのみで迎え討つ。それで宜しいな！」「わ……分かればいいのじや。分かれば……。つむ、吉報を期待して

おるや

出陣せずに済むと知つて安心したのか、尊大な態度を取り戻す義栄。そんな義栄の言葉を無視して立ち上がった久秀は、息のかかっている小姓たちに命じる。

「よいか！ けして將軍を外に出すでないぞ！」

このような男とはいへ、征夷大將軍である。將軍は三好・松永の象徴、勝手に堺などに逃げられては政権の崩壊に繋がりかねない。

不安を残しつつ、久秀は戦場となる近江へ向かう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

十一月四日。

美濃国・岐阜城

義輝と共に近江に入つた光秀は、織田軍の姿がないと聞いて愕然とした。すぐさま義輝に許可を貰い、己の面目に懸けて信長に約束を履行させるべく岐阜へ向かつた。

しかし、城下に入つた光秀は驚愕する。そこには辺り一面を埋め尽くすほどの軍勢が犇めいていたからだ。その数、凡そ一万を越える。しかし、これが義輝への援兵かどうかはまだわからない。何処か別の地へ出陣する軍勢かも知れないのだ。

光秀は駆け足で信長を訪ねた。岐阜城は信長が攻め落とす際に城下を焼いたこともあり、あちらこちらで普請の最中であったが、その

中でも政庁となる信長の居館は早々に金華山の山麓部分に築かれており、冠木門に虎口、土墨と最低限の防備も整えられている。

「おう、明智か。如何した？」

現れた信長は未だに軍装を纏つておらず、平服のままである。光秀が来訪した理由を掴みかねているようだった。

「如何したではござりませぬ！公方様の上洛に兵を出して頂けると約束であったはず。口取りは前もって伝えたはずです！」

「……ふう。そなた、眼は付いておらぬのか？」

「では城下の軍勢は、公方様への援軍でござりますか！」

「で、ある」

その瞬間、驚喜したと言つていいだろう。光秀自身、このような気持ちになつたのは生まれて初めてだった。少なくとも覚えはない。何せ城下で見た二万を越える軍勢が加われば、義輝の軍勢は五万を越えることになる。三好を圧倒できる。

「や…されど兵数は約束できないと織田様は…」

「言つたが、美濃攻めの最中だとも言つたぞ」

「た…確かに…」

光秀が信長に援軍を要請した際、兵一万を要求したのは出し惜しみをさせないためだ。戦国武将の兵を出すと言つても少勢で済ませることが多く、それを懸念してのことだった。しかし、その常識は目の前の男に覆された。それも良い意味で。

光秀の脳裏には一つの言葉が自然と浮かんだ。

“勝つた”……と。

「ならば今すぐ御出陣を御願い申し上げます。公方様は既に近江に入られており、三好・松永との決戦は間もなくとなりましょう」

「悪いが、それは出来ぬ」

「何故にございましょうか！」

柄にもなく素つ頓狂な声を上げる光秀。既に岐阜城下に二万の軍勢が整い、義輝の近江に入った。何を躊躇する必要があるというのか。その理由が光秀には分からぬ。

「まだ兵が揃つておらぬ」

「これ以上増えるといふのですか！？」

光秀はさうに驚いた。

「都合三万五千。もつとも間もなく駆けつけてこられる松平殿の軍勢と合わせた数だがな」

途方もない数だった。光秀が義輝と共に東奔西走して搔き集めた軍勢とほぼ同数の軍勢を信長は動員しようというのだ。確かに濃尾凡そ百万石を領する織田家にはその力はあるだろう。しかし、信長は美濃を攻め取つたばかりだ。

それには理由がある。

元々信長が治めていた尾張は有数の商業圏であり、熱田や津島はその中心である。故に上洛に必要なものは概ねそこで揃う。一方で信長は美濃を殆ど調略で落としたことにより領地替えが龍興の直轄地もしくは最後の最後まで味方した一部の側近の所領しか行われてお

らず、未だ美濃の領主たちは斎藤家が国主だった頃とそう変わりない。故に信長が命令を下すだけで充分な兵数を動員することが出来る。

また信長は後顧の憂いを断つために武田信玄の四男・勝頼へ養女を嫁がせることにした。現時点では既に結納を済ませており、輿入れを待つだけとなっている。さらに信長は妹の於市を浅井長政に嫁がせた。隣国、飛騨と伊勢には信長を相手に出来るほどの勢力はない。これにより全軍を躊躇なく動員することが可能になったのだ。

そりて松平が参陣することも嬉しい報せだ。

松平氏は三河の有力者でかつては三河一国を支配していた時期もある。少し前までは東海三力国を治める今川家の麾下に甘んじていたが、信長が桶狭間で今川義元を討つと独立、一向一揆との抗争を経て今では三河一国をほぼ平定している。

「な……ならば一部の軍勢だけでも送つては頂けないでしょつか？」

光秀は懇願する。織田の同盟者である松平が参陣する以上、信長は岐阜を動けないだろう。しかし、いま城下にある一萬の軍勢の一部を近江へ送つてくれるだけでも勝敗は大きくこちらへ傾くのだ。

「……ふむ。ならば西美濃衆五千を預ける」

「有り難く存じま……預ける？」

「援軍が必要なのであらう。そなたが率いて行け」

「お……お待ち下され！手前は他家に仕えし……」

「帰蝶の縁者で美濃の出、であろう。ならば我が身内も同じ。美濃衆を率いても何ら問題はなかろう」

「し……しかし……」

「この状況で使者など務めておるのじや。どうせ自ら率いる軍勢も持たぬのだろう? 義輝公の御為に軍勢を率い、働きたいとは思わぬのか?」

痛いところを衝かれた、と思つた。

「儂の家来は忙しくてのつ。そちが断るなら、上様への援軍は全軍が揃うまで待つことになるが…」

意地悪く信長が光秀に話す。信長としても朝倉の客分でありながら領分を越えて義輝に頼む光秀に興味を持つてゐる。その器量を試そうとしていた。

また光秀と自ら兵を率いて義輝に奉公したいという気持ちは強い。しかし、悲しいかな今の自分はその立場になかった。だからこそ出来ることをやろうとして信長の許へ使者として出向いているのだが、信長の破天荒な申し出を受けければ、自らの望みが叶う。そしてそれは何よりも義輝の抜けになる。

「…お引き受け致します」

こつして光秀は思わぬ軍勢を率いることになった。しかし、通常なら他家から送り込まれる人間は軍監や田付などになる。一隊ならともかく五千もの兵を他家人間が率いるというのは問題のある行為だ。それが早くも露見することになる。

「何故に光綱(光秀の父)の猝如きの指図を受けねばならぬ。信長様は我らの忠誠をお疑いか」

美濃衆は信長に従つたばかりで心服してゐるとは言い難かつた。ま

た彼らは明智家を既に没落した家と認識しており、けして自分たちの上に立つ者ではないと思っていた。光秀に預けられた西美濃衆の面々は揃って挨拶に顔を出すよつなことはせず、こちらから訊ねても会つて貰えなかつた。

(「これでは軍勢を預けられても何も出来ぬではないか！」)

と、心の中で呟く光秀だつた。

「申し訳ござらぬ。主たちは信長様の御命令には従つが、明智様の下知には従えぬと申しております」

それでも信長の命令である以上は光秀との連絡は必要であり、稻葉良通の家臣・斎藤内蔵助利三が付けられることになった。利三は幕臣の蜷川氏と縁が深く、義輝との連絡役を務める光秀を相手にするには適任といつことで抜擢された。

「こちらこそ済まぬことをしたと思つておる。私は織田様に援軍を請いに参つただけのこと、戦の采配まで指図したりはせぬ故に御安心下され」

「されど、信長様より大将は明智殿と伺つております」

「儂とて立身出世の欲がないわけではござらぬ。されど織田様より預かりし公方様への援兵。何よりも大事は公方様を京へ御戻しし、天下の秩序を回復することにござる。私が原因でせつかくの軍勢が使い物にならぬでは意味がござるまい」

最初は自らの手で采配を振るえるかと意気込んだ光秀だが、西美濃衆の面々に^{くせ}臍を曲げられてしまつては意味が無いので名田上の大将として道案内役に徹することにした。

（まつたく…指図をせぬとは清廉な方ではないか。殿は何故に明智殿を嫌われるか）

一方で利三は腹立しく思った。

所詮、良通の考えは大局を見、天下を考えている光秀からすればどうでもいいことに過ぎない。地方豪族の意地の張り合いなど“公方様の御為”の言葉で一蹴される程度のことなのだ。幕臣との繋がりが深い利三是、光秀の考え方と共に共感を覚えた。

「明智殿。主がどう申しましょうとも我が手勢だけは明智殿の下知に従いましょう。何なりと御命じ下され」

「いや、それでは斎藤殿が良通殿に叱られましゅう」

「御心配には及びませぬ。信長様よりの御命令が、明智殿の下知に従うことなのです。遠慮は無用と申すものにござる」

「有り難い。必ずや働きを無駄に致すこととはしませぬ」

利三の申し出により、光秀は三百だが意のままに動かせる軍勢を手にする事が出来た。この僅かな兵が目の前に迫つている戦で思わぬ活躍をすることになるとは、光秀も利三も知る由もなかつた。

そして、この二人の出会いが長い付き合いの始まりになることも……

【 続く】

第五幕 邂逅 -光秀、忠臣と出逢つ- (後書き)

次話投稿です。

やつぱり光秀と言えば、斎藤利三ですよね。まだ彼は光秀の家臣ではありますか、後々は……

さて次回、よひやく両軍が出揃います。合戦も間近です。

第六幕 勢多対陣 - 長逸、謎の余裕 -

十一月六日。

近江国・佐和山

北近江の領主・浅井備前守長政の案内で行軍を続ける義輝は、この地で光秀の率いる美濃勢と合流した。光秀から事情を聞いた義輝は上機嫌に笑つた。

「はっはっはっはーそちが大将か！？上総介も面白いことをするのう」

これに釣られて諸将も陽気に騒いでいる。しかし、義輝と違つて光秀が大将であることが嬉しくて騒いでいるのではない。織田勢が三万五千もの大軍であることが勝利を決定づけたと考え、浮かれているのだ。

「これで勝つたも同然ですな、上様」

一色藤長が勝利を確信する。藤長だけではない。北陸勢や長政もやはり勝利は間違いないものと考えていた。織田勢が合流すれば義輝勢は全体で七万になる。対する三好・松永が三万余であることは既に勢多を領す山岡美作守景？から報せが入つてるので、倍以上の軍勢となる。常識では倍する軍勢に野戦で勝つことなど不可能に近い。

しかし、そんな中で笑つていらない者が三人だけいる。

一人は明智光秀本人。いきなり大将を任せられながらも美濃勢は言

うことを聞かない始末。そんなことを知らない義輝らは陽気に笑っているが、自分はとてもそんな気ではいられなかつた。僅かに自らの意の届く斎藤利三勢を如何に活用するか、脳漿を振り搾つているところだ。また朝倉義景も笑つていない。といつより、苦虫を噛み潰したような表情でいる。家格が下のはずの信長が自身の倍する軍勢を率いてくることが、単に面白くないのだ。

そして瞑想するように諸将ひいては義輝の様子を窺つていた上杉輝虎も、その一人だつた。

「皆々方、浮かれるのも宜しゅうござるが、戦はまだ始まつておらぬことをお忘れなきよ」

「されど上杉殿。」こちらは七万、勝ちは揺るぎないかと。三好の栄華も数日之内で「ござる」

「三好の名は天下に轟いておる。簡単に勝てる相手ではなかり」
「三好の隆盛は修理大夫（長慶）あつてのこと。かつての勢いは見る影も」

「黙らつしゃい！^{たと}え十万を持つてしたところで、勝てぬ戦も有り申す！」

いきなり輝虎が浮かれる諸将に一喝した。大兵を得たことと三好を侮り始めており、樂勝気分が漂つっていた。これでは、勝てる戦も勝てない。

輝虎は、大兵を持つてしても勝てない戦があることを知つてゐる。それは四年前の小田原攻めで経験したことだ。

永禄四年（1561）三月。輝虎は関東管領・上杉憲政を奉じて小田原城を攻めた。この時、常陸の佐竹、安房の里見、下野の宇都宮、武藏の太田、成田など関東諸侯が挙つて輝虎の許へ馳せ参じてきた。

その数、十万を超えた。当時、輝虎は義挙に続々と参じる諸侯を見て、此度の小田原攻めで北条は滅び、足利公方が鎌倉へ歸し、それを関東管領として自分が支えることになるだろうと信じて疑わなかつた。

しかし、結果は惨敗と言つていいだろう。十万を持ってしても小田原城の一郭すら落とすことが出来なかつたのだ。

「済まぬ、輝虎。少々浮かれておつたわ」

輝虎のただならぬ雰囲気を察し、素直に己の非を義輝は認めた。

「申し訳ござりませぬ。あの時の六角の過ちを、某が行つといふでした」

若い長政もこれに続く。自身で既に倍する軍勢を討ち破つたことのある長政は、今の状態の拙さを理解できないはずはなかつたのだ。

「されどこちらが有利なのは間違ござらぬ。堂々と参りましょうぞ」

自らの一喝で消沈している諸将を宥めることを輝虎は忘れなかつた。戦の前なのだ。士氣は高くなければならない。故に、輝虎は敢えて義輝の前でこのよつた行動を取つた。

「だかこれからどうする?上総介を待つか

今後の方針について、義輝が輝虎に問い合わせる。しかし、輝虎は静かに首を左右に振つた。

「いえ、ここのまま進みます。既に今ですら三好に引けを取らぬだけの軍勢がござります。先に陣地を築いておく必要もございますれば…」

「そうか。ならば行くとしよう」

こつして西美濃衆五千を加えた義輝勢は、東山道を西へ進んだ。三好・松永の待つ勢多へ向けて…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

十一月七日。

近江国・膳所

勢多川の西に位置するこの地に、三好の本陣はあった。

「義輝めが勢多へ入つたようだな」

「はつ。伽羅山の下野守（三好政康）から報せが届いております」

「しかし、大丈夫か？織田勢が加わつたといつ報せもあつたぞ」

「大した数ではござりませぬ。織田信長など、尾張では大うつけと評判の男にござる」

「そうか…。されど悠長にしておつていいのか？すぐに戦になるかもしれませんぞ」

「前将軍は阿呆ではあつませぬ。こちらの陣を見れば、安易に攻めかかつたりはせぬかと」

主君である三好義継に報告する三好長逸は、自軍の布陣に絶対の自信を持っていた。

義輝が入つた勢多城の対岸にある石山寺に三好一の戦巧者である三

好下野守政康を配し、背後の伽羅山全体に陣城を築いている。またそれを支援するように勢多の南、田上に松永久秀の八千が布陣しており、義輝勢が勢多川を渡ろうとすれば側面を衝ける格好となつてゐる。また逆に義輝勢が先んじて松永勢を攻撃しようとなれば、大戸川を天然の堀とした堂山、 笹間ヶ岳に築いた陣城に籠もる。義輝勢が後方攬乱かくらんの為に送り込んだ武田勢も岩成友通が防いでおり、坂本より南へ進出するのを防いでいる。

まさに鉄壁の布陣である。

「だが守るだけでは勝てまい。」こちらから攻めかかるべきでは？」「いえ、けして我らから攻めかかってはなりません」

これが義継に理解できなかつた。

攻め込んできたのは義輝側であるため、こちらが自然と守勢になるのは理解できる。しかし、長逸の策は守り一辺倒で義輝が諦めて撤退するしか勝つ方法がない。

「堅く陣を守つていれば自然と勝利は我らに転がり込んで参ります」

と言つてニヤリと笑う長逸。その怪しげな表情が若い義継を不安にさせる一因でもあつたが、義継を名田上の主君と扱いながらも軽んじてゐる長逸はそれの意味するとこりを教えるようなことはしていなかつた。

(策があるなら申せー)

というのが義継の心情であつた。長逸といい久秀といい、自分の知らないところで好き勝手をやつてゐるのは分かつてゐる。だが彼ら

に支えられなければ三好の当主ですら居られないことを義継は承知している。

「さて、前将軍が如何様な策を講じてくるか、見物すると致しました。」

長逸の眼が東を向く。しかし、視線は義輝勢の遙か後方を向いていた。

＝＝＝

十一月十一日。

近江国・勢多城

義輝が勢多城に入り、五日が経過した。

初めはすぐに攻めかかるべきと諸将の多くが主張したが、輝虎がそれに難色を示したことで開戦は先送りにされている。

理由は三好勢の陣城にあった。

「悔つてはならぬ。策もなく攻めかかれば、こちらの被害は大きくなる一方じや」

「されどこちらは敵より五千ほど多い。多少の犠牲は覚悟するべきでは？」

連日、勢多城内では軍議が行われている。議題は織田本隊と合流する前に開戦するかどうか、である。開戦派は朝倉義景に浅井長政、一色藤長。慎重派は上杉輝虎と畠山義続、明智光秀が主な面々だ。

義輝はあくまでも議論を見守る形で己の考えを述べる真似はしなかつた。自分が意見を言えば、それで決まってしまうからだ。

開戦派の主張は、現時点で既に敵勢を上回っていることだ。三好は凡そ三万。こちらは合流した織田勢、蒲生・山岡勢と合わせて三万五千となる。既に数で上回っているのだから、これ以上に敵が守りを固めない前に攻めかかるべきと主張する。

慎重派の主張は、勢多川を渡る以上は攻める側が不利、数の優位など簡単に吹き飛んでしまうことを問題視した。また織田・松平勢が三万が合流することは分かつてるので、これを待つべきと主張する。

「ふん！ いつ来るか分からぬ者を待つても仕方あるまいて」

慎重派が開戦派を押し切れないのはこれが理由だった。未だに信長よりいつ合流できるか報せが届かないのだ。戦巧者である輝虎がいるために即座に開戦には至らなかつたが、押し止めるもはもう限界だった。

「叡山も堅田衆も我らの味方に転じた。機は熟したと思つが？」

比叡山は古くから王城鎮護の地とされ、山全体を境内とする延暦寺の協力は京を支配する上で必要不可欠だつた。三好・松永の横暴に堪えかねた延暦寺が、軍監として西近江路を進む武田勢に身を投じて、いる細川藤孝の働きかけにより味方となつたのだ。

また琵琶湖の水運を握る堅田衆も大坂湾での交易を重視する三好家を快く思つておらず、寝返つてきた。大勢は、徐々に義輝方に有利になりつつある。

「あと一日待つ。それで上総介より報せが届かねば、戦を始める」

義輝の断により、軍議は開戦派優位の下で決した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

その日の夕刻。明智光秀の陣へ思わぬ来客があつた。

「！」…これは覚慶様！？」

「明智か。邪魔するぞ」

覚慶。義輝の弟である。先の変事で和田伊賀守に助け出され、今まで近江の地で過ごしてきた。五日前に義輝が勢多城へ入るとこれに合流、感動の再会を果たしていた。

「兄上が困つておると聞いた」

「はつ。ここにきて織田勢と合流する前に開戦するかどうかで揉めております」

義輝としては一致団結して三好・松永に挑みたいところであつたが、信長嫌いの義景が何かと開戦を主張して足並みを乱している。その理由は簡単だ。織田勢三万が合流すれば、主導権を奪われることが明白だからだ。今なら朝倉勢が一番多いため、発言力が強いのは輝虎よりも義景である。このまま三好に勝利すれば、後から信長が大軍を引き連れて駆けつけてきたところ立場は搖るがない。

「どうにか助けたい。何か出来ぬか？」

「そう仰られましても……」

「そなたは兄上が頼りとする智恵者と聞いたぞ」

覚慶のその言葉こそは嬉しいものだが、かといってすぐに何かを閃くものではない。そもそも満足のいく策などあれば、既に義輝に言上している。

だがその時、光秀はふと脳間に聞いた“叡山”といつ言葉を思い出した。そして、田の前の貴人へ眼を向ける。

「な…何じゃ？」

「大変申し上げづらいことなれど、覚慶様の御協力を賜れるのであれば……」

「お…おおー兄上の為ならば何でもするぞ」

「某と共に、叡山へ参つては頂けませぬか！」

といひが、光秀は意外な来客をきつかけに光明を見出した。

ここ五日、義輝方とて無為に過ごしていたわけではない。得た情報から將軍・足利義栄が出陣していないことが分かつてゐる。三好方の総大将は管領・細川信良である。となれば、義栄は何処に居るのか。京であるのは間違ひなく。叡山まで出向けば場所は知れるだろう。こちらが大軍である以上、京には三好方とて大した兵は残つていないものと予測できる。ならば、急襲するのみ。上手く行けば、敵の動搖を誘うことが出来る。

「仔細は分かつた。されど叡山は禁制の地、軍勢は通れまいぞ」「承知しております。されど覚慶様の御尽力があれば、あるいは…

…」

大軍を動かせば、相手方にも知れる。しかし、光秀が実質動かせる

兵は斎藤勢の二三百のみ。それならば夜陰に紛れて琵琶湖を渡り、叡山を経て京に至ることは出来る。必要なのは、延暦寺の許可のみだ。

「分かつた。何でもすると申した以上、叡山でも何処へでも行こう」「有り難き仕合わせ！」

光秀は喜び勇んで義輝に許可を得るべく目通りを願つた。初めは五千の兵を預かる大将が軽々しく動くべきではないと光秀を宥めた義輝だったが、光秀は己の下知に従わない美濃勢の実情を伝え、自分が隊を離れても問題がないことを説明した。

「十兵衛、覚慶を頼むぞ」「はつ！」

義輝は延暦寺に対し、自分に協力してくれるよう書状を認め、光秀に渡す。

夜半、光秀は覚慶と共に琵琶湖を渡つた。

十一月十四日。

勢多川に犇めく軍勢は三万五千。その中に座するは足利義輝。静かに瞑想し、呼吸を落ち着かせる。

（眞の將軍が誰であるか、身を以て知るがよい）

義輝は騎馬し、愛刀・鬼丸国綱を引き抜く。そして眼前的逆賊三好・

松永勢三万へ向けて采の代わりに振り下ろした。

「かかれええいい！」

ついに合戦の火蓋は切つて落とされた。

【
続く

第六幕 勢多対陣 -長逸、謎の余裕-（後書き）

次話投稿です。

次回は合戦編となります。全1回（もしくは2回）ほどで書きたい
と思います。

第七幕 唐橋の激闘 - 生きた伝説と鬼の意地 -

十一月十四日。

近江国・勢多川

前將軍・足利義輝の怒号により、戦が始まつた。

「かかれえいい！」

義輝方の先鋒は上杉勢の柿崎景家である。先鋒と決められていた勢多城主・山岡景？は三好・松永方が二手に分かれて布陣していたために急遽、勢多一帯の地理に疎い上杉勢を支援することになった。一方で松永久秀が布陣した田上方面は予定通り蒲生定秀が先鋒を務める。

勢多川はとにかく川幅が広い。広いところでは一町（約200m）を越え、とても地勢を知らない者が簡単に渡河できる川ではなかつた。よつて大部分では両者が対峙するも弓矢での応射や喚声が飛び交つている程度だ。とは言つても敵陣に届くほどの強弓を射れられる者はごく僅かなために、死傷者はほぼ出でていない。勢多城の南側は川幅が狭くなっている箇所があり、山岡勢の支援で上杉勢の渡河が始まつていた。

「怯むな！楯を構えよ！慌てず進めい！」

景家の命令で兵士たちは「矢に備え、楯を押し立てて徐々に三好方へ接近する。三好勢の先鋒・三好政康は麾下の将・池田勝正に命じてこれに当たらせた。幾百、幾千もの矢が柿崎勢を襲う。しかし、柿崎勢はこれに倒れる者はいれど、一兵一兵が脇目もふらずに前進

を続いている。

「ええい！小賢しい真似を……」

横一列に並んだ楯が迫ってくるのには得も言われぬ威圧感がある。部隊は着実に敵陣へ近づいていった。

その様子を岸から眺めていた景家は満足そうに頷き、馬首を北へ轉じた。

勢多川の北側には勢多川唯一の橋が架かっている。唐橋で有名なこの橋は、平時なら多くの人が行き交う交通の要所である。この橋を、三好方は落とさずにいた。故にこの橋さえ占拠してしまえば、上杉勢は安全に川を渡ることが出来る。この唐橋を確保するのが、先陣たる景家の任務である。

「突っ込めえええ！！」

景家が自ら手勢を率いて橋を渡る。喚声を上げて駆け走る集団が一條の矢の如くなり、敵に向かっていく。この突進力こそが柿崎勢の強みである。第四次川中島合戦で武田本隊を壊滅寸前まで追い込んだのは、先陣を務めた自分である。その自負が、景家の誇りであった。

だが、景家の槍は敵に届くことはなかった。

「撃てい！」

景家の足を止めたのは一百挺近い鉄砲だつた。景家…いや上杉勢はこれまで鉄砲の一斉射を受けたことない。上方でこそ鉄砲の流通は

進んでいるが、東国では大名や在地領主がいくらか持っているだけで本格的に戦闘で使用した例はまだない。

この初めての出来事に、柿崎勢は思わず足を止めてしまったのだ。

「突っ込むしか能のない阿呆が！ これだから田舎者は困る」

政康が大仰に笑う。唐橋は重要地であるために政康が自ら指揮を取つて守つている。

「おのれッ！ 鉄砲とは卑怯な！」

叫んだところで状況が変わるわけでもなかつた。鉄砲の応射は上方では一般的になりつつあり、その重要性は増しつつある。槍を付けられなかつたことは、常に上杉家の先鋒を務めてきた景家の誇りを大きく傷つけた。だが景家が思いつく対処法といえば、弓矢と同じく楯を構えてひたすら進むしかなかつた。

上方の戦が地方の戦と違うことをなぜかと見せつけられた瞬間だった。

一方で田上側でも戦は始まつていた。

対するは蒲生定秀の一三〇〇と松永久秀の臣・高山友照の一五〇〇だ。こちらも川を挟んでの戦いになるが、大戸川は勢多川ほどの川幅はない。よって定秀は広く部隊を展開し、平押しで攻めた。

「撃てい！」

友照の号令で鉄砲が火を噴く。ばたばたと足軽が倒れるが、柿崎勢ほどの混乱はない。蒲生勢は鉄砲に慣れており、自身の部隊にも鉄砲を持たせている。倒れた仲間の屍を踏み越え、前進を続ける。

「撃ち返せッ！」

今度は蒲生勢の反撃で高山勢が倒れる。応射が続く中、数に勝る蒲生勢が少しづつ押し込んでいく。定秀としては、主君が出陣しない以上は先陣を任せられた自分が醜態を晒すわけにはいかなかつた。

「さて、問題はこれからじゃが……」

ただ定秀には一つ心配があつた。浅井長政が本気で蒲生勢を支援してくれるかだ。

今さら言つ話ではないが、定秀の仕える六角家と浅井家は現在も交戦状態にある。今こうして同じ軍に身を置いているのは足利義輝という存在があるからでしかない。だが浅井としては、義兄・織田信長三万の援軍がある以上は必ずしも六角の協力は必要なく、蒲生勢がここで壊滅してしまっても問題はない。むしろ今後のことを考えると、潰れてしまった方が都合がいいはずだ。

「殿、今後のことを考えますと、即座の出撃は見送られるべきかと」

「その様な考え方には好かぬ！今の蒲生殿は味方じゃー左様に心得ておけー！」

だが浅井長政という男は冷酷な策士や非道な人物ではなく、義を重んじる男だった。家臣の進言を退け、定秀を安心させるために早々に兵を進めた。

「皆一これまでの遺恨は一時棚上げじや。蒲生殿を支援せよ」

長政は軍団を一つに分けた。一方は自らが率い、蒲生勢を支援する。もう一方は磯野貞昌に預けて大戸川の東側から渡河させた。すかさず久秀も奥田忠高に一手を預け、両者は戦闘状態に入った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

戦が始まって一刻（一時間）余り。義輝は本陣とした勢多城内で報告を聞いていた。

「ふむ。上手く行かぬものよのう」

ここまで事が上手く進んでいた義輝は、一進一退で膠着する戦況に僅かな苛立ちを覚えていた。

「まだ戦は始まつたばかり。今からじざる」

「されど輝虎。田上はともかく勢多の抵抗は激しい。兵どもの悲鳴がここまで聞こえてきておるぞ」

「相手も必死です。上様がその様に浮ついておれば、兵たちが動搖いたしますよう。どうか落ち着いて下さりませ」

「ふつ…余が浮ついておるか」

輝虎の指摘は正しい、と義輝は思った。目の前で戦が始まっているところなのに、自分は城の中でじつとしている。何處か落ち着かなか

つた。やはり元来、自分は武人なのだと思つ。座つて兵を指揮しているよりは動いている方が安心する。その様な気質なのだ。しかし、武家の棟梁である以上はそうであつてはいけないのだろう。そういう意味では、昨今の將軍は武家の棟梁でなかつたのだ。名田上の存在であり、実が伴つていなかつた。権威はあつたが権限がなかつたから、自ら指揮する兵があらず経験を養う場がなかつた。

それは今でも同じだ。戦つているのは義輝派の大名衆であり、自家の兵ではない。

（だが、これからはそうあつてはならぬ……のだろうな）

この戦いで勝てば、義輝は將軍家を強くしなければならない、と決心をした。己が手で領地を経営し、兵を養い、諸国の大名に匹敵、凌駕する軍団を作り上げなくては、足利將軍家は傀儡のまま操られるだけの存在で乱世を生き長らえるか、滅びるかになる。その点では、この上杉輝虎から学ぶべき事は多い。

「では上様の不安をこの輝虎が拭い去つて参りましょ」

輝虎はニコッと笑つと、一礼して退出した。替わるように入つてきたのは朝倉義景だ。

義景は輝虎が本陣に詰めている間、殆ど義輝の傍を離れていた。輝虎が居ると義輝は輝虎とばかり話をするため面白くなかったのだ。体のいい理由を付けて自陣に戻つていた。

「上杉殿は御出陣ですか？」

「つむ。流石は輝虎よ。自軍が苦戦しておるとこにあの余裕じや」

「苦戦しているのなれば、ひと出陣して指揮を取れば良いと思いま
すが…」

「つづく皮肉をとこねびこね交えてくる義景を義輝は好きにはなれ
なかつた。輝虎がここにいたのは、偏に総大将である自分を思つて
のことだ。その自分を置いて離れていた者の言ひ台詞ではない。

そして、その義景を邪険には出来ない自分が腹立だしかつた。やはり朝倉勢が主力で中核なのだ。その当主たる義景の存在は大きい。

（上総介よ……早く余の許へ参れ）

義輝は朝倉勢に代わつて主力に成り得る信長の到来を待ち焦がれた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

自陣に戻つた輝虎は、さつそく義輝の言葉を家臣たちに伝えた。

「上様が“まだ唐橋を突破できぬのか”と御怒りじや。これでは上
杉の面目は丸潰れぞ」

「それはいけませぬ。拙者が景家殿の尻を叩いて参りましょう」

「ならば弥太郎に命ず、景家を支援して唐橋を突破せい。急がねば
儂が自ら先陣を務めるぞ」

「承知しました」

柿崎支援に名乗り出た小島弥太郎貞興は、先陣同士がぶつかり合う
唐橋へ向かつた。到着した貞興は、主君の言葉を伝えるべく景家の
居場所を探つた。

「おおりやあああ！！！」

「せいいやあ！！」

景家は勢多橋の中央で暴れていた。対する相手は粗末な鎧だが大きな金碎棒を振り回し、景家に襲いかかっている。景家は上杉家中でも指折りの剛の者だ。その景家を相手に攻めの姿勢を貫いている。相当の腕前に思えた。

「よき勝負ではないか」

弥太郎は主命を受けた身だが、目の前の激闘に目を奪われた。十合、二十合と繰り広げられる戦いは、まさに死闘であり、弥太郎は固唾を呑んで見守った。

「死ねやッ！」

「ふんッ！！」

景家が鋭い突きを繰り出す。が、相手も流石だ。金碎棒を横薙ぎに払つて景家の槍を吹つ飛ばした。

「ええい！この馬鹿力が！！」

「お主が非力なだけよ」

槍を失つた景家が太刀を引き抜く。しかし、金碎棒の渾身の一撃が景家を襲う。咄嗟に抜いたばかりの刀で防いだ景家だつたが、愛刀は碎け、自身は威力に押されて後方へ投げ出された。

「い…いかん！？」

武器を失つた景家の敗北は必至だ。弥太郎は景家救出するべく唐橋

へ急いだ。

「止めじや

「ええい！舐めるなッ！」

金碎棒を振り下ろす男の腕を景家は懸命に抑えるが、男の馬鹿力に金碎棒の重みが加わり、とても抑えられそうにない。そこへ、横から貞興が痛打の一撃を浴びせて景家を救う。

「や…弥太郎か。いらぬ真似を……」

「討たれる寸前だつたではないか。大人しく後方で休んでおれ」

「何を申すか！このまま引き下がれるかッ！」

「獲物もなければ戦えまい。ここは儂が引き受ける」

「…うつむ。獲物を取つてくるまでだぞ。いいな」

「ああ、わかつてあるわ」

意地でも己の負けを認めようとしない景家は、憮然とした表情をしたまま後方へ下がつていった。

「儂に不意打ちとはいひ度胸じやのう。覚悟は出来ておるうな

「ああ、貴様を討つ覚悟ならな」

男は立ち上がり、金碎棒を拾いながら弥太郎へ身体を向ける。

「上杉が臣、小島弥太郎じや」

「ほつ…名乗りを上げるとは。やはり田舎者は古くせ」

源平合戦以来、一騎討ちが戦の華として語られなくなつて久しい。特に上方での戦は殆ど組織戦に変貌しており、太刀を振るつて暴れることはあつても正々堂々名乗りあつて戦うことは少ない。だが、

そういう古へやことじが実のところの男は嫌いではなかつた。

「十河存保が家臣、阿波国人・七条兼仲である」

まだ二十歳前後に見える若者の両腕は“鬼”的異名を持つ小島弥太郎の倍はあろうかと思つくらい太かつた。この豪腕から繰り出される金碎棒の一撃の凄まじさは、無数の穴が空いた唐橋が物語つくる。御陰で兵卒の移動がままならなくなつてあり、周囲で戦つている兵も僅かに数十といったところだ。ただ兼仲が陣取つてることで、鉄砲が飛んで来ないことは幸いだつた。

「煩い小僧め！その生意気な口を塞いでくれるわ！」

「フン！ 雑魚が」

兼仲が金碎棒を振るう。弥太郎はこれを槍で受けるような真似はない。受けねばどういう結果になるか、景家との戦いで見ていて知つていい。隙を見て槍を突くが、相手も流石の腕前で簡単に防がれてしまう。

「ならば……」

狙うは相手が金碎棒を振るい終わつた時、その瞬間を狙う。重量のある金碎棒はよほどの豪傑しか用いることのできない武器であり、防御不可能の代物だが、あくまでも一撃必殺の武器な為にその後に出来る隙は大きい。こちらの攻撃を防ぐ手立てはないはずだ。

一合、二合、三合と隙を窺う。そして十三合目、痺れを切らした兼仲が不用意に上段から力任せに金碎棒を振り下ろしてきた。

「もらつた！」

これを上手く躱した弥太郎が渾身の力を込めて槍を突き出す。しかし、結果は弥太郎の予想を反するものだった。

「甘いわ！」

驚くべき事に、目の前の男はまるで棒切れを扱つかの如く金碎棒を切り返してきたのだ。弥太郎の槍は叩き折られ、突きだした利き手に強烈な痺れが走った。

「うぐ……」の化け物め

「死ね」

再び金碎棒が弥太郎へ向けて振り下ろされる。

「くつ……」

「ちつ、逃げるのが上手い」

弥太郎は地面を蹴り、後方に飛びことで咄嗟に攻撃を避けた。

「諦めよ。力の差は分かつたであろう」

兼仲が勝者の笑みを浮かべ、近づいてくる。弥太郎は刀を抜きたいところだが、利き手は痺れでいて使い物にならない。

（こんなところで負けられるか！実城様、悲願の上洛ぞ！それも最初の戦の最初の戦いで……上杉の名に泥を塗るような真似は出来ぬ！）

弥太郎は渾身の力を込めて地面を蹴る。腕が使えないのなら、己の

全てを使って相手にぶつけようというだ。

「お…お」

兼仲は弥太郎の思わぬ行動に反応できなかつた。その身で突貫してきた弥太郎に激突され、後ろへ倒れ込む。頭は地面上に叩きつけられ、軽い脳震盪のうしんとうを起こした。

兼仲に馬乗りになる形になつた弥太郎が利き腕でない方の手で短刀を引き抜き、兼仲の喉元へ目がけて振り下ろす。兼仲は朦朧もうろうとする意識の中で弥太郎の首筋を掴み、思いつきり締め上げた。

「う…が…が…」

首を締め上げられた弥太郎の顔が苦痛に歪む。だが弥太郎の眼は死んでいなかつた。ギロリと兼仲を見据え、短刀を止めることなく振り下ろした。

「ぐはつ…」

弥太郎は口から血反吐を吐いた。そして意識を失う。だが、それでだつた。力なく倒れ込んだ弥太郎の下では、“生きた伝説”と称された七条兼仲が死んでいたのだ。

“鬼小島”の勝利だつた。

「まったく…あの化け物を退治するなど、大したものよ。上杉一の侍は、そなたのようだ」

駆け寄つた景家が、意識を失つている弥太郎へ最大限の讚辞を送つ

た。

「後は儂に任せて休んでおれ」

景家は家臣に弥太郎の介抱を命じると、配下の兵を従えて敵中へ乗り込んで行く。兼仲という防波堤をなくした三好方は意氣消沈し、精度の鈍つた鉄砲だけでもはや景家の突撃を押し止める」とは不可能だった。

勢多の唐橋は、上杉勢が占拠した。

【
続く】

第七幕 唐橋の激闘 - 生きた伝説と鬼の意地 - (後書き)

合戦前編です。

いや、合戦を上手く書くって難しいですね。（半分は一騎討ちですが…）今回は上杉勢中心でしたが、次話は他の陣営についても書いていきます。

第八幕 亂世の大義 -面従腹背の徒、出陣す-

十一月十四日。

洛中北部

勢多で合戦が始まる僅かに前のこと。光秀は比叡山の麓、若狭街道近くにいた。

「やはり義栄は、長門守（京極高吉）様の情報通り相国寺に移つているようです」

「慈照寺ではないと？」

「はつ。三好方の兵も相国寺に出入りしております」

覚慶が身の証を立てたことにより、延暦寺から比叡山の通行許可を得られた光秀ら斎藤利三隊三百は、無事に洛北に辿り着いていた。

前情報では、義栄は近衛前久の別邸がある慈照寺に居を置いていたという話だった。しかし、延暦寺には幕臣・京極長門守高吉が逃げ込んでおり、高吉は義栄が相国寺にいると報せてきた。この事は比叡山を抜けて義栄襲撃を狙う光秀にとつては好都合だった。何せ相国寺は慈照寺に比べ、いま光秀たちがいる時点より遙かに近い。

「相国寺の兵は？」

「凡そ八百。如何します？」

「やる。こちらの倍以上とはいへ、將軍を守る兵じや。万全を期して退避しなくてはならぬはずだ」

こちらが寡兵とはいへ、義栄自身は自らを守る八百をけして多いとは思っていないはずだ。むしろ八百しか残していかなかつたことを

不満に思つてゐるはず。そこへ敵勢が襲いかかれば、どうなるか。

「よいか。無理はせぬ、義栄を相国寺から追いやえすればよい」

「將軍を討つ必要はないと?」

「我らがここにあるのは義栄を討つためではない。中入りで勢多の敵勢の動搖を誘つことが目的じゃ。そういう意味では、我らが洛中に現れたというだけで目的は達しておる。その上、義栄を追えれば上々。それ以上を望むべきではない」

「なるほど…、そういうものですか」

欲のないことだ、と思う利二だつた。自分なら迷わず“將軍・義栄の首”という大手柄を取りに行つただろつ。しかし、明智光秀という男はそうではないらしい。あくまでも目的を重視し、そのために何が必要かを探り、実行する。正直、ここまで整然とした男は戦国の世では珍しい。

「よし、参るぞ」

光秀らは若狭街道に出た。高野川沿いに南下して大原口より洛中へ入れば、相国寺はすぐである。隠れながら行くよりも、見つかる覚悟で進んだ方が早いと考え、堂々と街道を進むことにした。

よつてその存在は、すぐに義栄のいる相国寺に知られることになつた。

「ぐ…軍勢じやとー?何処の軍勢じや。日向守(三好長逸)か?弾正(松永久秀)か?」

“謎の軍勢迫る”の急報を受けた義栄は、悲鳴を挙げるかの如く報せを寄越した者を問い合わせした。

「味方では」「やこませぬ。敵です！」

「へ…や…？」

義栄は状況がまったく把握できていなかつた。そもそも現時点では戦が始まつたといつ報せすら届いていない。なのに、洛中に敵勢が現れている。

「ともかく逃げるぞ！元々余は」のよつなどこに居たくはなかつたのじや」「

「お…お待ちを！敵の数はそつ多くはあります。ここで防戦を…」「そんなこと分からぬではないか。後続があるやも知れぬ。いや、きつとそつじや。洛中に攻め入る以上、小勢であるはずはない」

として、義栄は相手を確認することなく一目散に相国寺を逃げ出した。久秀から將軍を京に留めておくように命令された者たちも、これを追いかけるのが精一杯であった。

相国寺に到着した光秀は、ある意味で呆然とした。義栄が戦うことなく逃げ出していたからだ。

「これで征夷大將軍とは恐れ入る。我らが上様とは大違ひじや」

光秀の洛中入りは成功した。京は早くも義輝方の手に落ちたのだ。

急報は、勢多へ飛んだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

十一月十四日。

近江国・勢多

「突っ込め——！」

馬上で上杉勢の先鋒・柿崎景家が号令を出す。足軽が長柄をかざして敵に突進する。一方で三好勢もこれに鉄砲で反撃、柿崎勢はばたばたと倒れる。しかし、景家は怯まない。

「ふん！ 同じ手しか使えぬ能なしめ」

既に唐橋は上杉勢が占拠しており、ここから味方が続々と渡っている。狭い橋の上で一塊になっているところを狙われるのとは違ひ、被害はそう多くはない。三好方とて七千を数える上杉勢全てに備えるだけの鉄砲を有しているわけではないのだ。

「蹴散らしてくれる」

景家は唐橋での鬱憤を晴らすかの如く、自らも敵陣へ斬り込んで行つた。

その様子は、主君たる上杉輝虎の許へも届けられる。

「景家め。弥太郎のことがよほど効いたと見える」

「そのようですね。この分だと敵の先陣を崩すのは時間の問題かと」「そうかな？」

輝虎の許には敵勢の様子も伝わってきている。三好政康と池田勝正が前線にて兵を叱咤して、柿崎勢の猛攻を防いでいるという。大将自ら戦陣に加わるとなると、部隊はかなり強くなる。特に政康は三

好三人衆の一人であり、敵首脳である。それが最前線に出てきていることを考えれば、容易に突破は出来ないと見るべきだろ？

「ならば斎藤か甘粕の部隊に出撃を命じますか？」

「いや、儂が出よう」

「実城様自ら…？」

輝虎と共に本陣に詰めていた本庄実乃是、心の中で深い溜息をついた。また主君の悪い癖が出たと思っているのだ。

輝虎は総大将であるにも関わらず戦になると自ら出撃したくなる性分で有り、関東管領となつた後もそれは変わらなかつた。第四次川中島合戦では総大将自らが敵本陣に斬り込み、総大将同士が刃を交えるという前代未聞の珍事に発展した。

実乃が不服そうな面持ちで主君を見る。

「実乃、そう嫌そうな顔をするな。そなたの言いたいことは分かる。されどな、此度の戦は儂が総大将ではない。総大将は上様である。ならば儂は上様の一兵卒となり、敵を討つのみ」

「総大将ではないという理屈は分かりますが、一兵卒と一軍を率いる将は違う申す！」

所詮、輝虎の言は前に出たいだけの屁理屈と思つてゐる実乃是、諫言して思い留まらせようとする。しかし、今日の輝虎は信頼する側近の言葉すら聞く耳はなかつた。

「儂が越後より参つたはこの時そのため。上様の兵となり、上様の馬前で槍を振るう。この瞬間を、儂は夢見てきたのだ」

「御実城様…」

「実乃、分かつてくれるな」

「……仕方ありませぬな。ならば、手前も御供をせて下され」

「おつーならばどちらが多く敵の首級を擧げるか競争しようが」

側近の同意を得た輝虎は、まるで少年のように瞳を輝かせた。

「やれやれ、こんな年寄り相手に何を言ひ出すかと思えば……」

「ならば儂の不戦勝、じゃな」

「なんのー！ まだまだ若い者には負けませぬぞー！」

かくして上杉全軍の出撃が決まった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

一方で田上では浅井勢が蒲生勢を支援し、優位に戦闘を進めていた。

「それ！ 一気に叩きのめせー！」

浅井勢が高山勢を追討する。蒲生勢相手に粘っていた高山友照も浅井勢の猛攻に堪えきれず、散り散りになつて後退していく。一方で大戸川の東から回り込んでいる磯野貞昌も奥田忠高を後退させてい

る。

「次はあれなる部隊じゃー！」

長政が標的としたのは久秀が次鋒として繰り出した竹内秀勝の部隊だった。長政はこれに取り付くと自ら槍を取つて戦線に加わった。その大きな体躯から繰り出される一撃は並の兵では防ぎきることが出来ず、何人もの松永兵があの世へ旅立つた。

「退けッ！退けえ！！」

すかさず竹内勢も後退を命じる。浅井勢の連戦連勝であり、後詰めの西美濃勢に出る幕はなかつた。しかし、大戸川一帯を制した長政が見たのは堂山、笛間ヶ岳を要害とした松永久秀の陣城であつた。

「むう…上杉殿が言つておられたのはこのことか……」

長政は軍議で輝虎がしきりに開戦に慎重であったことを思い出した。全軍に停止を命じ、不用意に陣城へ攻めかからぬよう厳命する。

「如何します？」

長政と共に兵を進めてきた蒲生定秀が訊く。今や定秀は長政の人柄に信頼を置いており、敵同士である感覚を忘れつつあつた。

「松永勢は八千と聞く。ならば不用意に攻めかかる訳には参らぬ。西美濃衆を呼び寄せてから一当てしてみても遅くはありますまい。後は、相手の出方次第にて」

「ふむ。それは確かに……」

定秀は改めて長政が若く血気に逸るだけの将ではないことを知つた。己が主君が負けるのも頷けるというもの。何せ定秀の主君は己を大人物とし、他を侮る性格の持ち主だつた。だから相手を見抜けず、思わぬ落とし穴に落ちることが多い。先の御家騷動など、その良い例だ。

今から一年前、六角家中で御家騷動があつた。きっかけは、当主・義治が宿老・後藤賢豊を觀音寺城内で暗殺したことだ。六角家は上

方で三好長慶に破れ、支配下にあつた浅井家にも独立されて当主の権威が低下していた。そこで義治は当主の権限を回復するべく重臣の一人を“無礼討ち”と称して断じたのだ。これが義治の父・承偵の指図であつたことは言つまでもない。

ただ賢豊は家中からの人望に篤く、それを信じる者は皆無だつた。それ故に六角承偵と義治は一時的に居城を追われた。これを取りなし、復帰させたのは他ならぬ定秀である。

正直、莫迦なことをしたものだ、と定秀は思つてゐる。何をしたとこりで、当主たるものに刃向かえる訳がないと主君は考へてゐるのだ。騒動を経た今も、主君が考えを変えた様子はない。

ただ定秀は、その主君が今まさに動じつとしているなど夢にも思つていなかつた。

同日。

近江国・永原城

勢多で合戦が始まつた頃、義輝からの出陣要請を断つた六角承偵は永原城にいた。永原城は六角氏の居城・觀音寺城から東山道沿いに四里（16?）ほど離れたところにあり、承偵は義輝がこの地を通過したという報せを受け、密かに城へ移つていた。

勢多で合戦が始まつたことは、狼煙によつて知つてゐる。

「そろそろ、頃合いじやのう」

「されど父上、公方様を本当に裏切るおつもりで？」
「義治、まだそんなことを言つておるのか」

承偵は我が子を諭すよろに話す。

「よいか、我が六角家は將軍家の忠臣じや。我が父、そなたの祖父は將軍様を御扶けし、管領代まで務めた。儂とてそれは同じ。お主の代になつたところで、それは変わらぬ」

「そこがわかりませぬ。我らは長らく義輝公を御扶けして参りました。されど父上がなむりうとしておることは、その逆ではありますぬか」

「逆ではない。いま申したであらう。我が六角家は“將軍家”的忠臣じやと。ならば、此度の戦でも我らは將軍様を御扶けせねばならぬ。將軍・足利義栄様をな。それが、我らが家の大義じや」

承偵は以前から松永久秀と通じていた。永禄の変では義輝の逃亡先を伝え、今回の上洛戦では義輝方の情報を流した。

「我が領内に入ってきた不埒者どもらを成敗せねば、近江守護の面目も失う」

永原城には凡そ六千の兵が屯している。義輝にも宿老の定秀にもばれずに集められる限界の数だつた。これが義輝の後方から襲うことになつてゐる。義輝は承偵を味方と信じて疑つておらず、東側をまつたく警戒していない。これだけの数でも戦の決定打となるは疑いなかつた。そのため、三好・松永らは殻に閉じこもるかの如く、守勢に徹している。

「しかし、義輝様の軍勢には蒲生を遣わしておりますが……」
「口煩い左兵衛大夫（定秀）など知つたことか。それよりもな、義

治。此度の合戦には憎き浅井も加わつておることを忘れるでない。つまり戦に勝利した暁には、近江全土が我が物となるのじや。京より東は、好きにしてよいと義栄公からも言われておる。加えて主従の分を越えて意見していく左兵衛大夫もいなくなり、將軍様への忠義も示せる。まさに「一石二鳥、いや三鳥か」

承偵はほくそ笑み、ひとり悦に浸つていた。自分自身でこれ以上はない完璧な策略を張り巡らしたと考えている。

「義治よ。本物の軍略が如何なるものか、よつ見ておくれのじや」

呆気にとられる義治を余所に、承偵が出陣の命を下す。直後、六角軍六千が永原城を出て東山道を西へ進んだ。義輝の背後を襲うために。

義輝が三好・松永と死闘を繰り広げて、勢多まで、僅か一刻半（3時間）で辿り着ける距離だった。

【
続く】

第八幕 亂世の大義 - 面従腹背の徒、出陣す - (後書き)

合戦中編です。

ということは次で終わりなのですが、なんとか目標としていた上洛
編は今年中に書き終えそうです。もうあと4～5回ほどでしょうか
…まあギリギリですね。

第九幕 織田軍襲来 -奸計、水泡に帰す-

十一月十四日。

近江国・野洲

近江の守護・六角承偵は義輝の背後を襲うべく、東山道を西へ進んでいた。

「儂が近江を制する日も近いのう」

承偵は戦場が近づくに連れて気持ちが高ぶりを抑えきれなくなっている。それほどまでに、己の策略を、勝利を確信していた。しかし観音寺城からの早馬が到着すると、それが束の間の夢であったことを思い知らされた。

使者は主に急報を伝える。

「申し上げます！観音寺城に織田勢が迫っております！」

「何じやとー？」

承偵は絶句した。自分が得た情報では、確か織田勢は既に義輝勢に加わっているはずだ。しかし、事実は半分当たっているが、半分は違っている。義輝勢に加わった織田勢は、西美濃衆五千のみ。

義輝は事前に織田勢が参戦するという報せを承偵に送っていたが、織田勢が三万五千もの大軍で加わることは上洛の途上で知ったことであり、これは承偵に報せていない。また蒲生勢も勢多で義輝と合流した際に報されたことであり、その事を主君へは報せていなかつた。

故に承偵は、佐和山で合流した五千を織田信長の軍勢と誤認していたのだ。

「織田勢は何処じゃ？」

「既に犬上川を越えています」

「数は？」

「凡そ三万！」

「莫迦な！？何故にそこまで気付かなんだ！」

承偵は使者を罵った。しかし、所詮は己の失敗だ。義輝が承偵の裏切りを予期せず東に注意を向けていなかつたと同じく、承偵も東から敵が迫つてくるなどまったく考えていなかつた。

「そ……そつじや。儂は義輝公の味方ではないか。何を焦る必要がある」

ここで承偵は未だ公然と義輝に反旗を翻しているわけではないことに気付いた。故に織田勢が觀音寺城を襲うことはない、そう断じた。
(だがこんなところに屯しておつては怪しまれる。問題は織田勢より早く帰城できるかだ)

自分が出陣しないことは周知の事実となつていて。それなのに軍勢と共に出陣していれば怪しまれる。裏切りの嫌疑を掛けられてもおかしくない。

犬上川と野洲は觀音寺城から丁度同じくらいの距離だ。ただ織田勢が犬上川を越えた時点で早馬が觀音寺城に飛び、そこから自分の許へ報せを送つているとなれば、既に織田勢は犬上川にいないとと思わ

れる。自分が不利である。

「急いで戻るのじゃ！」

承偵は全軍に反転を命じた。

＝＝＝

その頃、既に織田勢は観音寺城にはいよいよです。

「どうやら六角承偵は観音寺城にはいよいよです」
「ならば承偵めの裏切りは確実か」

信長は先頭を行く柴田勝家から報告を聞いていた。

「如何します？」

「裏切りが確実ならば、観音寺城は落とさねばならぬ」

「はつ。幸いにも敵は小勢、主力は和田山城に籠もつてている様です」

観音寺城の周辺には出城がいくつもある。その一角が愛知川沿いにある和田山城だ。東山道にも寄り、東から迫る敵に備えた造りになつていてる。

「箕作山城を攻める」

信長は敵主力の籠もある和田山城を無視し、観音寺城の支城である箕作山城を攻めるべく軍を動かした。一方で自身は和田山城の敵勢の動きを封じるべく、本隊を率いてその抑えとなつた。

織田軍三万だからこそ出来うる戦法である。

先陣を切るのは木下秀吉隊一三〇〇である。対する箕作山城には僅か五〇〇しか籠もつていない。その多くを承偵が引き連れて行つてしまつたためだ。本来であれば和田山城に配した主力一〇〇〇が防衛に当たるはずであったが、一万五〇〇もの織田軍に包囲されてしまつたく身動きが取れない状態に陥つてゐる。

箕作山城内は戦々恐々としていたが、それでも守将・吉田出雲守は果敢に兵を叱咤して防戦に努めた。その甲斐あつてか一度は木下勢に逆落としを仕掛けて追い払うことが出来たものの、東口から丹羽長秀の部隊三〇〇〇が攻め上ると兵力の差を埋めきれなかつた。備えは、徐々に崩れていつた。

「ひつなつたら観音寺城に籠もつて殿の来援を待つしかあるまい」

吉田出雲は承偵が戻つてくるのを待つしかなかつた。箕作山城を捨て、観音寺城へ移る。しかし、兵どもはその移動の最中に逃散し、吉田出雲と共に観音寺城へ入つた者は僅か二十名という有様だつた。皆、雲霞の如き押し寄せる織田勢に、勝利する光景など一片の想像も出来なかつたのだ。

瞬く間に箕作山城が落ちたことを知つた和田山城の兵は、戦意を喪失してしまい、戦わずして逃亡してしまつた。こうなると、観音寺城の自落も目前である。

そこに六角承偵率いる軍勢が戻つてきた。観音寺城内は、落城寸前での援軍到来に湧き立つた。

「今さら戻つてきたところで無駄よ」

信長が余裕の表情で号令を下す。

既に織田軍は六角承偵が戻つてくることを想定し、奪つた箕作山城を拠点に迎撃の準備を整えていた。一方の六角勢は強行軍であり、陣列は長く伸びきっている。先頭の者から織田軍との交戦し始めており、早くも撃退されて始めている。

「それ！蹴散らしてしまえ！」

対六角承偵軍へは柴田勝家が指揮している。その軍勢の動きは苛烈であり、敵の先鋒を潰すと怒濤の勢いで承偵の首を田掛けて突進を開始した。

「これはいかん！」

その様子に悲鳴を挙げたのは他ならぬ六角承偵自身だ。大将がこの様子ではもはや六角勢に勝ち目はなかつた。撤退すらままならない。隊列は乱れに乱れ、為す術もなく織田勢の餌食になつてゐる。兵たちの断末魔の叫びが、辺り一帯に響いてゐる。

「甲賀へ逃げるぞ！」

もはや裏切りが露見した承偵としては、このまま南近江に止まることは不可能だつた。目の前の織田勢が加われば、三好・松永に勝ち目がないのは火を見るより明らかだ。もし少数で南近江に留まれば、大軍に囲まれて討ち死にが確定だらう。ここは古来の例に従い、甲賀に落ちるしかなかつた。

承偵の祖父・高頼は、応仁の乱の混乱期に何度も觀音寺城を追われ

たことがあった。その都度、高頬は甲賀に逃げて再起を図った。その再起が首尾良く行つたことにより、六角家は今も南近江の主であったのだ。故に承偵の高頬に倣い、甲賀へ逃亡した。

しかし、承偵の狙いとは裏腹に觀音寺城を制した織田軍へ、六角方の諸城は降伏を申し出ってきた。

十一月十四日。田が落ちる寸前のことである。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

その日の夜。勢多での合戦は一段落が着いていた。

上杉輝虎の出撃で唐橋一帯での戦闘は決着を見た。周辺は義輝方の陣地が築かれ、三好方は膳所と伽羅山に籠もっている。松永久秀は依然として田上の陣城で浅井勢の猛攻を跳ね返していた。合戦は膠着状態に陥り、日が暮れたことにより明日へ持ち越された。

そこへ織田信長より六角承偵の裏切りと觀音寺城の占拠が報せられた。

「むう……承偵が余を裏切るとは……」

如何に承偵を軽視していたとはいえ、長年の味方であつた者の裏切りには義輝も落胆の色を隠しきれなかつた。

「上様、そう気落ちなさいますな。我らは勝つてゐるのですぞ」

そんな義輝を気遣い、輝虎が励ます。事実、六角軍の消滅により三

好・松永の勝利の日はなくなつたと言つて言いだらう。信長も、明日には合流できると報せてきてい。

「明智殿も上手くやつてくれたようです。敵も今頃は動搖しております」

明智光秀が相国寺の足利義栄を洛中より追い払つたことも先ほど云つてゐる。もちろんこれも敵方は承知しているはずで、今頃は徹底抗戦か撤退かで議論がなされているところだらう。

「ともかく上総介の到着を待つか

信長が明日にも合流できるのならば、織田軍を加えて戦を再開させた方が得策と義輝は考えた。これに輝虎が異を唱えてくる。

「夜襲を仕掛ける好機にござる。義栄の洛中退去に六角軍の敗北、敵の動搖は計り知れませぬ。あと一押しすれば勝てます」

「上杉殿。敵の守りは堅い、三好の陣城を侮るなど申したはそなたではないか」

開戦前と違つて積極策を唱える輝虎に義景は苛立ちを覚えていた。加えて信長の活躍に腸は煮えくりかえつてゐる。要はふて腐れていふのだ。

「如何にも。故に攻めるは膳所の三好本陣のみ」

開戦前と違い、勢多の唐橋を占拠した義輝方は三好本陣を直接攻めるという新たな選択肢を得ていた。輝虎はこれを攻め、一気に勝利を掴もうと考えていた。

敵本陣さえ落とせば、如何に防備が堅くとも敵はいつまでも陣城に籠もつてはいられなくなる。

「よう申した！夜襲を許可する。輝虎、頼むぞ」

「御任せあれ。この輝虎が上様に勝利を献上いたしましょうぞ！」

自陣に戻った輝虎は篝火かがりびを煌々と焚き、こちらが敵の夜襲に備えているかのように見せかける一方で手勢八〇〇を率い、音羽山の麓沿いに三好義継が本陣を構える膳所・茶臼山へ迫った。夜道であつたが、こちらには一帯の地理を知り尽くしている山岡景がいる。三好勢に気付かれず、簡単に本陣の傍まで迫ることが出来た。

「流石に敵も警戒しておりますな」

もつ口が暮れて随分と経つが、かなりの数の見張り番が確認できた。ただ動きは鈍そうだった。多くがその場で周囲を警戒しているだけで、歩き回つて敵の姿を探そうというものは皆無だ。恐らく凶報続きで士気が下がっているのだろう。

「どうします？仕掛けますか」

「いや、ここで夜明けを待つ」

「何故に？」

「夜明けが近づけば、敵は夜襲はないと見て警戒は散漫となる。それに敵勢の混乱ぶりが伽羅山からも見えるであらう」

そうなれば、伽羅山の軍勢は本陣を助けるべく飛び出してくるかもしれない。そこを叩くのは造作もないこと。既に留守を任せた本庄実乃にはその事を伝えてある。

輝虎らはそのまま夜明けを待つことにした。

そして夜が明ける頃、輝虎が大音声で命令を発した。

「突撃じゃああ……！」

「おおづ……！」

輝虎の号令により、兵たちは競つて敵陣へ斬り込んでいく。この頃には三好兵の殆どは無警戒に陥つており、多数が何の抵抗も出来ぬまま討たれていく。

その中でも、やはり輝虎の姿は目立つた。

「三好義継は何処じや！ 儂が上様に成り代わり、討ち取つてくれるわ！」

輝虎は逃げ散る兵卒を無視し、敵大将の姿を探した。しかし、まだ夜が明けたばかりであり、こう人が多くては見つけ出すことは困難だつた。仕方なく輝虎は雑兵の相手をすることになった。

「義継様を御助けせよ……」

本陣が襲われている様子は、三好政康のいる伽羅山からも確認できた。すぐさま手勢に出撃を命じるが、眼前の上杉勢に阻まれて上手く行かない。

そうしている内に、三好本陣が崩れ去るのが見えた。

「これまでじゃ！ 撤退する！」

政康は部隊に撤退命令を出した。主君の生死は確認できないが、こ

ここで踏み止まつても意味はない。これを機に、三好全軍が撤退に移つた。

勢多合戦が終わった瞬間である。

「」でようやく朝倉軍も動いた。もはや勝ちが見えている戦だが、「」まで何もしていなることに気が付いたのだ。

（「のままでは儂の立場がない）

その焦りが朝倉全軍を突き動かした。部隊は雪崩を打つて出撃し、八方に逃げる三好兵を散々に追い回した。

一方で田上でも決着が訪れていた。

松永久通の麾下にあつた柳生宗嚴が義輝方へ寝返り、陣城の内から迫る浅井勢に呼応したのだ。こうなると城は脆い。陣城の一郭が崩され、久秀は関津峠より大和へ撤退していった。浅井勢はこれを追つたが、久秀は所々に伏兵を配してこれを撃退、長政は深追いを避け、勢多へ帰陣した。

「上様、勝ちましたな」

「うむ」

義輝が大きく頷いた。待ちに待つた勝利の瞬間である。三好・松永に勝利するこの時を、どれだけ夢見てきたことか。まさに感無量であつた。

「勝ち闇を、挙げられませ」

義輝は藤長の勧めに応じて騎馬し、左手に扇を構えた。それから一呼吸を置いて大きく息を吐く。

「えい！えい！」

「おおつ――――――！」

鬨の声が、勢多中に鳴り響いた。

【続く】

第九幕 織田軍襲来 -奸計、水泡に帰す-（後書き）

合戦後編です。

勢多一帯だけではなく観音寺城や京と様々に場面が変わりましたが、ともかく書き終えました。いや、表現の難しさを知りましたね。

さて、次回。いよいよ上洛です。

第十幕 帰洛 - 関白の贈りもの -

十一月十五日。

近江国・三井寺

日がもっとも高くなつた頃、義輝勢は三好・松永勢への追撃を終えて三井寺に入った。ここで織田信長の到着を待つと共に京の様子を窺うつもりだつた。

そして勢多川を万余の軍勢が渡つてくる。織田勢だ。

「上総介！よつ參つた」

義輝は開口一番、信長の労を労つた。

「はつ。勢多での戦勝、おめでとうございます」

「そなたが承偵めを討つてくれたからよ。もし承偵に背後を襲われていたら、勝敗がどうなつていたかわからぬ」

端から見ると義輝方が勝つべくして勝つたように思えるが、実際は一つ間違えば義輝の命すらなかつた可能性があつたほど切迫した戦だつた。仮に承偵が居城さえ捨てる覚悟をすれば、義輝を駆逐した後に三好・松永勢と合流して織田軍と決戦する方法もあつた。しかし、そこは器量の問題。承偵は拠るところを失いたくなかった結果、それを失う羽目になつた。

「して、承偵めの裏切りを如何にして知つた？」

義輝の疑問はそこだつた。義輝ら誰もが知り得なかつた承偵の裏切

りをなぜ信長は知ることが出来たのか。

「実のところ確証はございませんでした。ただ三好方と昵懇の商人が頻繁に出入りしていたものですから、軍勢を一つに分けて警戒していただけのこと」

「ふむ、左様か」

承偵は細心の注意を払い、商人を通じて三好に内通していた。ただ信長にしてみれば、これまで義輝の支援を続けていた六角承偵の鈍さが目立つた。もし義輝が六角抜きで上洛してしまえば、その後に孤立してしまうことは目に見えている。それなのに本来であれば主力となつて動いてもいいにも関わらず、義輝の上洛に関わろうとしない。故に警戒していたのだ。既に義輝勢は三万を越えていたので、全軍を送る必要がなかつたのが幸いした。

「それよりも上様。こちらが松平家康殿にござります」

「松平家康にござります。織田殿のお誘いを受け、遙々三河からやつて参りました」

信長の脇に控える武者が名乗る。自分や信長より一回り近く若く見える。今のところ戦での活躍は耳にしていないが、家康は東海三力国を領する今川家から独立し、三河一国を切り取つた傑物である。かつて名将と謳われた松平清康は三河一国を制した。ならばその孫である家康も、同等の才覚を持つていると判断していいだろ。

また頼もしい味方が一人増えた。

「よう参つた。上総介共々、頼りにしておる」
「ははつ」

その後、簡単な自己紹介と共に顔合わせを済ませる頃には洛中にいる明智光秀から京の様子が詳細に伝わってきた。

まず三好義継と長逸、政康らは洛中に留まらず、摂津まで撤退していった。おそらくは長逸の居城・芥川山城へ逃亡したものと思われる。また坂本で武田勢を抑えていた岩成友通は途中まで義継勢と共に行動していたが、京の南西部、桂川沿いに位置する勝竜寺城と淀古城に兵を分けて入っているという。その数はけして多くない。ただ敵の御輿である足利義栄は、何処まで逃亡したかは掴めていなかつた。芥川山か、父・義維のいる堺か、はたまた阿波まで逃げ帰つたか。

一方で大和へ撤退した松永久秀の動向もまだ報せは入っていなかつた。

「ともかく京には入れるな」

義輝は明日の上洛を決めた。三好勢が洛中にいないのなら、入洛を躊躇する必要はない。義輝が懸念していたのは、三好勢が洛中に留まることで京が戦場になることだけだった。京を戦場にしてしまえば悪評が立ち、その後の政にも影響が出てくる。

「上様。今後のことを考えますれば、勝竜寺城は落としておくべきかと」

「ふむ。確かにな…」

信長が進言してくる。勝竜寺城は摂津との国境を抑える点で重要である。三好の主力が摂津へ退いた以上、この地を確保して京の治安を取り戻す必要がある。

「ならば上総介、もう一働きしてくれるか？」

「上様の御命令ならば。それど……」

「まだ何があるか？」

「勝竜寺城を落としたところで、三好を滅ぼしたとは言えませぬ。畿内から三好方の勢力を一掃すべく摂河泉へ攻め入り、三好方の者共を悉く討ち平らげるべきでござる」

「おおっ」

信長の言に、義輝は心が震えた。確かに、信長の言つ通りである。いま麾下には七万の兵がいるが、これは全て義輝の兵ではない。いつかは帰国し、いなくなる兵だ。その前に三好の勢力を畿内から駆逐できれば、義輝の政権は盤石となるのは明白である。やこれまで自分のことを考えてくれるのか。

「宜しければ、この信長が松平殿と共に摂河泉へ討ち入って参りましょっ」

無論、義輝にこれを許さない理由はない。そして、この信長の言葉に触発された男がいた。

「ならば儂は大和じや！ 松永久秀の首を上様に献上いたす！」

上杉輝虎、もつとも義輝の復権を望んで止まない男である。

（頼もしい者たちじや。やはつこの一人に頼んで間違いはなかつた（わ）

義輝は半年前の絶望から立ち直るきっかけとなつた二人に心中で感謝した。そしてそれを信じた自分が正しかつたことに安堵した。

「京で待つておる」

翌日、軍勢は三手に分かれて進んだ。一手は上杉と北陸勢の一万二千、宇治街道を南下して木津川沿いに奈良街道を下つて行く。その先には松永久秀の居城・多聞山城がある。大和の筒井と連携し、これを攻めて久秀の首を擧げるつもりだ。

次には織田・松平勢三万五千は、宇治街道を進んで伏見、下鳥羽を経由して勝竜寺城へ向かつ。勝竜寺城の陥落後、そのまま摂津へ攻めに入る。

最後に義輝の本隊二万三千が渋谷越で京へ入る。半年前に義輝が落ち延びた道だ。

そして十六日の夕刻、義輝は再び京の地を踏んだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

十一月十七日。

洛中・旧三好長慶邸

義輝は一先ず三好長慶が使っていた屋敷に居を構えることにした。ここは上京の中心にあり、かつて義輝の屋敷があつた一條の北側に位置する。なぜこの場所を選んだかといふと、今後に京の政務を行う上で必要な設備が一通り揃っているからだ。流石は天下人だつた者の邸宅と言える。

その義輝の帰洛を祝うべく、公家や洛中に寺院のある門跡たち、商人、町人などが引っ越し無しに押し寄せてきていた。

義輝も帰洛が叶い、上機嫌であった。来訪者の謁見を断ることなく受け続けた。ただ例外を除いて。

「余を裏切つた者共が、どの面下げて参つたというのか」

公家の来訪だけが全て拒絶された。義輝は將軍であつただけに、公家の性質を知り抜いている。三好・松永らがばらまいた金銭に目を奪われ、これまで掛けてやつた恩を忘れ、將軍職を売り飛ばしたことなど端から見抜いている。故に公家とは会つ氣になれなかつた。

「上様。近衛前久様がお出でになつております」

「関白様が…か」

途中から公家の来訪すら報せなくなつていた藤孝が、近衛前久の来訪だけは報せた。公家を追い返していると聞き及んだ前久が、旧知の藤孝を頼つてきたのだ。義輝も流石に関白の地位にある者を追い返すわけには行かず、すぐに通すように藤孝へ告げる。

「久しぶりじゃな、義輝殿」

「…関白様も、お変わりなく」

二人の間に冷たい空気が流れていった。如何に関白と言えど、前久は義兄である。故に裏切られたという気持ちが人一倍強い。関白とう立場であれば、義栄の將軍宣下を止められたのではないかと思つて止まなかつた。

「…すまぬ、義輝殿」

前久が沈痛な面持ちで頭を下げ、謝罪の言葉を口にする。関白が謝

るなど、異例のことである。だがそれが、將軍職に関連することだ
といふことに義輝はすぐに気付いた。

「義輝殿が生きておること、知つてはいたが、義栄への將軍宣下を
止めることできなんだ」

「よいのです。余の力が不足していただけのこと、関白様に非はござ
ざりぬ」

素直に己の非を認める前久へ対し、義輝も素直な気持ちで相対した。
ここで意固地になつて前久を罵倒すれば、己の沽券に関わると思つ
た。

「義輝殿、よう戻つて参られましたな」

「余に忠義を誓う者共が地方には多くおります。その者らの抜け
を借りたまでのこと」

「そう、自分はまだ何もやつていない。義輝はそう思つてゐる。それ
を為すのは、これからだと。」

「輝虎殿なら、そうであろうな」

前久は越後に下向してゐたことがあり、輝虎のことはよく知つてい
た。將軍家への忠義が人一倍篤いことも知つてゐる。

「義輝殿。麾からの祝い…といふべきではないが、返すものがある
「返す?」

將軍職か、と思つたが昨日今日帰洛したばかりで朝廷工作も何もや
つていない状態でそれはない、と思い直した。よつて前久が何を言
つてゐるのか、さっぱり分からなかつた。

前久が手を叩くと襖が静かに開く。その前には深く頭を垂れた女性の姿があった。

その女性を、義輝はよく知っている。

「まさか……」

義輝は思わず腰を浮かせた。それに合わせるかのよつこ、女性が面を上げる。

「上様……御無事の御帰還、祝着にござります」

「御台一……」

咄嗟に義輝は御台所に駆け寄り、その震える肩を優しく抱いた。抱かれた御台所は、身体を義輝へ預けて力なく崩れ、嗚咽する。

「上様……申し訳ございませぬ。母上様（慶寿院）や上様の御子を御守り出来ませんでした」

「よこ、よこのじや。それは全て余の所為じや。そなたは何も悪はない。それよりも……よう生きておつた」

一気に感情が込み上げてきた。恥ずかしながら義輝は涙すら流していた。まさか御台所が生きているなど思っていなかつた。次に会うのはあの世であり、どのように謝罪しても足りないとさえ考えていた。それが、今生で再び会つことが出来るとは。

上洛が叶つたのは嬉しいことだったが、これに勝る喜びはない、と義輝は思った。

（もはや一度と失つまいぞ。必ずや守り抜いてみせる！）

義輝はそう心で堅く誓つた。もつ身内が悲しい想いをするのはみたくない。

「義輝殿。將軍職の再任は麿が何としてもやり遂げる。それが、麿からの詫びじや」

前久はそれだけを言い残すと、一人を残して退出した。また藤孝は、その後に義輝への目通りを願い出ている者を全て帰したのであつた。

日は暮れた。

同日。

山城国・勝竜寺城

信長は柴田勝家、蜂屋頼隆、森可成、坂井政尚らに先陣を任せ、一気に城に襲いかかつた。

「あの様な小城、揉み潰してしまえ！」

織田軍三万が城を一斉に包囲し、同時に攻め寄せた。守る岩成友通も対岸に位置する淀古城から一隊を出撃させて城方を支援させるが、三万もの大軍が相手では焼け石に水でしかも、織田軍先鋒が飛び出してきた岩成兵を返り討ちにし、首級五十を挙げた。

もはやまともな戦力が残つていない岩成勢としては、三好本隊の援

軍を得るしか勝算はない。しかし、勢多で負けたばかりの本隊が駆けつけてくるなど思えず、問い合わせ暇もなかつた。残された道は、城を枕に討ち死にするか、再起を懸けて逃亡するしかなかつた。

「やむを得ぬ！ 芥川山まで退くぞ！」

友通は城を焼いて逃亡を図つた。だが簡単に逃がすほど織田軍は甘くはない。勝家が散々に若成勢を追い回し、兵たちは次々と討たれていく。友通は命からがら芥川山城に辿り着いた。

そこで友通は絶望した。芥川山城には数えるほどの兵しか残つていなかつたのだ。既に三好勢は芥川山を捨てて河内国・若江城に移つており、友通は捨て石にされたのだ。

愕然とした友通は、主君のいる若江城へは向かう気にはなれず、摂津・越水城へ入り、そのまま淡路から阿波へ渡つた。もう畿内に留まりたくなかったのだ。

そして織田軍は、それを追つよつに摂津国へ入つた。

十一月十九日のことである。

【
続く

第十幕 帰洛 - 関白の贈りもの - (後書き)

ようやく義輝が上洛しましたが、上洛編はもう少しだけ続きます。

追記

近衛前久の呼称を一部相国としていましたので訂正しました。（理由は相国は太政大臣の唐名であり、この時点で前久は太政大臣ではなかったからです）

いや、この時代の人間って後々のイメージが強すぎるので間違えてしました。

第十一幕 織内掃討戦 -天下人の落日-

十一月十九日。

摂津国・芥川山城

摂津に入った織田・松平連合軍三万五千は、まずこの城に襲いかかつた。

芥川山城は三好長慶が居城とした城として有名である。かつての天下人の城に相応しく摂津国内では一、二を争うほどの規模を誇る。三好山の切り立つた渓谷の上に造られ、三方を川に囲まれた天険の要害である。

「如何に堅固な城であれ、籠もる者があれではな」

芥川山城の主は三好長逸である。しかし、既に城主は城を捨てて逃亡していた。置いて行かれた兵は、自分たちを見捨てた主のために何が何でも城を守ろうという気はさらさらない。単に籠もっているのは、自衛に為に他ならない。

「一当てし、威勢を示せばすぐに降参して来るでしょう」

歴戦の雄・柴田勝家は城内の士気の低さを見抜いていた。これに信長も異存はない。信長は全軍に攻撃命令を出すと、高櫻の天神馬場で指揮を採つた。

予測通り、その日の内に芥川山城は陥落した。

摂津の要害、三好家の牙城が崩れたことは周辺に大きな影響を与えた

た。すぐに高槻城の入江春継が降伏を申し出でくる。次いで茨城城の茨木重朝も降伏した。

次に信長が狙いを付けたのは池田城である。

池田城の城主は池田勝正であり、勢多の戦で先陣を務めた猛者である。勝正は摂津国人の中では大身の部類に入り、摂津の経略に重点を置いていた三好家中でも重用されていた。この勝正と伊丹城主・伊丹親興を降してしまえば、摂津国内には三好方で大身の者は残つてしない。

「我らまだ負けておらぬ。何故に降らねばならぬのか」

だが勝正は頑として戦う姿勢を崩さなかつた。

前の勢多合戦で先陣を務めながらも損害は他に比べて軽微であった。これは上杉勢と正面切つて戦つていたからであろう。逃げ惑つていた他の者が敗走中に大きな損害を出したのに対し、一定の士気を保つて組織的に撤退した池田勢はまだ余力があった。加えて、城はまつたくの無傷であるから勝正には降伏の意思はなかつた。

ただそれでも、織田・松平連合軍との兵力差は圧倒的だった。

「このまま城に籠もつても援軍はありませぬぞ。伊丹城は降伏し、越水、原田の城も我らに降り申した」

「まだ主家よりの援軍がある」

「本氣でそのように考えておられるのか。三好は芥川山城を捨てたのですぞ。それは摂津を捨てたも同じ、守る気があるのなら芥川山に籠もつて戦つたはず」

それでも勝正は池田城で七日も粘つた。この間に周辺の諸城は相次いで降伏している。また連合軍も三度攻めたが、勝正は城の一郭を落とされながらも果敢に抵抗し、未だに高い士気を保っている。だが落城を回避できるほどではない。

そこで信長は池田恒興が使者として勝正の許へ送った。

恒興を大将にしたのには理由があった。恒興と勝正は遠縁ながら同族だからだ。縁を頼つて降伏してくる可能性に賭けたのだ。それほどまでに、信長は勝正を殺したくなかった。

「諦めなされ。御屋形様は池田の所領はそのまま、勝正殿が公方様に忠誠を誓われるのであれば、加増も致すと仰せじや
「加増じやとー!?

勝正は目を丸くして驚く。

所領の安堵こそは降る者に対して珍しいことではないが、加増など虫が良すぎる話だ。それには訳がある。信長としては大軍を目の前にして簡単に降る者と寡兵ながら最後まで戦おうとする者、味方になればどちらが役に立つかは明白であり、故に役に立つ者にこそ多くの禄を与えるべきと信長は考えていたからだ。

「是非もなし…か」

十一月二十八日。池田城は連合軍に降伏した。これにより摂津の大半を制した信長は南へ向かう。南には石山本願寺がある。

石山本願寺は浄土真宗に連なる一派で、天文元年（1532）に本山のあつた山科を法華宗徒の攻撃により失うと、この地に根拠地を

構えた。宗徒は百万を超えるとまで言われており、言に加賀国は本願寺一派が守護の富樫氏を追い出して支配している。

信長はこの石山本願寺に対し、義輝の名で矢銭（軍資金）を要求した。

「本山は義輝公の味方ではないか」

もちろん門主たる顯如はこれに反発した。本願寺は義輝と和睦した身であり、表向き義輝寄りである。ただ信長も“京都御所再建費用”という名目で矢銭を課しており、露骨に請求したわけではなかつた。故に顯如は義輝方七万もの大軍が相手なら穩便に済ませた方がいいと判断、信長の要求通りに五千貫を支払つた。

これにより摂津は平定された。

ここに信長は選択を迫られた。河内に進むか、和泉に進むかである。

「滅びたも同然の三好など放つておけ。それよりも堺じゃ

信長は南に軍を向けた。

泉州・堺は日の本においてもっとも商業が発展した都市であると言つていいだろう。政治的や文化的には京が勝るが、経済においては堺の右に出るところはない。鉄砲の産地もあり、南蛮貿易の拠点でもある堺を信長は是が非でも押さえたかった。

しかし、堺は大名の支配を受けない自治都市でありながら、三好家と繋がりが深い場所でもあった。新参の信長など軽く見られている。案の定、堺は三好の力を背景に徹底抗戦する構えを見せた。

「阿呆どもが。今さら三好など当てになるかい！」

一人だけ異を唱えた者がいた。会合衆の一人・今井宗久である。宗久は納屋を経営しており、堺ではもつとも財のある商人の一人である。宗久は既に三好には往年の力はないことを見抜いていた。時流を掴むことこそ、商人がもつとも得意とし、必要するところである。その力を宗久は持っていた。

「堺は公方様に逆らう気は一切ありまへん」「で、あるか」

宗久により、堺は纏められた。信長が要求した矢銭二万貫も納めた。こうなると信長も泉州での目的は達成されたも同然である。和泉に残る三好方の城など一切の興味を持たず、家臣の佐久間信盛に一万の兵を預けて泉州の制圧を命じると、自身は残りを率いて河内に向かつた。

河内には三好義継の居城・若江城がある。そこを落とせば、摂河泉から三好方の勢力は消え去る。天下人・三好長慶が拠り所としていた三力国は、一月もかからず失われようとしていた。

三好長慶が死んで、僅か一年と五ヶ月後のことである。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

一方で大和へ向かつた上杉輝虎は、多聞山城を包囲していた。多聞山城には久秀の子・久通が四千で籠もっていた。久通は義輝を襲つた実行犯であり、それを知った輝虎は問答無用とばかりに開城の使

者すら送らず城攻めの命令を下す。だが……

「何じゃ……この城は？」

輝虎の眼には、多聞山城は異様に写つた。

まず三方を空堀に囲まれ、南側は川が流れている。眼下には城下町が形成され、城の主郭と善勝寺山の間には大堀切り、善勝寺山にも曲輪が設けられている。そこまではいい。だが石垣が張り巡らされており、真っ白な漆喰の堀に屋根は総瓦葺き、土墨上には長屋形状の櫓が築かれている。そして何よりそびえ立つ四層の大櫓（後の天守）があり、その山頂に築かれた大櫓からはこちらの動きなど手に取るように分かるだろう。

逆賊・松永久秀の居城としては似つかわしくない城である。しかし仮に久秀を“天下人”と見るならば、この壯麗な城は何とも相応しい城郭となる。

（どうやって攻めていいか分からぬ）

それが輝虎の正直な感想だった。このような城は東国にはなく、上方においてもこれまでいくつかの城を見てきたが、東国にあるものと差して大きな違いはなかった。だが、この城は違う。事実、上杉勢は攻めあぐねた。

城攻めには概ね城方の三倍は必要とされている、多聞山城に籠もる兵が四千なので、上杉勢はきりきり三倍に届く数である。故に落とせなくもないのだが、上杉勢の中に上方出身の者はほんと皆無であり、皆が初めて見る多聞山城の異様さに圧倒され、思つもよに攻めきれなかつたのだ。

「様子を見るしかあるまい」

輝虎は全軍に攻撃停止を命令し、筒井藤政（後の順慶）の到着を待つことにした。南方の西方院山城に入り、遠巻きに城を包囲する。

筒井藤政は大和の戦国大名であり、大和国内で久秀に対抗しうる唯一の勢力である。長年に久秀と戦つていただけに、多聞山攻略に大きな力を發揮すると思われた。

一日後、筒井勢が一千を率いてやつてきた。大将は松倉重信、島清興であった。藤政は若年のために筒井城に残っていると言つ。

「あの城を攻めるよい手立てはないものか」

陪臣が相手だろうが、礼儀を重んじる輝虎は筒井家臣相手であつても下手に出て方策を訊いた。

「はつ。まずはこれをご覧下され

「これは？」

「多聞山城の縄張り図ござります」

「なんじやとー!？」

輝虎を始め、上杉の家臣たちは一斉に驚きの声を上げた。重信が広げて見せた多聞山城の縄張り図はかなり詳細なもので、城の全景が手に取るように分かつた。

「多聞山は、かつて筒井の城であつたか」

「も当然のようだ。輝虎はそう思つた。が、事実は違つた。

「いえ、五年ほど前に松永弾正が築いた城にござります」

「では何故にこのような絵図をお持ちか？筒井は手練れの忍びでも雇っているのか？」

「その様な者がおりますれば、大助かりにござります。されどこれは違います。松永弾正は多聞山の城を誰にでも見物させます。町人や宣教師なども例外ではござらぬ。これは当家の者が僧に扮して手に入れたものにて」

輝虎は啞然とした。何処の世界に己の居城を見せびらかす奴がいるだろうか。そんなことをすれば敵に攻められたときに困ることになつてしまつ。いま輝虎たちがしているようにだ。

「松永弾正は阿呆か」

と上杉家臣の誰かが言つた。しかし、それは違うと輝虎は思つた。逆にこれほどまでの剛胆さを持つ久秀を侮れないと思つた。己の懐を敢えて見せることにより、城攻めが難しいということを相手に知らしめ、戦意を失わせる。そういう意味では、多聞山城は謀略家・松永久秀らしい城と言えるだろう。実際、輝虎はこの縄張り図を見ても何処から攻めていいか分からなかつた。

「多聞山を無理に攻めれば損害が大きくなる一方にござります。援軍なき籠城戦に勝利はございません。故にまずは河内の三好との連絡を断ち、多聞山城を裸城にすべきです」

今度が清興が話す。河内には三好義継の若江城があり、大和の久秀がこれと連携するのは目に見えている。久秀は大和にもう一つの居城というべき信貴山城を築いており、それと多聞山城との間にいくつもの出城がある。これを軸に大和の支配を強化しているのだが、

この状況では一つの防衛戦と化していた。これを分断し、多聞山城を孤立させて自落させる。それが島清興の策であった。

「ならばここは実乃に任せる」

輝虎は包囲組に上杉勢一千に畠山など北陸勢五千を指名した。北陸勢などは損害を出ることを嫌っているために輝虎の指示に對して否応なしに応じる。

その後、輝虎は久秀のいるだろうと思われる信貴山へ向け、筒井勢の先導で出発した。その途上、多聞山と信貴山の間にある城は悉く落としていった。

こちらも摂津同様、滅亡寸前の三好・松永らに荷担する者共は少なく、上杉勢は無人の野を行くが如く信貴山へ迫ることが出来た。勢多合戦では松永方の先鋒を務めた高山友照も降伏してきた。

その所為か多聞山城が特別で他は大したことないのでは、という空気が上杉勢に漂い始めていた。しかし、信貴山城に着くとやはり松永久秀の恐ろしさを改めて知らされることになった。

信貴山城は山頂にこそ多聞山城で見た四層大櫓があるが、見る限り典型的な山城である。試しに城を攻めてみたが、城内にいくつもある土塁の裏から鉄砲で狙い撃ちされて攻めきれず、正面が無理ならばと西側の高安山側から攻めた。しかしこちらには山城には珍しい横堀があり、ここを拠点に鉄砲隊が待ち構えていた。

勢多合戦同様、上杉勢は城攻めにおいても鉄砲を使われたのは初めてであった。その上、防戦において鉄砲が如何なる力を發揮するかを思い知られた。

上杉勢はたちまち追い返され、戦いは持久戦の様相を呈してきた。

「さて…如何するか」

信貴山一帯の戦況だけみれば劣勢である。城方は四千にこちらは七千しかない。これでは城攻めが難航するのは目に見えている。だが大局では大和国内に残る松永方の城は信貴山と多聞山だけであり、隣国河内には織田勢が迫っているようだ。三好の本拠・若江城はここから一里（4？）ばかり北西にあるに過ぎないが、織田勢を警戒して援兵を出すような危険は犯さないだろう。

「織田様か上様に援兵を依頼するべきかと存じます」

家臣の何れかが揃つて進言していく。「こちらが攻め切れていないのは単に兵力不足だからだ。織田勢並の兵力があれば、大和一国などすぐに平定できると輝虎は考えていた。しかし、威勢良く大和侵攻を願い出た手前、易々と援兵を請うことは輝虎の矜持が許さなかつた。

策がないことはなかつた。城の規模では多聞山城の方が小さく、こちらを先に全力で落とした後に信貴山を攻めればいいのだ。ただ今回の黒幕・松永久秀を目の前にして一端とはいえ引き下がることに輝虎は躊躇した。

「さて…如何するか」

輝虎は、再び同じ言葉を吐いた。

十一月一日のことである。

【
続
く】

第十一幕 織内掃討戦 - 天下人の落日 - (後書き)

次話投稿です。

上洛編は残り一話と予定しています。さて、年内に間に合つか……

頑張ります。

第十一幕 幻の論功行賞 - 邪心に芽生えた凡将 -

十一月朔日。

京・日三好長慶邸

連日、届けられる戦勝の報せに義輝は上機嫌であった。特に摂津一国が既に平定されたことは、京に安寧が戻りつつあることを意味しており、洛中の活気は湧く一方である。

ここに至つて義輝が考えなければならないことがあった。

「諸大名に宛がう恩賞を如何にするか……」

既に戦は終わりかけている。それは義輝の帰洛のために集結した連合軍の解散を意味する。しかし彼らも義挙とはいえ恩賞は當てに働いているところもある。勢多の合戦においても所領を持たない義輝は軍忠状一通すら発することが出来ず、功を立てた者は義輝からではなく各大名より当座の褒美が与えられている。義輝としては、その大名たちに然るべき恩賞を武家の棟梁として授けなければならない

ただここで問題があつた。

義輝の周りには未だ幕臣の多くが戻つてきていない。論功行賞を行うに当たつても誰がどの様な戦功を挙げたかを纏める者がいないのだ。

「やはり左衛門督（朝倉義景）を頼るしかないか……」

概ね義輝の意向を反映させるつもりだが、論功行賞を纏めるに当たっては他家を頼るしか方法がなかつた。そしてそれを担うことの出来る大名家は、大名としての組織が完成されている朝倉家以外ない。

「式部少輔（一色藤長）、左衛門督を呼んでくれ」

「畏まりました」

そう言つて義輝は深い溜息を吐いた。必要なことはいえ、義景に頼むのは本意ではないのだ。義景は上洛して以降、義輝のところへまともに出仕しようとせず、都で有名なや歌人を呼んで歌会を催し、夜は猿樂を楽しんでいる。つまり遊び呆けているのだ。未だ輝虎や信長が戦に励んでいるというのに、義景は一人京の都を楽しんでいた。

これには義輝も呆れ果てている。だからこそ義景に頼る気にはならないのだ。

この義輝の判断が後に大事件に発展することになるだらうとは、義輝自身も気が付いていなかつた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

十一月十三日。

河内国・若江城

三好義継の本拠地を織田・松平連合軍二万五千が包囲して十日が経つた。未だ城方は頑強に抵抗する意思を崩していない。そこへ先んじて京に入っていた村井貞勝より急使がもたらされる。

「京で何かあつたか？」

「はつ。まずはこれをお読み下さー」

使者が一通の書状を手渡す。そこには此度の上洛戦における論功行賞の中身について記されていた。それを見た信長は激昂した。

「義景の痴れ者めがッ！！」

その様子に驚いたのが隣にいた松平家康である。

「織田殿！？如何なされた」

家康の問いかけに対し、信長は握りつぶした書状を乱暴に手渡した。見ろ、ということである。

「これは……！？」

家康は目を丸くして驚いた。信長が怒る理由も分かる。それほどまでにこの論功行賞は酷かった。

まず上杉輝虎が侍所所司に抜擢されている。当人は喜ぶかも知れないが、関東管領として在京できない立場にある輝虎としては名誉職であることは明白である。他人にとつては恩賞がないも同然である。しかも所領は一切宛がわれていない。

次に信長であるが、これがさらに酷い。尾張・美濃の一力国の守護、つまりは現状で信長が支配している領国だが、その領有権を認めているだけである。上洛戦で勝ち取った南近江は全て浅井家に宛がわることになつており、摂河泉の平定に対する恩賞はまったく考慮

されていない。

武田、松平、畠山などの大名も現状を追認しているだけである。では三好を倒して手に入れた所領をいつたい誰が治めるのか。

朝倉義景である。

ただ義景も露骨に摂河泉の守護にはなっていない。表向き、幕臣が守護である。しかし先の管領・細川信良の弟である晴之（細川晴元の次男）を次の管領とし、義景は管領代に就く。既に細川京兆家は没落しており、管領に就こうが実権は持たない。つまりは管領代である義景が全てを取り仕切ることになる。

かつて三好長慶が幕政を牛耳った手法とまったく同じである。

「何故にかよつなことになつた！」

何も事情を知らない信長が使者を問い合わせる。

「義輝公が此度の論功行賞の取り纏めを朝倉殿に命じたよつじがります」

「それで義景の阿呆が調子に乗つて管領代に就こうとしているのか」

「そのようにて……」

「己の身の丈がわかつておらぬのか！あの阿呆めッ……」

信長が吐き捨てるよつて言つた。使者もまるで自分が怒られているかの如く、信長の声に反して頭を地面に擦りつけた。信長も怒りで我を忘れかかっているようすで、田は血走っている。

「京へ入り、義景めを討つてくれるわ！」

ついには突拍子もないことを言い出した。義景が如何に考へているとはいへ、一応は味方である。それを討つといつのは余りにも拙い。

「お待ちあれ、織田殿」

そんな中、松平家康は冷静だった。

「朝倉殿が取り纏めを任されたとはいへ、これを上様が御認めになるとは思えませぬ」

僅かな期間ではあるが、家康は家康なりに義輝という人物を見ていた。將軍家に生を受けていることで野心に溢れる人物であるが、その本質は武人であり不公平を嫌い、忠功忠節を重んじる性格だ。今回戦で朝倉勢が殆ど戦つていないことは理解しているはずであり、主力である織田と上杉を差し置いて朝倉に大領を与えて重要なことはないと考えていい。

「ならばこれを上杉殿に報せるのがよいかと」「ん?」「

信長の怒りが一気に冷めていく。家康の言に興味を持ったのだ。家康は信長が落ち着いたのを見計らい、話を続ける。

「この事を上杉殿が知れば、先の織田殿の如く怒り狂いましょう」「で、あらうな」「義景を討つ、と言い出すかもしれませぬ」「あり得ん話ではない」「もし上杉と朝倉の間で一悶着あつたのなら、上様はさぞかしお困りになりますよう」

「そこを儂が仲裁する…と?」

「左様」

信長と家康が視線を交わし合つ。家康の策を理解し、その有用性を見抜いたからだ。そして家康も、信長が何を求めているかを察していた。

上洛戦での義輝方の主力は上杉と朝倉である。遅れて織田が参じてきた。その上杉と朝倉が争いを始めれば、止めることが出来るのは織田しかいなくなる。となれば、織田の立場は両者より自然と上になる。

「松平殿、礼を申す」

その後、上杉輝虎の陣へ向けて織田陣内より使者が遣わされた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

同日。

「京へ戻る!」

いきなり、上杉輝虎が高らかに宣言した。これに家臣たちは慌てた。まだ信貴山の松永久秀は健在だというのに、京へ戻るとは一体どういうことなのか。

「京で変事が起つた。どうやら左衛門督殿が三好に成り代わる氣らし」

「なんと…？」

これには上杉の家臣たちも筒井の家臣らの一斉に驚きの声を上げる。

「されど、その様なこと何故に分かるの？」
「誰もが思つよつたことを、島清興が輝虎に訊いてくる。

「先ほど織田殿が報せて参つた。論功行賞の取り纏めを任せられた左衛門督殿が我らを虐げ、「己が幕府を牛耳る氣りしい、とな」

「それで、織田殿は何と？」
「いや、それだけだが？」
「それだけ？」

清興は腕を組んで考え込んだ。普通、これだけの重大事を報せたならこの先の行動について何かしらの言及があつて然るべきである。

「解せませぬな。織田殿には何かしらの意図があるよつて感じられます」

「何の意図があるのじや。織田殿は我らと同じく上様のために骨を折り、汗を流されておる。京で遊興に耽つておる不忠者とは違うわ

輝虎は信長の行動に何の疑念も抱いていなかつた。

「杞憂じや。そなたは織田殿を知らぬからそつ思つのであらうが、織田殿はそのよつは人ではない

輝虎の行動の規範は“義”であり、誰もが“義”を尊ぶものだと考えているし、そうあつて欲しいという願いを強く持つてゐる。故に

輝虎から見た信長評は、『上様の御為に大兵を率いて駆けつけてきた義將』に他ならない。

「それよりも左衛門督殿じや。急ぎ京へ戻らねば……」

「我らは如何に致しましょう」

「久秀めを城の外へ出すわけには行かぬ。儂と京へ戻るのは供回りの者だけでよい。残りはこのまま城を囲んでおれ」

「畏まりました」

その日のうちに、輝虎は京へ戻つていった。

＝＝＝

十一月十四日。

京・三好長慶邸

この日、義輝は朝から険しい顔をしていた。

「で、どうこいつもりじや。左衛門督」

「どうもこうも、某は上様の言いつけ通りに論功行賞の取り纏めを行つただけにござります」

「命じはした。されど、誰をどのよくな職に就けるか、また所領を宛がうかは余の決める」とぞ」

「承知いたしております。故にこれはただの草案、某の意見と考えて頂ければ結構にござります」

義景は嘯く様に言つた。このよつなことで、何故に呼び出されねばならないのかと思つてゐる。その態度が輝虎の感に障る。

「と、いふことだが、輝虎

「納得が行きませぬ！どういつづつもりで自身を管領代としたか、訳を訊かせて頂きたい！」

強い口調で輝虎が義景を問い合わせた。対する義景は悪びれもなく捲^{まく}し立てるように反論する。

「これまで上様を守護し奉つたは儂じゃ。如何に上洛が叶つたといえ、今後も上様を守護せねばならぬ。されど上様を守護する者はそれなりの職が必要となる。故の管領代じゃ。それよりも松永攻めは如何なされた。まさか放つたまま戻つてきたのではあるまいな」「城は…包囲してござる」

「包囲じゃと？ならばこのよくなとこりで油を売つてないで、早々に久秀めの首を獲つて参られよ。上様に献上するとの言葉、まさか偽りではないでしょうな？」

「偽りなどではない！久秀の首などすぐに獲つてくれるわー！」

「おおつ！流石は上杉殿じゃ。楽しみにしておりますぞ」

義景の人を小馬鹿にしたような態度に、輝虎の怒りは募つていく。義輝の目の前でなければ、刀に手をかけていたところだ。

「止めい！」

義輝が一喝し、場を収める。

義景の態度は気にくわぬが、役田の途上で戻つてきた輝虎も悪い。どうひらかを咎め立てすることは出来なかつた。

「上様、織田上総介様、松平家康様がお戻りのようです」

そこへ、信長と家康の帰還が報せられた。

「あやつらが？まさか同じ用件ではあるまいな」

うんざりするような声で、義輝が言った。しかし、戻ってきた以上は会わないわけにはいかない。義輝は一人をこの場へ呼ぶように指示をする。

「これは上杉殿、朝倉殿も、一緒に

信長は何食わぬ顔で入つてくれる。後ろで家康はその光景を窺つみ、一礼し、信長の隣へ座る。

「で、何故に戻った。そなたも輝虎と同じ用件か？」

同じ？ ああ 朝倉殿が論功行賞を進めてしるといふ

報してくれたのは織田のであるしな」

輝虎の言葉に反応し、“お前の所為か”と言わんばかり義景が信長を睨み付ける。対する信長は義景を一瞥することもなく、

「差にあらず、我々は摂河泉の平定が済んだことを上様に御報せに参つただけにて」

「何じゃと!?

これには義輝を含め、輝虎も義景も驚いた。織田軍が摂津へ侵攻してまだ一月も経っていないのだ。

「そもそも戦が終わつてもいないのに恩賞の話など不謹慎極まりない」

「で…では、織田殿は何故に儂に報せたのだ？」

「大事ではあると思ったからこそ、御報せ致した。されど我らが任務は三好・松永の討伐。上杉殿ならばそれくらいの分別があると思っていたが……」

信長の言に、輝虎は言葉を失つた。血の気が上つて我を忘れ、主命を軽んじた己を恥じたのだ。

「上総介、義継は…三好三人衆は如何した」

「三人衆は恥も外聞もなく四国へ逃げたようにござります。義継めは、降伏いたしました」

「降伏しただと！？」

「はつ。我が陣内にて預かっておりますが、お会いになりますか？」

信長は京よりの報せを受けた後、すぐさま総攻めに懸かつた。また佐久間信盛を和泉より呼び戻し、若江城へ使者を送つて開城を迫つた。信長は佐久間勢を帰還させることで三好方へ和泉の平定が終つたと勘違いさせ、戦意を削ぐ作戦である。これが、功を奏した。

その日のうちに、義継は助命を条件に降伏した。

「助命じゃと…？上様に諮りもせず何を勝手な！」

自身が勝手に論功行賞を進めたことなど忘れたように、義景が信長に噛み付く。これには先ほどまで義景を糾弾していた輝虎も同調する。義継は三好の当主であり、助命など以ての外と考えているのだ。義輝もそう思つている。

「義継にはまだ使い道がある」

信長は反論する。

「三好・松永らは未だ健在。四国の領土が手付かずのをお忘れか。義継が我らの掌中なれば、三好を割るなど造作もなき」と

確かに此度の義輝の上洛で三好家の版図は大きく失われた。山城、丹波、大和、摂河泉の六力国だ。ただ天下人の地位にあつた三好家の版図は広大であり、本貫の阿波に讃岐、淡路の三力国は保持している。信長はその三好領を討ち平らげるのに、義継が使えると主張した。

先々まで考えている信長の言葉は、幾度となく義輝の心を打つた。

「上様。いくら京畿の安定に力を注げども四国に三好がある限り、上様の御命を脅かすは必定にござります。近いうちに海を渡り、これを誅伐すべきと存じますが」

「よう申した！まったくもつて上総介の申す通りよ」

義輝は膝を打つて喜んだ。三好が滅びることこそ、長年に亘つて義輝が願つてきたことなのだ。

「義継が事は構わぬ。当面は生かすことじよつ」

「御意のままに」

「輝虎。こうなれば大和の平定、急がねばなるまいぞ」「はつ。すぐに陣へ立ち返り、信貴山を攻め落とします」

輝虎は慌ただしく退出する。

「左衛門督。論功行賞の件はやはり余が行づ。今まで取り纏めたものだけ、提出せよ」

「はっ、お役に立てますのであれば……」

不快げな口調で義景が渋々返事をする。そのまま信長の方を見る」となく、義景も退出していく。

「まつたく、困つたものよ」

義輝が大きな溜息を吐ぐ。せつかく上洛したといつに身内で諍いが起つては堪つたものではない。

「上総介。そなたの働きには感謝しておる。輝虎が戻るまでの間、暫し洛中にて寛ぐがよい」

「はっ。では洛中の警護に当たらせて頂きます」

「うむ。頼んだぞ」

義輝は満足そうに頷いた。信長が輝虎と義景の二人より優位に立つた瞬間であった。

この三日後のことである。信貴山城と多聞山城が落ちたのは、自落であった。本家の三好が降伏し、勝つ見込みがなくなつたからである。これは上杉勢が落としたと言うより、先んじて義継を降伏させた信長の功であるとも取れた。

ただ松永久秀親子はどういう手を使つたのか、城内から姿を消していた。しかし、これにより上方一帯から三好・松永の勢力が一掃されたことになる。

義輝の完全勝利であった。

【
続
く

第十一幕 幻の論功行賞 - 邪心に芽生えた凡将 - (後書き)

次話投稿です。

年末のバタバタで書き上げるのも大変です。（まあ好きでやつていいのですが）上洛編は残り一話、ぎりぎりになるかもしれませんが、今年中に更新します。また本編中にもありますが、次章は「三好征討編」（タイトルは変更するかもしれません）です。義輝が海を渡ります。

また前回、家康の名を元康と記述していましたが、現時点（1565年）で既に家康の名乗りであったために修正しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4359y/>

剣聖將軍記

2011年12月29日22時45分発行